



TITLE:

2004年スマトラ沖地震・津波一般
報道情報アーカイブス: アチェ、ニ
アス復興のあゆみⅢ 2005年3月28日
-4月29日

AUTHOR(S):

CITATION:

2004年スマトラ沖地震・津波一般報道情報アーカイブス: アチェ、ニアス復興のあゆみⅢ 2005年3月28日-4月29日. CIAS discussion paper No.54: 2004年スマトラ沖地震・津波復興史Ⅰ 2015, 54: 275-361

ISSUE DATE:

2015-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/228639>

RIGHT:

© Center for Integrated Area Studies (CIAS), Kyoto University

2004年スマトラ沖地震・津波
一般報道情報アーカイブス

アチェ、ニアス 復興のあゆみⅢ

2005年3月28日～4月29日

アチェ、ニアス復興関連情報(3)

2005年3月28日～4月29日

2005年3月10日Web公開

<http://homepage2.nifty.com/jams/aceh03.html>

ニアス沖地震 被害の状況

(1)地震・余震・噴火

■ 3月28日、ニアス島沖で地震発生

「あのツナミを考えるだけで怖い」——。約30万人の死者・不明者を出したスマトラ沖大地震による大津波から3か月。復興に向けて歩み出していたインド洋沿岸の人たちを再び悪夢が襲った。震源に近いインドネシア・ニアス島では多くの建物が倒壊した。闇の中を逃げ惑う人々。飛び交ううわさでパニックになり、避難中の交通事故で死者も出た。現地で暮らす日本人の間では、前回の教訓を生かして、独自の「連絡網」で安否を確認し合う人たちもいた。(毎日新聞 2005.3.29)

■ 日本の専門家、ニアス島沖地震で余震の可能性を指摘

山本雅博地震津波監視課長は、3月28日の地震にさらなる余震がある可能性があるとして述べた。M8.0以上の地震のあとには余震が起る可能性が高いという。(Jakarta Post 2005.3.29)

■ 30日までに28回の余震

揺れで崩壊する住宅も目立つ。強い余震が続いている。米地質調査所によると、3月30日午前8時過ぎまでに起きたマグニチュード5以上の余震は28回となった。ニアス、シムル両島周辺の深さ20～30キロの震源が多い。(朝日新聞 2005.3.30)

■ スマトラ沖でM6.4の余震

米地質調査所(USGS)によると、3月28日深夜のスマトラ島西沖自身の余震と思われる地震が30日午後11時19分(日本時間31日午前1時19分)、スマトラ島北部の西沖を震源に、大きな地震があった。地震の規模はマグニチュード(M)6.4。震源の深さは22キロ。USGSによると、31日未明の余震は、M8.7だった28日の本震と同じ断層を震源にし、深さもほぼ同じという。(CNN.co.jp 2005.3.31)

■ 余震700回以上

気象当局者によると、被災地周辺では3月31日までに700回以上の余震を記録。シムル島沖では30日深夜、マグニチュード(M)6.1の強い揺れがあった。(朝日新聞 2005.3.31)

■ 研究者らが大地震の可能性を指摘、住民に動揺が広がる

スマトラ島北部の被災地などでは、12月の大津波に続く震災に、住民の間では地震や津波の続発を恐れる声が強く、高台に依然避難したまま暮らす人々も多い。今回の震源地よりも南方の海域で近い将来、大地震が起きる可能性が指摘されており、スマトラ島中部の住民にも動揺が広がっている。日本を含む各国の研究者が、1861年以降、大地震が起きていないスマトラ島中部沖のスンダ海溝沿いで地震が起きる可能性を指摘。西スマトラ気象台のジョネド・ブルワント所長は、地元テレビで「ニアス島南方にあるムンタワイ諸島の住民は、大地震に備え安全な場所へ移動すべきだ」と警告した。(産経新聞 2005.4.2)

■ スマトラ島西部沖などでまた複数の地震、インドネシア

香港——米地質調査所(USGS)によると、3月28日に大きな地震が起きたインドネシア西部、スマトラ島西部沖合などで4月7日から8日にかけて、複数の地震が発生した。現段階で、負傷者の有無、建物の損壊などの被害報告などは入っていない。AP通信が報じた。最初の地震は、ニアス島周辺で7日、発生。地震の規模はマグニチュード(M)5.6と推定。5時間後、同島近くで再び、M5.0の地震が起きた。ニアス島北部にあるシムル島でもM4.9の地震があった。8日午前には、インドネシア北東部の海域でM5.5の地震が起きている。(CNN.co.jp 2005.4.8)

■ 西スマトラのタラン山が噴火(タラン山が噴火の項目を参照)

■ タンクバンパラフ火山が警戒レベルに

西ジャワ州バンドン県にあるタンクバンパラフ(Tangkuban Parahu)火山の活動が活発化してきている。近隣にある自然公園は一般入場者の入園を閉鎖した。火山局長のスロノ博士は、タンクバンパラフ火山の状況が4月13日に警戒レベルに引き上げられたことを認めた。4月13日午前0時から午前5時48分までにタンクバンパラフ山で火山性の地震が数百回記録されたため、4月13日午後1時、火山のレベルを警戒レベルに引き上げたもの。スロノ博士によると、タンクバンパラフ山は12の噴火口を持ち、そのうち4つは十分な直径を持っているため、たとえ噴火したとしても噴火の影響はそれほど大きくならないとのこと。(Tempo Interaktif 2005.4.13)

■ さらにアナッククラカトア火山とタンクバンパラフ火山が活性化

周辺住民2万5,000人が避難する事態を招いた4月12日のスマトラ島タラン山の噴火がさらに2つの火山を活性化させた。スマトラ島の南端にあるアナッククラカトア(Anak Krakatoa)火山とジャワ島のタンクバンパラフ火山に設置されたセンサーが火山活動の活性化を検知した。政府の火山学者シャムスル・リザルは、これらの火山の活性化がスマトラ島周辺を震源とした一連の地震と関連して一種のドミノ現象のようにして起こった可能性があるとの見解を示した。政府はすでに両火山に対する一般人の立ち入りを禁止した。しかし、周辺住民の避難勧告は出されていない。(Jakarta Post 2005.4.13)

■ インドネシアで9つの火山が活発化

ジャワ島西部バンドン市近郊にあるタンクバン・パラフ山(標高2076メートル)や、ジャワ島とスマトラ島間のスンダ海峡にある火山島アナック・クラカトアでも、火山活動によるとみられる地震が起きている。両火山とも人気の観光地。4月15日朝にはバンドン周辺でマグニチュード(M)5程度の地震が発生した。政府は同日までに、両火山の警戒度を上から2番目の「警戒」に引き上げ、観光客らに火山に近づかないよう呼びかけている。政府によると、活発化している火山は、このほかスメル(ジャワ島)、エゴン(フローレス島)、カランエタンとロコン(スラウェシ島)など9つにのぼる。昨年12月と今年3月に起きた大地震の震源域に近いスマトラ島周辺では、M5~6の地震が頻発している。余震とみられるが、大きな揺れのたびに住民が家を飛び出し、高台に逃げるなど「パニック状態」(地元メディア)が続いているという。(朝日新聞 2005.4.15)

■ 大統領、全国で早急な防災対策をとるよう指示

ユドヨノ大統領は4月13日、全国の州知事を集め、早急な防災対策を命じた。24日に約50カ国の首脳らが集うアジア・アフリカ会議(バンドン会議)の50周年記念式典がバンドンで開かれるだけに、神経をとがらせている。津波対策では早期警戒システムの構築でドイツ政府と先月調印し、10月までに観測網を設ける計画を進めている。しかし、主要紙コンパスが15日の社説で、火山活動の警戒にも予算を回すように主張するなど、取り組み強化の要求は強い。政府や議会には、被災が一段落したこともあり、津波警戒システムの維持管

理に必要な年間6,000万ドル(約65億円)の負担に消極的な声も上がっていた。「数百年に一度」といわれる大災害で社会不安が加速し、経済活動などに大きな影響が広がることも懸念されるため、政府は防災対策の強化に追われている。(朝日新聞 2005.4.15)

■ インドネシア・スマトラ沖でM6.3の地震

インドネシア・スマトラ島北部西方沖のニアス島付近で4月16日午後11時40分(日本時間17日午前1時40分)ごろ、大きな地震があった。米地質調査所によると、マグニチュード(M)6.3で震源の深さは約43キロ。地元ラジオによると、建物の大きな被害や死傷者はなかったもようだが、3月28日にM8.7の地震で大きな被害を受けたニアス島などで、パニックに陥った住民が高台などに避難した。インドネシア政府の災害対策本部によると、3月28日の地震で17日までに確認された死者は692人となり、計8万人以上が避難生活を送っている。(産経新聞 2005.4.17)

(2)被害規模の把握

■ ニアス島で数十人死亡か

スマトラ島沖で3月28日午後11時10分(日本時間29日午前1時10分)ごろ、大きな地震があった。同国気象地理庁によると、震源地は同島アチェ州シムル県南東約90キロのインド洋で、震源の深さは約30キロ、規模はマグニチュード(M)8.2と推定される。同島近くのニアス島で数十人が死亡したとの情報もある。各地で津波や余震を恐れた住民が戸外に飛び出し、一時パニックに陥った。(読売新聞 2005.3.29)

■ グヌンシトリで建物の大半が倒壊、多くの住民が生き埋めか

大きな被害が伝えられるインドネシア・ニアス島では、昨年12月のインド洋大津波に続く恐怖の再現に住民らがパニック状態となった。AP通信によると、同島東岸の中心地グヌンシトリでは、建物の大半が倒壊し、多くの住民が生き埋めになっている模様だ。インドネシア国軍によると、空港付近だけでも約500軒の建物が全壊。市全体では少なくとも1万~1万5000人が避難しているという。(毎日新聞 2005.3.29)

■ ニアス県副知事「300人が死亡」

ニアス県副知事アグス・メンドロファは島の50万人の住民のうち少なくとも300人が死亡したと伝えている。県政府のあるグヌン・シトリは家屋の80%が倒壊し、数千人が瓦礫に埋まったという。(Jakarta Post 2005.3.29)

■ ニアス島の地元警察、「数百人死亡の恐れ」

被害が出ているニアス島の地元警察は、ロイター通信に対し、同島の主要都市で多くの建物が倒壊した、とした上で、「犠牲者の数は今のところ確認できないが、数百人が死亡した可能性が十分ある」と述べた。今回の震源地は、昨年12月26日に起きたM9.0の地震の震源地に非常に近い。前回の地震に伴う津波では、30万人近い犠牲者と行方不明者が出た。(ロイター 2005.3.29)

■ 副大統領、死者1,000~2,000人と推測

■ 副大統領「ニアス島の地震で死者は2,000人の可能性」

インドネシア副大統領ユスフ・カラは3月29日、3月28日の地震でニアス島で2,000人が死亡した可能性があるとの見通しをBBCラジオのインタビューに答えて述べた。現在、ニアス島地方政府関係者と警察からの続報を待っているところとのこと。(Jakarta Post 2005.3.29)

■ 副大統領、「1,000人から2,000人が死亡」

ユスフ・カラ副大統領は英BBCラジオに対し、震源に近いニアス島で家屋など多数が倒壊し、「1,000人か

ら2,000人が死亡した」と語った。地元当局者は322人が死亡したとしている。ユスフ副大統領らが地元当局者の話として語ったところなどによると、ニアス島グヌンシトリ市では揺れが約15分ごとに感じられ、建物の約80%が倒壊、数千人が下敷きになった可能性があるという。住民は津波を恐れて高台へ避難。この中には医療関係者も含まれ、負傷者が手当てを受けられない状態になっている。国営アンタラ通信によると、空港の滑走路が被害を受け、島内の一部で通信網や電力が途絶している。(読売新聞 2005.3.29)

■ ニアス島で1,000～2,000人死亡か

大きな津波被害はなかった模様だが、震源から近いニアス島では多くの建物が倒壊。同国のユスフ・カラ副大統領は地元ラジオ局に「(ニアス島で)1,000～2,000人が死亡したようだ」と語った。スマトラ島での被害などは明らかになっていない。カラ副大統領は、ニアス島最大の町であるグヌンシトリでは「建物の80%が全半壊したと見られる」と語った。ニアス島での死者数推計は倒壊した建物の数に基づくもので、遺体が確認されたわけではないという。ロイター通信によると、グヌンシトリの人口は約2万7,000人。一方、AP通信によると、同島の別の当局者は、人道援助団体からの報告として296人が死亡したと地元ラジオ局に語った。スマトラ沖大地震では、インド洋沿岸を大規模な津波が襲い、死者・行方不明者が計約30万人に上った。ニアス島ではこの際、少なくとも340人が死亡し、1万人が家を失ったという。(毎日新聞 2005.3.29)

■ 災害対策本部、ニアス島で死者 330人を確認

■ 災害対策本部、330人の死亡を確認

インドネシア政府は死者が1,000人以上になる可能性があるとしている。国軍中心に救援活動が続けているが、ニアス島の空港が大きな被害を受け、大型機の発着ができない。街と村落を結ぶ島内の多くの橋や道路が寸断され、停電や通信事情も悪くなっているため、災害対策本部が確認した死者数は30日朝の時点で330人程度にとどまっている。このうち約230人がニアス島、約100人がシムル島での死者。(日経新聞 2005.3.30)

■ スマトラ沖地震、死者330人を確認

インドネシア政府は3月29日、スマトラ島西沖のインド洋で28日起きたマグニチュード(M)8.7の大地震による死者がニアス島中心に1,000人以上になる可能性があるとした。インドネシア災害対策本部によると、330人の死亡を確認。3,000人以上が避難民になっている。(日経新聞 2005.3.29)

■ 北スマトラ州当局、シムル島で 25人の死亡を確認

■ ニアス島で不明者多数 シムル島では25人の死亡を確認

インドネシア政府によると、死者が2,000人に上る可能性があるスマトラ島西方沖のニアス島で、これまでに300人以上の遺体を収容。北スマトラの災害担当者は同島で約1,000人が死亡したと述べた。ニアス島北方のシムル島でも少なくとも25人の死亡が確認され、被災地域は今後広がりそうだ。(神戸新聞 2005.3.30)

■ 政府、シムル島で 100人死亡を確認、ニアス島と合わせて430人

■ ニアス島中心に死者430人に

スマトラ島西岸沖で3月28日深夜(日本時間29日未明)に発生したマグニチュード(M)8.7(米地質調査所発表)の大地震で、インドネシア政府当局者は29日、震源地に近いニアス島で330人、同島北方のシムル島で100人の死亡を確認したことを明らかにした。AFP通信が伝えた。また、インドネシア赤十字社は同日、ニアス島での死者が1,000人を超すと推測されるとの声明を発表した。ニアス島では多くの建物が倒壊し、島民が下敷きになったとみられることから、犠牲者は同島を中心にさらに増える可能性もある。(毎日新聞 2005.3.29)

■ 震源地近くで数百人下敷き、救出難航 死者430人確認

インドネシアのスマトラ島沖で28日深夜に起きたマグニチュード8.7の大地震は29日、同国政府の確認した犠牲者数が約430人に達した。インドネシア政府の災害対策本部によると、29日夜までにニアス島で約330人、シムル島で約100人の遺体が確認された。同本部は「死者数は1,000人を超える可能性がある」とロイター通信に伝えた。犠牲者の見通しを当初、最大で「2,000人」としたカラ・インドネシア副大統領は、根拠を「ニアス島の市街地で家屋が7～8割損壊した状況から推測した」とした。(朝日新聞 2005.3.29)

■ 政府当局、ニアス島で死者1,000人と発表

■ スマトラ沖地震 ニアス島1,000人以上死亡か

インドネシア北西部のスマトラ島沖で3月28日深夜(日本時間29日未明)に起きたマグニチュード(M)8.7の大地震の被害について、インドネシア政府当局者は29日夜、430人以上の死亡を確認したことを明らかにした。AFP通信が伝えた。一方、ロイター通信によると、インドネシアの災害センターは、震源地近くのニアス島で1,000人以上が死亡した恐れがあると述べた。ニアス島では、がれきの下に多くの住民が埋まり、同島北のシムル島は高さ3メートルの津波で大被害が発生した恐れもあるが、状況把握が難航している。政府当局者によると、ニアス島で330人以上、シムル島で100人以上の死亡を確認したという。両島には29日、インドネシア赤十字の救援チーム12人が到着。本格的な救助活動に入った。

29日は政府高官が上空からニアス島を視察。「最初の報道よりは、壊滅的な被害ではないようだ」と感想を述べた。しかし、救援チームを現地入りさせた赤十字幹部は、地元ラジオ局に対し「人的・物的被害は、はるかに大きいかもしれない」と語った。ユスフ・カラ副大統領も同日午前の段階で、「1,000人から2,000人の死者が出ている」との見通しを示した。同島の当局者は、地元メディアの取材に対し、島の最大都市グメンシトリで8割の建物が倒壊したとして「多くの住民が下敷きになっている」と緊急救助を求めた。負傷者は数千人に上り、病院の機能はマヒ状態で「医薬品も医師も不足し、治療を受けられない」と話している。(東京新聞 2005.3.29)

■ スマトラ沖地震、死者1,000人に

インドネシア・スマトラ沖のニアス島で3月28日深夜に発生したマグニチュード8.7の地震による死者は、約1,000人に上った。当局者が29日、明らかにした。アチュ・北スマトラ防災センターの広報官はロイター通信に対し、「ニアス島で1,000人前後が死亡したとみられる」と語った。また、北スマトラ州のヌルディン知事は、州都メダンで報道陣に対し、「正確な死者数は確認できないが、1,000人前後か、それ以上が犠牲になった」と語った。同知事によると、救助活動は悪天候のため難航しているという。(ロイター 2005.3.29)

■ スマトラ沖地震の死者1,000人に

ロイター通信によると、インドネシア・スマトラ島沖のインド洋で3月28日深夜(日本時間29日未明)に発生した大地震による死者は、29日深夜までの同国当局の集計で、約1,000人に達した。(読売新聞 2005.3.30)

■ 犠牲者数・行方不明者数の把握は迷走中

3月28日に発生した地震で、犠牲者数の把握が困難を極めている。その背景には、地震に襲われた地域が海をはさんで遠く隔たり、地震によって通信網や電力網が遮断されていることがあるが、ジャカルタにおける省庁間の連携の欠如によってさらに混乱が増している。地方官や省庁の官吏が把握している犠牲者数には400～1,000人と開きがある。ユスフ・カラ副大統領は3月29日、建物の倒壊の程度や規模に基づいて、犠牲者数は2,000人に昇るだろうと語った。保健省のエヴァ博士は犠牲者数を422人としており、その内訳はニアス島のグメンシトリとテロックダラムでそれぞれ220人と100人、シムル島で100人、シボルガで2人となっている。リザル・ヌルディン北スマトラ州知事は犠牲者数を1,000人と見込んだが、それが何に基づ

いて算出された数字であるかは不明である。リザル州知事が数字を発表した数時間後、ニアス県副知事の
アグス・メンドロファはラジオ・エルシンタに対して犠牲者数を500人と伝えた。昨年12月26日の地震で
も犠牲者数の把握は迷走し、今回と同様の事態が起こっていた。地震発生から3ヵ月たった今も、犠牲者数
は12万6,390人から12万7,420人のあいだ、行方不明者は9万3,757人から11万6,368人のあいだとされて
いる。1月には、発表された犠牲者数が一気に2万人増加し、その後1万2,000人減少した日もあった。(AP
2005.3.30)

■北スマトラ州知事、ニアス島で死者321人を確認

■ニアス島で321人の死亡を確認、なお数百人が倒壊した家屋の下敷き

北スマトラ州知事リザル・ヌルディンは3月29日、ニアス島をヘリコプターで視察し、3月29日午後まで
に収容された遺体はニアス県の県都グヌンシトリで220遺体、南ニアス県の県都テルックダラムで101遺
体、計321遺体であること、また、倒壊した家屋の下敷きになっている犠牲者が数百名いると見られること
を明らかにした。北スマトラ州知事一行は、グヌンシトリで夜になったためメダンに戻ることができず、3
月30日朝にメダンに戻る予定。(Waspada 2005.3.30)

■アチェ州知事代行「シムル県とアチェシンキル県で住民数百人が犠牲に」

アチェ州知事代行のアズワル・アブバカルは3月29日、3月28日夜の地震により、同州のシムル県とアチェ
シンキル県で住民数百人が犠牲になったと述べた。(Acehkita.com 2005.3.29)

■バニャック諸島で300人死亡の情報

■震源近くのバニャック諸島でも300人死亡の情報

インドネシア・スマトラ島沖のインド洋で3月28日起きた大地震で、同国の災害当局者は30日、ロイター
通信に対し、ニアス島とシムル島の間にあり、震源地に近いバニャック諸島で「200～300人が死亡したと
の報告を受けた」と述べた。死者数は同国当局の集計で約1,000人に達したとされるが、今後さらに増える
恐れが大きい。国軍は同日、ニアス島に工兵部隊1,000人以上を派遣したものの、重機の搬入が遅れ、行方不
明者の搜索作業は順調に進んでいない。インドネシア政府によると、ニアス島ではこれまでに約330人の
遺体が収容されたが、さらに400人以上の住民が行方不明とされる。(読売新聞 2005.3.30)

■バニャック諸島で200～300人死亡か

スマトラ沖地震で被害が集中したインドネシアの災害対策本部は3月30日、震源域に最も近く被災状況
が不明だったスマトラ島北西沖のバニャック諸島の死者が200～300人にのぼる、とロイター通信に伝え
た。すでに近くのニアス島などでは約400人の犠牲者が確認されている。崩れた家屋の下に生き埋めになっ
たまの住民が多数おり、この日本格化した搜索と救援活動とともに犠牲者数は膨らむ見通しだ。(朝日新
聞 2005.3.30)

■ニアス島でオーストラリアの7人安否不明

震源に近いニアス島周辺ではオーストラリア人7人の安否がわからなくなっている。安否不明のオース
トラリア人はサーフィンのためニアス島周辺の島に滞在していたとみられる。当初13人が安否不明となっ
たが、現在までに6人の安全を確認。なお7人と連絡が取れないため、在インドネシア豪大使館が調査チー
ムを現地に派遣した。(日経新聞 2005.3.30)

■国連、死者518人を確認

■スマトラ沖地震、518人死亡を確認

インドネシア北部バンダアチェに駐留する国連の救援チームは3月30日までに、28日のスマトラ島西沖
大地震で518人が死亡したことを確認した。被災地ではなお多くの住民が家屋の下敷きになっており、死

傷者数はさらに増える可能性がある。インドネシア保健省によると死者はニアス島やシムル島で確認されているが、7割はニアス島に集中しているという。被災地では建機不足などで救助作業が難航。当局は安否の確認作業に手間取っている。カラ副大統領は30日、あらためて死者は1000～2000人に達する可能性が高いと語った。(日経新聞 2005.3.30)

■ 国連の支援調整官、500人の死亡を確認

国連の支援調整官によると、3月28日の地震による死者は、少なくとも500人が確認されており、さらに増えるおそれだという。国連の支援活動を集約するマスード・ハイダー人道調整官は、スマトラ島西沖のニアス島を中心に少なくとも500人以上の死亡が確認されたと話した。(CNN.co.jp 2005.3.31)

■ 犠牲者数の情報が錯綜 350人～2,000人

3月28日に起きたスマトラ沖の地震では、犠牲者数をめぐる情報が発生から4日目の31日になっても錯綜。約350人から2,000人まで、さまざまな数字が飛び交う事態となっている。被災地が離島に集中し、捜索活動や情報の収集が難航しているほか、地方行政当局の情報が正確に中央政府に伝わっていないことなどが原因とみられている。発生3ヵ月以上を経た現在も正確な犠牲者数を把握できていない昨年12月のスマトラ沖地震と同様の事態が起こりつつある。政府が収容した遺体数として公表しているのは、被害が集中したニアス、シムル両島などでの計355人。一方、AP通信によると、犠牲者数は計423人(保健省当局者)で、内訳はニアス島の2つの都市で約321人、シムル島で約100人という。(河北新報社 2005.3.31)

■ 国連、死者 624人と発表

■ 国連開発計画、死者624人と発表

国連開発計画(UNDP)バンダアチェ事務所は3月31日、スマトラ島西沖で起こった大地震の死者は624人に達したことを明らかにした。UNDPによると、現時点の死者数の大半はニアス島。しかし、政府の災害対策本部が確認した遺体数は334人で、2日前からほとんど変わっていない。(日経新聞 2005.3.31)

■ 国連広報官、死者626人を確認 バニャック諸島からの報告はない

対岸スマトラ島の主要都市バンダアチェにいる国連の広報官は3月31日夜、朝日新聞の問い合わせに対し、これまで確認された死者数は626人とした。内訳はニアス島が600人、シムル島が17人、スマトラ島が9人で、バニャック諸島からの報告はない。犠牲者数が増えるのは必至と見られ、政府当局者は「1,000人を超える」としている。(朝日新聞 2005.3.31)

■ 死者数、国連は600人、地元行政当局は330人と発表

国連によると、同島ではこれまでに約600人の死亡が確認されたとしているが、地元行政当局は収容された遺体は約330人と発表しており、情報の混乱は依然として続いている。(毎日新聞 2005.3.31)

■ アチェ州副知事、アチェ州のスマトラ本島側で 14人死亡と発表

■ スマトラ本島で死者14人 避難民2万人、道路寸断

スマトラ沖地震の発生から4日目の3月31日、ニアス島などインド洋に浮かぶ島々だけでなく、スマトラ本島のアチェ州西海岸も大きな被害を受け、住宅倒壊などで少なくとも14人が死亡、2万人近い避難民がいることが分かった。アチェ州のアズワル副知事が共同通信に語った。昨年12月の地震の津波の最大被災地であるアチェ州西海岸は、今回の地震で再び幹線道路が寸断され、食料や医薬品を届ける救援活動は難航している。副知事によると、震源に近い西海岸のアチェシンキル県では12人の遺体が収容され、約1万8,000人の避難民が救援物資を待っている。残りの犠牲者2人は周辺の別の県だという。(河北新報社 2005.3.31)

■ 地元治安当局、455人の死亡を確認

■ 地元治安当局、455人の死亡を確認

犠牲者数の記録を担当している地元治安当局のザイヌリ・ルビス大佐によれば、455人の死亡（ニアス島424人、アチェ州31人）が確認されたとのこと。インドネシア政府は、犠牲者数の予測を当初発表した2,000人から大幅に引き下げ、最終的な犠牲者数は500人前後になるだろうと見込んでいる。（AP 2005.4.1）

■ ニアス島で484遺体確認 国連は1,300人死亡と推定

インドネシア国家警察の報道官は4月1日、スマトラ沖地震の最大被災地ニアス島で同日までに484人の遺体を確認、2,560人以上が負傷したと述べた。同島では依然、倒壊した建物の下敷きになったままの人が多くいるとみられている。フランス公共ラジオによると、国連当局者は同島を中心に1,300人が死亡したと推定されると語った。政府の各機関が調べた被災状況を最終的にまとめる災害対策本部の公式集計では、同日までに確認された死者は計394人としている。（産経新聞 2005.4.1）

■ インドネシア警察、死者424人と発表 外国人8人の安否が不明

インドネシア国家警察はニアス島中心に死者424人を確認、負傷者2,600人以上、壊れた家屋は1,936軒となったと発表した。外国人もオーストラリア人やスウェーデン人など8人の安否が不明だという。（日経新聞 2005.4.2）

■ 国連、死者1,300人、避難民3万人と発表

■ スマトラ島沖地震の死者、1,300人に

3月28日のスマトラ島沖地震の被災地で救援活動を行っている国連当局者は4月1日、「死者数は1,300人前後に達している模様だ」と語った。死者の大半は、最大の被災地と見られるニアス島の中心都市グヌンシトリに集中しているという。ただ、通信網と交通網の寸断により、被害の全容は依然として明らかでない。（読売新聞 2005.4.1）

■ スマトラ沖地震、死者1,300人以上・国連事務所

国連人道問題調整事務所（OCHA）バンダアチェ事務所は4月1日、スマトラ島西沖地震の死者は1,300人以上に達するとの見通しを明らかにした。インドネシア政府の救助の遅れもあって死者は日増しに増大。国際的な批判が高まる中、政府は緊急救助隊を創設するなど地震対策を強化する方針を明らかにした。インドネシア政府は数百人規模の緊急救助隊の創設や早期警報システムの構築、全国160カ所での地震測定所の設置などを決めた。（日経新聞 2005.4.2）

■ スマトラ島沖地震で「3万人が避難民」…国連

3月28日に起きたインドネシア・スマトラ島沖地震の被災地で救援活動を行っている国連当局者は4月2日、最大の被害が出たニアス島や北方のシムル島などで「少なくとも3万人が家を失うなどして避難民となっている」と語った。国連によると、比較的被害の少ないと見られていたシムル島でも約8割の建物が全半壊していたことが判明。避難民の数はさらに増える可能性がある。被災地では水や医薬品の不足が依然深刻で、伝染病の発生も懸念され始めた。（読売新聞 2005.4.2）

■ ニアス島、5万人避難生活

昨年12月のスマトラ沖地震の津波で壊滅的被害を受けたスマトラ島北部を再び大地震が襲ってから4月4日で1週間。詳細な被害実態は依然不明だが、最大被災地のニアス島などで少なくとも5万人が避難生活を続けている。政府は、昨年末の被災地アチェ州を中心とする防災や復興の計画草案を3月26日にまとめたばかりだが、今回の震災で大幅な防災対策見直しを迫られている。災害対策本部によると、3日までにニ

アス島を中心に500人以上の遺体を収容。被災地では、住民多数が倒壊した建物の下敷きになっており、死者数は最終的に1,000人以上に上る見通し。国連当局者は1,330人が死亡したと推定している。(神戸新聞 2005.4.3)

■ 国家警察、死者 560人、避難民 5万人と発表

■ スマトラ島沖地震、避難民5万人・死者560人以上確認

インドネシア国家警察は4月3日、スマトラ島沖地震の被災地の避難民は5万人近くに上ることを明らかにした。死者もニアス島中心に560人以上を確認した。同国家警察によると、避難民のうち3万人以上がシムル島やパニャック諸島。マグニチュード(M)6弱の強い余震が頻発しているため、山間部や高台に避難して自宅に戻れない島民も少なくない。また同国家警察は負傷者が2,816人に達したという。ニアス島では各国の救助チームが続々到着しているが、なお食料や重機の不足で救助活動が遅れている。(日経新聞 2005.4.4)

■ ニアス島の死者616人に

国家警察報道官によると、ニアス島での4月4日現在の死者は616人、重軽傷者は3,230人に達した。また、家屋6700戸以上、校舎147棟、教会105棟、イスラム礼拝所16棟などの倒壊も確認された。現在も多数の住民が倒壊した建物の下敷きになっており、死傷者数はさらに増える見通し。現地で活動する国連当局者は、「ニアス島や隣のシムル島での被災者数は合わせて15万人以上。早急な食料支援が必要だ」と語った。(読売新聞 2005.4.4)

■ ニアス島沖地震は死者771人、行方不明者50人

バフティアル社会相は4月10日、ニアス島沖地震の犠牲者数について、最新の報告では死者771人、行方不明者50人となっていることを明らかにした。社会相によれば、政府は被災者支援に真剣に取り組んでおり、寸断されていたニアス県グヌシトリと南ニアス県テルックダラム間の陸上交通は改善されたとのこと。また、現在、2隻の船がニアス島への援助物資を運んでいるという。(Analisa 2005.4.11)

■ ニアス島の避難民は2万3855人

北スマトラ州災害対策本部のナインゴランが4月10日に明らかにしたところによると、ニアス県での避難民は14郡で2万3,855人、南ニアス県では8郡で3,749人。ニアス県での損壊家屋・商店は2万1,720棟で、ほかに被害を受けた宗教施設は858棟、政府施設は28棟、学校は280棟。南ニアス県では損壊した家屋は7,444棟、宗教施設は149等、政府施設は50棟、学校は61棟。(Analisa 2005.4.11)

■ 3月のスマトラ沖地震、これまでの死者数が714人に

インドネシア・スマトラ島沖で3月28日に発生した大地震による死者数が、これまでに714人に達した。災害対策当局者が20日、ロイター通信に語った。死者は今後も増える見通し。また、地震で家を失った住民は14万人以上に上ったという。(ロイター 2005.4.20)

外部社会の対応

(1)インドネシア政府の対応

■ インドネシア大統領、オーストラリア訪問をキャンセル

スシロ・バンバン・ユドヨノ大統領はニアス島沖地震の発生を受けて、3月29日、今週予定していたオーストラリア訪問をキャンセルした。ソフヤン・ジャリル通信情報相はロイター通信に「ただちにトップレベルの緊急会合を開くことになる」と述べた。また、アンディ・マラランゲン大統領広報官はユドヨノ大統領

が一両日中にニアス島を訪問すると述べた。(Jakarta Post 2005.3.29)

■ シララヒ大統領代理、ニアスへ

ユドヨノ大統領の代理としてニアス島に派遣されることになったシララヒ氏は3月29日朝、医師7名と看護師とともにチャーター機でジャカルタからニアス島に出発した。しかし、ニアス島の空港の状況を見て北スマトラ州西岸のシボルガに目的地を変更した。ニアス島へはシボルガからヘリコプターを用いる。(Kompas 2005.3.29)

■ スマトラ沖地震、インドネシア政府の救援活動本格化

再び大地震に襲われたインドネシア政府は3月29日、カラ副大統領直轄の災害対策本部を設置、本格的な救援活動に乗り出した。震源地に近いスマトラ島西沖のニアス島に緊急援助チームを派遣、インドネシア国軍も動員する。ユドヨノ大統領は30日から予定していたオーストラリア訪問を急きょ延期し、近くニアス島など現地を視察する。(日経新聞 2005.3.29)

■ 医師と救援物資をシボルガ経由でニアスに輸送

インドネシア政府は第1陣として、医師20人と薬品、食糧などを積んだ輸送機を対岸のスマトラ島シボルガまで派遣し、ヘリに積み替えてニアス島に送る方針だ。(朝日新聞 2005.3.29)

■ 政府、医療チームと災害調査チームを派遣

政府は同日、ニアス島に医師22人からなる医療チームと災害調査チームを派遣、飲料水や食品、衣料品も送る。保健相や社会相も同行し、現地での被害状況を調査、ユドヨノ大統領は30日にも現地入りする予定。災害緊急資金として350億ルピア(約4億円)を充てる。ただ、ニアス島の空港のタワーや滑走路が地震で壊れているため、同チームの現地入りが遅れる可能性もある。このためインドネシア国軍がヘリコプター4機、輸送飛行機1機、小型機2機を順次投入するほか、艦船3隻を現地に急行させる。陸軍もアチェ州などから約800人の兵士を送り、復旧活動に当たらせる。(日経新聞 2005.3.29)

■ 国軍、ニアス島に艦船3隻を派遣

インドネシア国軍当局は3月29日、スマトラ島沖の地震で最大の被害を受けた同国ニアス島に救援物資を積んだ艦船3隻を派遣した。(時事通信 2005.3.29)

■ インドネシア海軍、軍艦4隻と120人をニアス島に派遣

ブラワン第一海区司令官ハリム准将は3月29日夜、リザル・ヌルディン北スマトラ州知事との会見を終え、インドネシア海軍が軍艦4隻をニアス島に派遣し、被災者の救出活動にあたることを明らかにした。また、空軍は120名の人員を派遣する予定。西スマトラ州パダンからはチュニャディン号が、また、アチェ州ムラボからはテルックパリング号ほか3隻がニアス島に向かう。どちらも3月30日朝には現地に到着する予定。(Tempo Interaktif 2005.3.30)

■ インドネシア陸軍、1,171名をニアス島へ派遣

ブキットバリサン地方軍管区司令官トリタムトモ・パンガベアン少将は3月30日、ニアス島の地震被災者の救援と復興活動支援のためにインドネシア陸軍から4大隊1,171名が派遣されると語った。倒壊家屋、崩壊した橋、ひび割れやずれた道路、宗教施設の建設の4部門にわかれて活動する。いずれの大隊もブキットバリサン地方軍管区所属の部隊。各部隊はブルドーザーなどの重機を携えてアチェ州ムラボからテルックバユル号で3月29日夜に出発し、3月30日朝に現地入りした。また、ユドヨノ大統領のニアス入りを抑え、大統領護衛部隊も木造船で3月30日に現地入りした。記者たちも同行している。港の近くの被害は軽微。崩壊している家は少なく、5軒に1軒が壊れている程度。被害を受けているのは二階建て以上の家屋が多い。

(Tempo Interaktif 2005.3.30)

■ 昨年のスマトラ沖地震の復興資金の一部を被災地救援に

インドネシア政府は3月29日、昨年12月のスマトラ沖地震の復興資金の一部を緊急支出し、今回の被災地救援に当たることを決めたが、ニアス、シムル両島で空港の管制塔が地震で損壊するなど、救援活動は難航している。ユドヨノ大統領は「12月の地震についての緊急支援期間を終えた直後に新たな地震が起きたことは衝撃だが、住民の救援に全力を挙げる」と表明。エンドリアルトノ国軍司令官は「負傷者の治療や通信網修復に当たる部隊を派遣した。食料や医薬品を届ける艦船も被災地へ向かう」と語った。（神戸新聞 2005.3.30）

■ ユドヨノ大統領、国際社会からの支援表明を歓迎

ユドヨノ大統領は3月29日、日本や米国など国際社会からの支援表明について「歓迎しており、高く評価する」と受け入れる考えを示した。（毎日新聞 2005.3.30）

(2) 国際社会・諸外国の対応

■ 国連はニアス島沖地震への対応を評価

国連緊急援助調整官室のヤン・イゲランド室長は、3月28日に発生したインドネシア西部沖地震の津波警報は2004年12月の地震と比べて迅速に行われたと評価した。また、救援活動も必要に応じて迅速に行われるだろうとした。イゲランド室長は自身の印象として、警戒の必要性和情報が各国に発信されただけでなく、各国政府から地元機関への伝達も行われていたと語った。29日夜明けとともにヘリコプターが震源地近くのニアス島とその周辺の状況を視察するために派遣される予定。（Jakarta Post 2005.3.29）

■ 諸外国からの支援申し込みが相次ぐ

インドネシア政府には日本のほか米国やオーストラリア、中国、スペインなどから支援申し込みが相次いでいる。インドネシア政府はアチェ州再建で財政的に手詰まり状態になっており、海外の支援も受けながら、現地の早期復興を目指す考えだ。（日経新聞 2005.3.29）

■ 近隣諸国がニアス島に医療チームを派遣

スマトラ島で復興支援をしていたフランスや、マレーシアの支援団体も現地に向かった。近隣諸国も支援に動き始め、オーストラリアやシンガポール政府は自国軍の医療チームなどをニアス島に派遣する方針だ。スイスのレスキュー隊も島に入る準備を進めている。（朝日新聞 2005.3.29）

■ スマトラ沖地震、各国の支援活動始まる

インドネシアのスマトラ島西沖で3月28日深夜（日本時間29日未明）に起こったマグニチュード(M)8.7の大地震で最大の被災地となったニアス島に、オーストラリアやシンガポール、マレーシアなど各国の支援チームが30日、相次いで現地入りし、救援活動を始める。日本の支援チームも現地に向け出発、難航している救援活動を後押しする。国連の各支援チームが現地入りしたほか、オーストラリアは艦船と救援機を現地に急行させた。シンガポールは40人、マレーシアも20人の支援チームを派遣、十数人で構成した日本の国際緊急援助隊や日本赤十字社の医療チームも同日中に現地に入る。米国や欧州各国、中国も救援チーム派遣を表明している。（日経新聞 2005.3.30）

■ シンガポールのヘリコプター、メダンに到着

3月29日午後7時30分、シンガポール軍の輸送ヘリコプター3機がニアス島沖地震の犠牲者救援のためメダンのポロニア空港に到着した。シンガポール政府は29日朝に北スマトラ州知事にヘリコプターの提供

を申し出ていた。(Tempo Interaktif 2005.3.29)

■ シンガポール、救援部隊や救援物資を輸送

シンガポールはヘリコプター3台を提供したほか、C130輸送機で救援部隊や救援物資を被災地に輸送している。(南洋商報 2005.3.30)

■ 中国政府、50万ドルの支援

中国政府はインドネシア政府に対し50万米ドル(約5,330万円)の支援を行い、中国赤十字社は30万米ドルの支援を約束した。(南洋商報 2005.3.30)

■ 日本政府、救急医療チームを派遣、自衛隊の派遣も準備

日本政府は11人の救急医療チームを派遣し、自衛隊の派遣も準備しており、1,500万円の支援を行う計画。(南洋商報 2005.3.30)

■ オーストラリア、救援物資を提供、医療支援も

オーストラリア政府は、インドネシア政府からの要請があり次第、多大な支援を行うと表明した。ハワード首相は100万オーストラリアドル(約8,260万円)に相当する物資を送り、仮設病院を設置し、空軍医療部隊を派遣すると語った。(南洋商報 2005.3.30)

■ ニュージーランド、救急医療隊をニアス島に派遣

ニュージーランドはすでに救急医療隊をニアス島に派遣し、けが人の救助を行っている。(南洋商報 2005.3.30)

■ スペイン、ヘリコプター3機などを提供

スペイン政府からも大使館を通じて北スマトラ州知事に対してヘリコプター3機を提供するとの申し出があった。さらに、現在マレーシアの海域を航行中のスペインの空母から上陸艇と船が提供されることも約束された。スペイン船はアチェでの人道支援活動を終え、帰国の途上にあった。(Tempo Interaktif 2005.3.29)

■ EU、調査員を派遣、金銭的援助の用意も

EUはすでに被災状況を調べる調査員を派遣しており、必要に応じて金銭的援助を行う用意もあるとのこと。(南洋商報 2005.3.30)

■ ロシアも支援の準備中

ロシアのプーチン大統領はインドネシアに打電し、犠牲者に対する追悼の意を示すとともに、支援の準備を行っていることを伝えた。(南洋商報 2005.3.30)

■ 米大使館が児童救援に10万ドルを提供

アメリカの政府高官によれば、ブッシュ大統領はインドネシアに軍を派遣し救援活動を行うことをすでに許可しており、巨額の支援を提供することを決定した。駐インドネシア・アメリカ大使館は10万米ドル(約1065万円)を供出し、ニアス島とシムル島の児童の救援に当てた。(南洋商報 2005.3.30)

■ 「追加支援の必要性を調査中」米大統領

ブッシュ米大統領は3月29日、スマトラ島西岸沖地震への米政府の対応について、「支援の申し入れを(イ

インドネシア政府に)しており、米政府職員が追加支援の必要性を調査中だ」と説明した。米務省のエレリ副報道官は、在ジャカルタ米大使館や米国際援助局の職員らが被害調査のためニアス島入りしたほか、駐インドネシア米大使が支援活動を行っている国際NGO(非政府組織)に10万ドルを拠出したと説明。国防総省と連携し、インドネシア政府から依頼があった場合に備え米軍の救援出動も検討中だと語った。(毎日新聞 2005.3.30)

■ スマトラ沖地震「支援の用意」・米大統領が表明

ブッシュ米大統領は3月29日のホワイトハウスでの演説で、28日に起きたインドネシア・スマトラ島沖大地震について「米政府は(被災者などへの)支援の用意がある」と語った。今回の大地震後の対応について、大統領が公の場で言及したのは初めて。大統領はすでに米政府の援助関係者が被災地での情報収集に動いているとしたうえで、現地での要望に応える形で適切な支援を実施していく考えを示した。米務省のエレリ副報道官は同日の記者会見で、インドネシアに対してジャカルタの米大使館を通じて、10万ドルの援助資金を提供したことを明らかにした。昨年12月26日にスマトラ島沖合で地震と津波が発生した時には、休暇中だったブッシュ大統領は対応が鈍く、米メディアから厳しい批判を浴びた。今回の地震では、米政府全体が発生直後から素早く対応している。(日経新聞 2005.3.30)

■ 赤十字、ニアス島に救援チームを派遣

インドネシア赤十字と国際赤十字は現状確認チームと医療スタッフの計12名をニアス島に派遣し、3月29日午後2時に現地入りした。物資確保と通信情報の専門家も含まれている。このほかに3月29日夕方、40名のボランティアがメダンからシボルガを経由し、シボルガからフェリーを使ってニアス島に向かう予定。コメ1.5トン、魚の缶詰10ダース、飲料水150ダース、遺体収容袋500セット、医薬品なども運ぶ。救急車1台も輸送する予定。国際赤十字連盟もメダンにセスナ機一台を用意した。インドネシア赤十字のマリー・ムハマド事務局長は3月29日にメダン入りし、被災地との調整を始めた。(Media Indonesia 2005.3.29)

■ 救出作業は数日間継続される

赤十字社のヘリ・アンシャーは、行方不明者の搜索・救出活動は数日間行うと語った。ヘリ氏によれば、2004年12月26日の地震のあと「バンダアチェでは被災から6日後に救出された人もいたのです」。シムル島では5時間の救出作業を経て、52時間ぶりに13歳の少女が瓦礫の中から救い出された。彼女は数カ所の擦り傷以外、大きな怪我をしていなかった。(AP 2005.3.31)

■ 被災地を支援する国際社会の動きが本格化

AFP通信によると、シンガポールは軍のヘリコプターと、医療・救援要員を同島に派遣。オーストラリアは、支援物資を積んだ輸送機2機などを現地へ派遣したほか、80万ドル近くの緊急資金援助と仮設医療施設を提供する。中国政府もインドネシアに対する50万ドルの資金供与を表明した。また、スマトラ島最西部で活動していた国連や各国の支援要員も、今回の地震の支援活動に加わっている。(読売新聞 2005.3.30)

■ 暴力でなく人道支援競うゲーム、国連食糧計画が提供

干ばつと戦争に見舞われた孤島に一刻も早く食糧を届けよ——。こんなミッションを競う人道支援ゲーム「Food Force」が国連食糧計画(WFP)から発表された。人を殺す暴力ゲームではなく人を救うゲームを通じ、子供たちに人道支援について知ってもらおう狙いだという。ゲームの舞台は「シェイラン」という架空の島。何万人もの避難民が発生し、緊急の食糧援助を必要としている。プレイヤーはヘリコプターで状況を偵察、避難民に空中から高エネルギービスケットを投下し、武装した反政府勢力と交渉しながら、食糧援助を通じて村の再建支援に当たらなければならない。これらの仮想ミッションは、WFPがスマトラ沖地震による津波被害の救援物資を届けるに当たり、実際に直面した課題がモデルになっているという。「Food

Forceが子供たちの関心をかき立て、エイズとマラリア、結核を合わせたよりもっとたくさんの人が飢えで死亡していることを理解してほしい」とWFPは説明。世界中の子供たちにオンラインで対戦してもらうため、専用サイトwww.food-force.comも開設した。(ITmedia.co.jp 2005.4.14)

■ 国連：緊急援助隊を疑似体験するゲームを配布

国連の食料援助機関、世界食糧計画(WFP)は4月14日(米国時間)、WFPの活動を疑似体験できるパソコンゲーム「フード・フォース」の無料配布を開始した。緊急援助隊の一員となり、内戦と干ばつに苦しむインド洋の島に物資を送り届けるゲームで、遊びながらWFPや食糧問題を知ってもらうのが狙いだ。WFPは、スマトラ沖大地震の救援で存在感を示したが、この機会にPRに力を入れる。ゲームは実際の活動をリアルに再現。ヘリコプターで現地調査したり、輸送機で食料を投下、トラック隊で地雷を避けながら難民キャンプを目指す。対象は8~13歳だが、3次元CGを駆使した本格的な作品で、大人でも楽しめそう。専用ウェブサイトでは、食糧問題を解決するために児童・生徒ができることを紹介したり、教師用の教育素材も提供している。サイトからダウンロード可能で、OSはウィンドウズとマックOSに対応。当初は英語版だけだが、他の言語も準備中だ。(毎日新聞 2005.4.15)

(3)マレーシアの対応

■ アブドゥラ首相、ユドヨノ大統領に被災地支援の意志を伝える

マレーシアのサイド・ハミド・アルバール外務大臣によれば、マレーシアのアブドゥラ首相は3月29日にインドネシアのユドヨノ大統領に電話で連絡し、同日未明(マレーシア時間)の地震で犠牲となった人びとに対して哀悼の意を伝えるとともに、インドネシアに対して支援を行う意志があることを伝えた。(Bernama 2005.3.29)

■ マレーシア、国内の2空港を外国機に開放

マレーシアのチャン・コンチョイ運輸大臣は、スマトラに救援物資を運ぶ外国機が同国スバンのスルタン・サラフディン・アブドゥル・アジズ・シャー空港とランカウイ国際空港に離着陸することを歓迎すると語った。(Bernama 2005.3.29)

■ マレーシア・サラム基金、救援チームを派遣

マレーシア・サラム基金(Yayasan Salam Malaysia)はスマトラの西海岸に2チームの救援チームを派遣した。ニアス島、シボルガ、シムル島など大きな被害が予想される3地域に向かう。先発隊7人は3月30日午前8時30分にメダンを出発し、後発隊2人も同日午後メダンを出発する予定。(New Straits Times 2005.3.30)

■ マレーシア医療救助協会、アチェ駐在のボランティアをニアス島に派遣

マレーシア医療救助協会はバンダアチェからボランティア4人をニアス島に派遣する予定。同協会会長のジェラミー医師によれば、バンダアチェには18人のボランティアが駐在しており、ニアス島に向かうヘリコプターを調達中とのこと。ジェラミー医師は、バンダアチェからニアス島まで9時間かかると見込んでいる。(New Straits Times 2005.3.30)

■ マレーシア赤新月社、救助員を派遣

マレーシア赤新月社は救助員3人をニアス島に派遣した。救助員はニアス島で4~5日間活動する予定。(Bernama 2005.3.30)

■ クアラルンプール病院、救急医療の専門家をニアス島に派遣

クアラルンプール病院は救急医療の専門家4人をニアス島に派遣し、マレーシア赤新月社やマレーシア医療救助協会などと協力して被災者の治療にあたる。(Bernama 2005.3.30)

■ フォース・オブ・ネイチャー基金、被災地支援策を協議

フォース・オブ・ネイチャー基金のラザリ特使によると、同基金の理事は3月31日の朝に緊急会議を開き、29日未明(マレーシア時間)に発生した地震の被災地に対する支援について話し合った。同基金は、29日にサラム基金が派遣した現地調査員3人から報告を受けた後、被災地を支援する計画を作成する。ラザリ特使は、マレーシア政府がフォース・オブ・ネイチャー基金を設立した目的は救援作業にあるのではなく、復興・再建事業にあると強調したが、「災害が発生すれば、マレーシア政府としてはそれをただ傍観しているわけにいかない」。(星洲日報 2005.3.31)

■ 12月26日地震・津波への対応

■ マレーシア赤新月社、2,200万リンギの義捐金を集める

マレーシア赤新月社の名誉会計ファティマー・スライマンが4月1日明らかにしたところによると、2004年12月26日にスマトラ沖で地震が発生して以降、マレーシア赤新月社は2,200万リンギ(約6億1,600万円)の義捐金を集めた。そのうち113万リンギ(約3,164万円)をマレーシア、アチェ、スリランカなどの被災者に対する緊急支援や医療活動のために供出した。すでに予算の割り当てが決まっている計画に、マレーシアの被災者の公衆衛生の維持・向上(630万リンギ: 約1億7,640万円)や、同社が「養子」にしたスリランカのある一村の復興事業と孤児院の設立(150万リンギ: 約4,200万円)などがある。また、アチェ州に対しては、災害時の救援物資を保管する倉庫の設置(290万リンギ: 約8,120万円)や、移動診療所や飲料水供給装置の設置(120万リンギ: 約3,360万円)、同社の「養子村」となった北アチェ県ロスマウエのブランバンガット村(Blang Bangat)の復興事業と児童福祉施設・幼稚園の設立(1,280万リンギ: 約3億5,840万円)などのほか、ピディ県とバンダアチェに孤児院を設立する計画がある。ファティマーは、「われわれは漁船やミシンなど経済活動に役立てうる道具を提供することで被災者の生活を再建していく」と述べた。また、アチェ州での支援活動に関して「全てインドネシア政府と地方当局の承認を必要とする」と語った。(Bernama 2005.4.1)

■ マレーシア国軍、4月25日までにアチェから撤退

アチェにおけるマレーシア国軍の活動を指揮しているシャフルディン・アブドゥラー准将によれば、マレーシア国軍は4月25日までにアチェから撤退すること。シャフルディン准将は、アチェでの任務を終えて4月1日にインドラ・サクティ号でクラン港に到着した65人の人員を迎えた際に、以上のように語った。今回帰国した派遣隊は、バンダアチェやモスクの清掃作業のほか、600万リンギ(約1億6,800万円)を投じた大アチェ県ジャントの救済センターの建設と、大アチェ県ローンでの100戸の住宅建設を任務とした。准将によれば、マレーシア国軍は2004年12月の地震発生以来、ヌリ・ヘリコプター2台、CN235航空機1台、C130輸送機数台、軍艦2隻、人員550人をアチェに派遣したとのこと。マレーシア国軍がアチェで使用した5台のブルドーザーはアチェ州政府に寄付される。現在アチェに駐在しているのは将校7人と兵士104人。(Bernama 2005.4.1)

■ マレーシア政府、被災者・被災孤児のための住宅建設を継続中

ナジブ副首相は、マレーシア政府はアチェ州の被災者および被災孤児を収容する2つの住宅建設計画を現在も継続中であると語った。ナジブ副首相によれば、「建設計画は当初、マレーシア国軍の工兵が実施するはずだったが、外国の軍隊が全てアチェから撤退したため、われわれもマレーシア国軍をアチェから撤退させることにした。だが住宅建設計画は、マレーシア津波被害支援基金の資金に基づき、民間人や民間企業などが実施していく」とのこと。2つの計画にかかる費用は750万リンギ(約2億1,000万円)の見込み。

(Bernama 2005.4.3)

■ マレーシア国軍、できるだけ早くアチェから撤退する予定

ナジブ副首相によると、マレーシア国軍の医療チームはすでにアチェから撤退し、現在アチェに駐留しているマレーシア国軍兵士の数は100人。残りの兵士もできるだけ早期にアチェから撤退するとのこと。
(Bernama 2005.4.3)

■ マレーシア津波被害支援基金に集まった義捐金は約6,857万リンギ

首相府のマレーシア津波被害支援基金は4月4日までに、6,856万9469リンギ71セン(約19億1995万円)の義捐金を集めた。津波被害支援委員会の委員長を務めるナジブ副首相が同日の国会で明らかにした。このうち津波被害支援基金が直接集めた金額は2,479万8,825リンギ48センで、残りの4,377万644リンギ23センはメディア各社が集めた。それによると、ブリタ・ハリアン紙とニュー・ストレート・タイムズ紙、TV3、8TVからなるメディア・プリマ・グループの集めた義捐金総額は44,770万850リンギで、そのうち3,777万850リンギが津波被害支援基金に寄付された。また、スター紙が集めた義捐金総額は2,157万3,151リンギで、そのうち313万1,885リンギ68センが津波被害支援基金に寄付された。また、ウトゥサン紙とメイバンクが合同で集めた286万7,908リンギと、ウトゥサン・グループが集めた373万3,395リンギ71センも津波被害支援基金に寄付された。ナジブ副首相によれば、このうちすでに2,143万4,143リンギ50セン(約6億15万円)が被災者に対する初期支援として供出されたとのこと。(Bernama 2005.4.4)

■ 初期支援に供出した2,143万リンギの内訳

4月4日の国会でナジブ副首相が語ったところによると、初期支援に供出した2,143万リンギの内訳は、国内で犠牲となった68人と海外で犠牲になった6人の遺族に対する見舞金や、けが人の治療費、家屋・漁船の修築、避難民に対する見舞金など。そのほかに2,076万リンギが住宅建築費用に、2,300万リンギが漁業や農業のインフラ修築に費やされた。住宅建設はすでに終了した。入居者が負担する住宅建設費用は月50リンギで、残りは政府が補助する。また、外務省によるアジア津波災害基金は2,498万リンギに達し、そのうち300万リンギをインドネシアに、100万リンギをスリランカに、53万リンギをモルディブに寄付したとのこと。ナジブ副首相は「ニアスに対しても支援を広げたい。マレーシア特別救助隊(Smart)やマレーシア医療救助協会のボランティアを送る用意は整っている。だがインドネシア政府から許可が出るのが遅れている」。ナジブ副首相は、支援金を受け取っていない被災者はそれを政府に知らせよう呼びかけた。これに対してバエン区選出議員リム・ホックセン(DAP)は、タンジュンピアンダンの6世帯とクアラクラウの15世帯の養殖業者がまだ補助金をもらっていないことを報告した。一方、ブンダン区選出議員モハマド・ハヤティ・オスマン(PAS)は、母親が死んだ場合は見舞金が出るのに息子が死んだ場合には見舞金が出ないのはなぜかと質問した。(New Straits Times 2005.4.5)

■ スター紙、政府とNGOに義捐金を寄付

スター紙は2739万7908リンギ13セン(約7億6715万円)の義捐金を集めた。そのうち476万5581リンギ50セン(約1億3344万円)を政府のマレーシア津波被害支援基金に、1233万1092リンギ45セン(約3億4527万円)をマレーシア赤新月社に、1030万1234リンギ18セン(約2億8844万円)をマレーシア医療救助協会に寄付した。スター・メイバンク津波基金が集めた286万7941リンギ62セン(約8030万円)はマレーシア津波被害支援基金に寄付された。(Star 2005.4.7)

■ アブドゥラ首相、マレーシア政府はアチェへの支援を続けていく

アブドゥラ首相は4月6日の国会で、マレーシア政府はアチェの津波被災者に対する支援をインフラ設備の復興・再建も含めて継続していくと語った。だが、それらは全てインドネシア政府の許可に従うとした。

「これまでの支援も、物資の受け取り、輸送、保管、被災者への配給を行う中で、調整作業を通じてインドネシア政府の許可に従ってきた。インドネシア国軍など地元当局の同意を得てきた」。首相によれば、マレーシア海軍の戦艦は13回の物資輸送を行い、毎回平均480トンの物資を輸送したとのこと。国家安全局が指揮するバンダアチェの支援センター司令部は、まだ活動を行っている。また、ラザリ・イスマイルが会長とする基金を設立し、募金活動を行うことを政府はすでに決定している。(Utusan Malaysia 2005.4.7)

■ NGOは義捐金の用途を透明化させねばならない

マレーシア医療救助協会の会長ジェミラー・マフムド医師は、スター紙が集めた義捐金を受け取る際、同協会は「1リンギの単位まで支出内容を説明できる」とし、公共の資金を受け取るNGOは資金の管理を透明化させ、説明責任を果たさなければならないと語った。同協会はアチェでの緊急活動にすでに164万8,317リンギ44セン(約4,615万円)を供出した。アチェの復興・再建にさらに1,000万リンギ(約2億8,000万円)を見込んでいる。その内訳は、住宅80戸の建設に61万6,000リンギ、住宅250戸の再建に250万リンギ、避難民センターの経営に50万リンギ、孤児院に100万リンギ、シアクアラ大学医学部学生の学生寮に50万リンギ、健康管理センターに120万リンギ。また、看護師養成学校2校に35万リンギと85万リンギ、看護師宿舎に45万リンギ、整形外科病棟に75万リンギ、薬剤師・看護師養成学校の教材や実験室設備に90万リンギ、津波の危険性を伝えるための「知識バス」に75万リンギをそれぞれ予定している。(Star 2005.4.7)

■ マレーシア赤新月社、義捐金の支出金額を公表

マレーシア赤新月社は、スター紙が集めた義捐金を受け取った際、同社の計画とその予定金額を公表した。同社名誉会計のファティマ・スライマンによると、アチェ支援には1,279万リンギ(約3億5,812万円)の支出を予定している。その内訳は、「養子村」にした北アチェ県ブランマガット郡のカンポンブランマガット(Kampung Blang Mangat)に342万700リンギ、ピディの孤児院に328万9,000リンギ、バンダアチェの孤児院に459万1,800リンギ、災害予防支援活動に28万8,500リンギ、2つの移動診療所に120万リンギ。(Star 2005.4.7)

■ グローバル・シク、サバンとパロイを拠点にアチェでの支援活動を継続中

2004年12月26日の津波のあと、アチェの被災者を支援するためにマレーシア・シク青年組織が設立したグローバル・シクは、ウェー島のサバンと大アチェ県ローン郡パロイ(Paroe)*のロストゥ(Lhok Seudu)を拠点として活動を行い、これまでに支援チームを8回派遣している。各派遣隊は20人から編成され、3週間活動し、そのうち1週間は移動に費やされる。派遣チームは、クダ州のランカウイ島から18時間かけて船でウェー島に向かう。インドネシア政府は最近まで支援組織はメダンを通るよう求めていた。サバンの病院では、地元の医師9人のうち4人が犠牲になったため、グローバル・シクの4人の医師と4人の看護婦が治療に加わった。輸送班は食糧を運び、その他数名はスマトラの西南海岸地域を航行し、生存者を探した。彼らはがサバンやパロイに拠点を定めたのは、そこには支援チームがまったく入っていなかったためだった。第1次派遣隊に参加したジャグマホンはこう語る。「スマトラ西南海岸の集落をまわったとき、住人の4分の3が被災していた。海岸から500m離れたところに船を停泊させた。海岸線が500m内陸に移動しており、破壊された村が水面下に沈んでいたため、それ以上中に入れなかった。治安上の理由から、パロイでは陸地にキャンプを設置できなかった。パロイはGAMの活動家がいる地域として知られていたため、そこに入るべきかどうか非常に迷った」。グローバル・シクはパロイ沖に停泊した船を拠点に、パロイやクルンカラ、ピリク、チョジュンパ、ライウンなどで支援活動を行った。「パロイでは女性や子どもが食糧を求めてバンダアチェまで歩いていった。道は破壊され、車は村に入れなかった。わずかに残った50人の男は遺体の埋葬に忙殺されていた」。グローバル・シクがパロイに到着したというのを聞きつけて、バンダアチェに向かって村人は村に引き返した。インドネシア国軍の協力の下、使えるものは何でも使った。乗り捨てられたトラックやチェーンソーなどを使い、村の奥に入れるよう道を整備し、橋を作った。5,000~6,000人の被災者に対して応急手当を施し、食糧運搬を行ってきたが、現在は公衆衛生に対する意識の向上や、教育の再開な

ど復興・再建事業を中心に活動を行っている。グローバル・シクは、漁船5隻、漁業網、種、くわ、シャベル、ミシン10台、トイレなどを被災地に寄付した。「すでに700万米ドルの支援を送った。今もっとも必要とされているのは住宅だ。まだ依然として多くの人びとが仮設避難所に滞在している」。ハルチャランジット・シンは次のように語る。2月6日まではパルに停泊していた船を拠点としていたが、モンスーンの季節に入りそれが危険となったため、現在はサバンを拠点としている。この新たな拠点は、サバン市長がグローバル・シクのために提供してくれたものだ。グローバル・シクはウェー島で18の避難民キャンプを支援している。「食糧の配給を受け取って、村人は嬉しそうだった。だがわれわれがコーランを持ってきたとき、彼らは食べ物を投げ出して走りよってきた。彼らは『これが一番ほしかったんだ！』と喜んだ」。その後、祈祷用の敷物と本を寄付した。「当初、多くの人がこの世が終わると思っていた。彼らの周囲にあるものは全て破壊され、村の住人のほとんどが死に、外界との接触が絶たれていたからだ」。ハルチャランジットの妻ハルミンデール・カウールも支援活動に参加した。彼女は第6次派遣隊に加わり、手工芸とパッチワークを指導した。女性に対して菓子製造の支援を行う計画もある。菓子製造・販売で生計を立てていた女性も多かったが、津波によって型やオーブンを失ってしまった。ハルチャランジットとハルミンデールは6歳の息子に促されてアチェに行ったとのこと。「津波のニュースを見た後、わたしは泣いていた。それを見ていた息子が、『何かやらなきゃ。お父さんとお母さんはあの人たちを助けることはできないの？』と聞いてきた」。グローバル・シクは6ヵ月から1年間かけて支援活動を行う意向である。だが、インドネシア政府はNGOの活動を4月27日までに限定している。ハルチャランジットは、アチェの村人の未来は不確かだと語った。(Star 2005.4.7)

【ParoeはParoやParoiなどとも表記される。】

■ アチェの被災孤児を支援するためのコンサートがクアラランブール市内で開かれる

イスタナ・ブダヤ(文化宮)のパンゲン・サリ・シアターで4月8日、「歌と映像の津波コンサート」が行われた。津波の惨状や人道支援活動の画像が歌に乗せて映し出され、1つの物語を形作るといった趣向だった。ザイナル・アビディンやリザ・ハニム、ニン・バイズラ、ラバンニなどマレーシアで人気の12人の歌手やグループが出演した。詩の朗読も行われ、イスラム教の祈祷も捧げられた。このコンサートはアチェの被災孤児を支援する資金を募る目的で、マレーシア福祉社会連盟(Ikatan Masyarakat Penyayang Malaysia, IMPEG)とクアラランブール市政局、イスタナ・ブダヤ、文化・芸術・文化遺産省が共催した。コンサートにはアチェで救助支援活動を行ったボランティアや政府関係者が招待されたほか、ナジブ副首相夫妻やマハティール前首相夫妻、ライス・ヤティム文化・芸術・文化遺産大臣夫妻、ルスディ・ハルジョ駐マレーシア・インドネシア大使夫妻などが出席した。今回のコンサートでは、100万リンギ(約2,800万円)の義捐金が集まった。(Utusan Malaysia 2005.4.12)

■ 支援物資の余剰分をオラン・アスリ局に寄付

マレーシア国軍アチェ派遣隊司令官シャルディン・アブドゥラー准将は、アチェの津波被災者のために集められた支援物資が530トン残っており、この余剰分をオラン・アスリ局に寄付したいと語った。余剰物資は主に飲料水や衣類で、いずれも良好な状態で国防省とクラン港に保管されており、国防大臣を兼任するナジブ副首相の同意もすでに得ているとのこと。シャルディン准将は、アチェにおける水の供給はすでに十分満たされており、マレーシアから船で飲料水を輸送する必要はもはやないと語った。(Bernama 2005.4.16)

【オラン・アスリ：半島部マレーシアに住む先住民族の総称。人口は約9万2,000。ヌグリト、セノイ、プロト・マレーの3グループに大別されるが、さらに18の下位グループに分けられる。(篠崎香織)】

■ マレーシア海軍の軍艦による物資輸送、4月20日で終了

マレーシア国軍アチェ派遣隊司令官シャルディン・アブドゥラー准将は、3ヵ月間にわたって行われてきたマレーシア海軍の軍艦を使ったアチェへの支援物資輸送を4月20日に終了すると語った。物資輸送に

活躍してきたマハワンサ号は、マレーシア国軍兵士68人と救援・復興活動で使用した車両などを迎えるため、アチェに向けて最後の航海に出発する。(Bernama 2005.4.16)

■ マハティール前首相「メディアは津波被災者の報道を続けるように」

スマトラ沖の地震と津波のニュースはもはや「ホット」な話題ではないが、地震・津波被災者の生活再建を支援するうえで、世論が彼らのことを忘れ去らないよう、メディアは人びとの関心を引き付けておく必要がある。マハティール前首相は4月15日にニアス島の小さなマハティール君と面会した際、上のように語った。2人の面会は、ウトゥサン・マレーシア紙がマレーシア航空とマレーシア赤新月社の協力を得て実現した。マハティール君ははにかみながらもワシリヤ孤児院の代表役をしっかりと務め、地震によって破壊された孤児院の修復を支援してくれるようマハティール前首相に伝えた。マハティール前首相は孤児院の支援に努めると述べ、辛くても強く耐え、希望を失わないよう孤児院の友達に伝えるようマハティール君に託した。「彼らは大学まで進めるよう努力しなくてはならない。そうしてこそ自分の状況を改善し、運命を変えることができるのだ」とマハティール前首相は語った。(Bernama 2005.4.15)

(4) 日本政府・日本社会の対応

■ 国際緊急救助隊・医療チームを派遣

■ 政府、医療チーム派遣検討…スマトラ沖地震

インドネシア・スマトラ島沖の地震について、外務省は、同国政府の要請があれば、直ちに国際緊急援助隊の医療チームを派遣する方向で準備している。また、インドネシア、マレーシア、タイ、スリランカなど周辺国の在外公館などを通じて、情報収集に全力を挙げている。町村外相は3月29日午前の閣僚懇談会で、政府の対応として「国際緊急援助隊の出動も考えないといけない」と語った。小泉首相は同日昼、「まだ余震かどうか分からない。状況を確認することだ」と記者団に述べた。(読売新聞 2005.3.29)

■ 政府、医師ら11人の緊急援助隊派遣へ スマトラ沖地震

スマトラ島沖で起きた地震を受け、日本政府は医師ら計11人からなる国際緊急援助隊・医療チームを3月30日にインドネシアに派遣する方針を決めた。テント、発電機、毛布など1,500万円相当の物資支援も行う。このほか、外務省は29日、同省や消防庁、警察庁の職員などからなる捜索救助チーム約50人と医療チーム約20人の計約70人の国際緊急援助隊を派遣する体制を整備。防衛庁も医療や輸送支援などにあたる自衛隊の部隊を派遣する方向で準備に着手した。(朝日新聞 2005.3.29)

■ スマトラ島沖地震で日本が緊急援助、医療チームも派遣

スマトラ島沖の地震を受け、政府は3月29日夜、インドネシア政府の要請を受け、テント、毛布、発電機など総額1,500万円相当の緊急援助物資を提供する方針を決めた。国際緊急援助隊の医療チーム11人を30日に派遣することも決定した。緊急援助物資は、シンガポールにある国際協力機構(JICA)の備蓄倉庫から、チャーター機で31日にも被災地のニアス島などに届けられる予定。小泉首相は29日、インドネシアのユドヨノ大統領に対し、地震災害についてお見舞いのメッセージを出し、日本政府として支援の用意があることを伝えた。(読売新聞 2005.3.29)

■ スマトラ沖地震で政府派遣の援助隊、成田出発

インドネシア・スマトラ島沖のインド洋で起きた大規模地震を受けて、政府が派遣を決定した国際緊急援助隊医療チームが3月30日午前、大きな被害が報告されているニアス島へ向けて成田空港発の航空機で出発した。ジャカルタ経由で31日中の現地入りを目指す。派遣されるのは、外務省、国際協力機構(JICA)の関係者と医師、看護師、薬剤師ら11人。2週間程度、医療活動にあたる。同空港内で行われた結団式で、団長を務める外務省アジア大洋州局南東アジア第2課の青山滋弥・インドネシア班長は「ニアス島は北スマトラ州でも辺境

の地。スマトラ派遣は3度目だが、今回が一番緊張している」とあいさつ。他のメンバーも「精いっぱい貢献したい」と話していた。(読売新聞 2005.3.30)

■ JICAの医療チームがニアス島に出発

巨大地震による被害が徐々に判明するなか、国際協力機構(JICA)の国際緊急援助隊の医療チームやNGO(非政府組織)が3月30日、被災地のインドネシア・ニアス島に向けて動き出した。メンバーの中には前回のスマトラ島沖の巨大地震の際に派遣された人たちもいる。発生から2日目を迎え、「時間との勝負」と、日本の支援が活発になってきた。JICAの医療チームは3月30日午前、成田空港で結団式を開き、出発した。一行は医師2人、看護師3人、薬剤師1人ら総勢11人。ニアス島で2週間、医療支援にあたる。横浜労災病院の医師庄古知久さん(38)は「建物の倒壊がかなりあり外傷患者が多いだろう。早く診てあげたい」と話した。

JICAは昨年12月26日に発生したスマトラ島沖大地震・津波の際にも7回、延べ約140人の医療チームを被災各国に派遣した。今回のメンバーの1人、東京都立川市の災害医療センターに勤める看護師、大澤志保さん(30)は2月に2週間、自衛隊通訳の健康管理担当として、スマトラ島北部バンダアチェに入った。海岸から車で20分ほど離れた内陸部に民家を借りて、通訳らと共同生活した。街は復興に向かっていて、が、海岸近くに行くと建物は土台だけが残し、街の中にも崩れた塀や土砂でつぶれた商店など、津波のつめ跡が残っていた。大澤さんは30日未明、出発準備の合間に「今回は地震直後。もっと大変だろうと想像しています」と話した。

29日午後8時ごろ、JICAから派遣の電話が入ると、同居する母親に「頑張ってください」と声をかけられた。前回と違って今回は被災者の看護にあたる。「現地が実際にどうなっているのか、色々と不安はあります。ただ、現地の人は2度も大きな地震に襲われ、精神的にも大変な衝撃を受けているはず。体だけでなく心のケアにも気を配っていききたい」(朝日新聞 2005.3.30)

■ 緊急援助隊増派も

3月30日午前に成田空港からニアス島に向けて出発した国際緊急援助隊・医療チームについて、高島報道官は「要請があれば増派も考えている。(医療チームとは)違った種類の緊急援助隊が来てほしいという要請があれば、それに応えて派遣する」と語った。(朝日新聞 2005.3.30)

■ 日本の緊急援助隊第一陣12人、ニアス島到着

インドネシア・スマトラ島沖で起きた大地震で深刻な被害を受けたニアス島に3月31日、日本の国際緊急援助隊の第一陣が到着した。4月1日にも現地での被災者への医療活動を始める。同隊は医師2人、看護師、医療コーディネーターなど合わせて12人。一行はインドネシアのメダンからヘリで到着した。青山滋弥隊長は「現地のニーズを踏まえ、地元関係機関とNGO(民間活動団体)と連携してできるだけ早く活動を始めたい」と語った。同島では、世界食糧計画(WFP)が調達した食料約300トンもまもなく到着する見込み。インドネシア政府当局者によると、大地震による死者数は1000~2000人に達する可能性があるという。(読売新聞 2005.4.1)

■ 政府、ニアス島に医療チーム2次隊派遣

政府は4月6日、先月のスマトラ島沖地震で大きな被害を受けたインドネシアのニアス島に、国際緊急援助隊・医療チームの第2次隊17人(医師3人、看護師4人など)を派遣すると発表した。7日から順次、日本を出発する。3月30日に派遣した第1次隊11人は、10日に活動を終え帰国する。外務省によると、3日から3日間で380人が同隊の診察を受けたという。(毎日新聞 2005.4.6)

■ 日本人の安否確認

■ 外務省、在外公館を通じて現地の日本人に避難や警戒を呼びかけ

今回は、昨年12月の地震と津波被害の経験を踏まえ、外務省と気象庁が連携した。地震発生直後、気象庁

は外務省に津波情報などを提供。外務省はこれに基づき、インドネシアをはじめインド洋沿岸、アフリカ東岸の計10カ国の在外公館を通じ、現地の日本人に避難や警戒を呼びかけた。(読売新聞 2005.3.29)

■ 外務省、アチェ州に滞在する日本人の安否を確認中

多くの死傷者が出ているとされるニアス島に邦人が滞在しているとの情報はない。震源地に近い同国のアチェ州とは電話が通じにくい状態が続いている。同州周辺にいる日本人は、民間活動団体(NGO)や報道機関、国際機関の関係者が多いと見られる。外務省は、各団体と連絡を取り、安否確認を進めている。(読売新聞 2005.3.29)

■ 日本人スタッフ全員安否確認 日本赤十字

スマトラ沖地震で、日本赤十字社はインドネシアのアチェ州の病院などに23人を派遣し医療支援を行っている。これまでに日本人スタッフ全員の安否を確認したという。震源地に近いムラボーにいた同社の粉川直樹・国際救援課長は「横揺れが3分ほど続き、シャンデリアが大きく揺れ、棚などから物が落ちた。宿舎の周辺にある建物の被害はそれほどではないが、津波を心配する現地の人たちはパニック状態で次々とバイクや車で海岸とは反対の方向へ向かっていく姿が見えた」と話した。粉川課長によると、大きな津波被害もなかったことから夜が明けてからは現地も落ち着きを取り戻し、自宅に戻ってくる住民も見られるという。しかし、ムラボよりも震源に近いシムル島にいる日本人の女性看護師の報告では「住居も破壊され、住民の中でもけが人が多数出ている」という。(毎日新聞 2005.3.29)

■ アチェ州の日本人49人中48人の無事を確認

外務省は29日、震源に近いインドネシアのアチェ州に滞在していた日本人は49人で、うち48人の無事を確認したと明らかにした。(朝日新聞 2005.3.29)

■ アチェの邦人全員無事 外務省が確認

インドネシアのスマトラ島沖で起きた地震に関連し、高島肇久外務報道官は3月30日午後の記者会見で、震源に近いアチェ州に滞在していた日本人49人のうち、安否不明だった最後の1人と連絡がとれ、全員の無事が確認されたと発表した。(朝日新聞 2005.3.30)

■ スマトラ島などに在留日本人、無事ほぼ確認

在メダン総領事館によると、スマトラ島などに滞在、在留届を出している日本人は約450人。3月29日夕までにほぼ全員の無事を確認したが、数人とは連絡が取れていない。震源に近いスマトラ島西部周辺に日本人旅行者が滞在していたとの未確認情報もあるという。(読売新聞 2005.3.30)

■ ニアス島、シムル島で2人の日本人の安全を確認

在インドネシア日本大使館によると、ニアス島と北隣のシムル両島には計2人の日本人が滞在していたが、安全が確認された。日本人の被害報告はない。(日経新聞 2005.3.29)

■ ニアス島で日本人旅行者の無事を確認

在インドネシア・メダン日本総領事館によると、ニアス島に在留邦人はいないが、29日夕までに日本人旅行者1人が島内にいて無事が確認された。(朝日新聞 2005.3.29)

■ ニアス島に日本人旅行者1人との情報

インドネシアのスマトラ島沖で起きた地震に関連し、高島肇久外務報道官は3月30日午後の記者会見で、震源に近いニアス島で「日本人のバックパッカーが1人いて、島を出たがっている」との情報があることを

明らかにした。日本の報道関係者から寄せられたもので、現地で調べているが、確認はとれていないという。(朝日新聞 2005.3.30)

■ NGOなどによる支援活動

■ スマトラ沖地震、日本NGOの支援本格化

スマトラ島沖地震で阪神大震災の被災地、神戸市の非政府組織(NGO)などは3月29日、被災地への本格的な支援に乗り出した。震源近くのインドネシア・ニアス島へ医師団や救援物資を送り込む。「被害状況が判明次第、追加の支援も考えている」と継続的に取り組む方針。昨年12月のインド洋大津波で沿岸各国に救援物資を届けたNGO「アジアアフリカ環境協力センター」(神戸市中央区)は被災者向けに毛布(約300キロ分)をニアス島に届ける。早ければ31日にも空輸する。(日経新聞 2005.3.30)

■ アジア防災センター、研究員をニアス島などに派遣

国内の防災機関やNGOなどは、被害状況の把握や医療活動のため、スタッフの派遣などを決めている。アジア24ヵ国で構成する国際防災機関「アジア防災センター」(神戸市)は、3月31日から荒木田勝・主任研究員をニアス島などに派遣。家屋の倒壊状況などを視察し、インドネシアの防災担当者に助言する。(読売新聞 2005.3.30)

■ AMDA、医師ら4人をニアス島に派遣

昨年末の地震以来、スマトラ島・バンダアチェで医療支援活動が続けているNGO「AMDA」(岡山市)は、インドネシア支部の医師ら4人をニアス島に派遣し、医療活動などを行う。(読売新聞 2005.3.30)

■ AMDA、本部職員をニアス島に派遣

国際医療ボランティア「AMDA」(本部・岡山市)も30日、本部職員の松永一さん(36)をニアス島に派遣した。調整員として、AMDAインドネシア支部の医師団の支援や、医薬品の購入などの任務にあたる予定という。松永さんは前回のスマトラ島沖地震の直後にも、津波の被害を受けたインドに派遣され、2ヵ月以上活動した。「前回の経験もあるので、淡々とやるだけだ」と話していたという。(朝日新聞 2005.3.30)

■ AMDA、追加派遣も検討

医療NGO「AMDA」(岡山市)は30日に本部職員の松永一さん(36)を調整員としてニアス島に派遣する。津波で壊滅的な被害のあったインドネシア・バンダアチェで活躍する現地の医師ら3人と合流、被災者の手当てや被害状況の調査にあたる。同島の犠牲者は数百人との情報もあり「追加派遣も検討する」という。(日経新聞 2005.3.30)

■ AMDAの調整員、松永一さんがニアス島へ

スマトラ島西岸沖で発生した地震で、3月30日に岡山空港を出発した国際医療援助団体「AMDA」(本部・岡山市橋津)の調整員、松永一さん(36)は「『助かる命があればどこへでも』とのAMDAの原則を忘れず、犠牲者の数だけにこだわらず、必要とされる援助活動をしたい」と話した。松永さんは骨折患者などの外科手術に備え、医療キットや消毒液、包帯、抗生物質などの荷物計約40キロを持参する。被害が特に大きいニアス島には31日に入る予定。「医師らが効率的に働けるよう活動場所や交通手段、宿泊地を選定し、調整員の責任を果たしたい」と抱負を述べた。(毎日新聞 2005.4.1)

■ 昨年末のスマトラ島沖地震義援金でアチェ州に中学校建設

昨年12月のスマトラ島沖地震と津波の被害を受けたアチェ州に日本からの義援金で中学校が建設されることになった。義援金は日本インドネシア協会(福田康夫会長)が同国駐在経験のあるビジネスマンや企

業、法人会員から集めたもので総額約770万円。福田会長が3月31日、都内の同国大使館でアブドゥル・イルサン駐日大使に手渡した。福田会長が「額は少ないが、インドネシアを愛する人々の気持ち」と話すと同大使は「義援金の使い道をいろいろ考えたが、日本の方々の気持ちを現地に残すには学校がよい」と感謝を述べた。(日経新聞 2005.3.31)

■ 日本インドネシア協会が義援金767万円

日本インドネシア協会(東京都中央区)は3月31日、昨年12月のスマトラ沖大地震・大津波の被災地インドネシアへの義援金767万3000円をインドネシア大使館に贈った。第二次大戦中、同国に駐留した旧日本兵やその遺族約150人からの約100万円が含まれている。同協会会長の福田康夫前官房長官から義援金を受け取ったアブドゥル・イルサン駐日大使は「アチェ州の学校再建に使いたい」と話した。協会参与で近衛歩兵第3連隊に所属しアチェ州などに駐留していた池上信雄さん(86)＝東京都中野区＝は「2回の大地震に見舞われたスマトラの人々のことを戦友会の人々が心配している。息の長い支援活動をしたい」と話した。(毎日新聞 2005.4.1)

■ スマトラ沖地震支援募金8,600万円に JAグループ

JAグループは、昨年12月に発生したスマトラ島沖地震被害に対して3月末まで募金活動を行ってきたが、全国のJA・県中・県連役職員から合わせて8200万円、全国機関からは400万円と、寄せられた支援募金は総額8600万円となった。JAグループの募金額としては過去最高。このうち、すでにタイにはタクシン首相の救済基金とタイ協同組合に計3000万円を贈呈済みで今後、残りの約5600万円をインドネシアとスリランカに贈呈する。いずれも大統領の災害救援基金と農協、農業者団体に贈呈することにしている。スマトラ島沖地震と津波被害は、タイでは南部西海岸に被害が集中。協同組合の被害総額は約1億7100万円と報告されている。インドネシアはアチェ州にある4120の協同組合のうち598協同組合が被害にあっており、スリランカでは海岸線沿いにある514の協同組合が津波被害を受け、被害総額は約10億円と報告されている。(JAcom.or.jp 2005.4.14)

■ 津波被害支援、NGO「ジョイセフ」がリサイクルで

スマトラ島沖地震と津波で大きな被害を受けたインドネシア最西部の都市、バンダアチエの医療施設を支援するため、東京・新宿区のNGO(民間活動団体)「ジョイセフ」では、パソコン用プリンターの使用済みインクカートリッジを集めている。1キロ450円でリサイクル業者に買い取ってもらい、津波で流された医療施設を再建するための資金に充てる。今年1月から集め始め、これまでに約6キロが寄せられたが、金額にするとまだ2700円にしかない。ジョイセフでは「リサイクルの精神を生かした国際協力にぜひ参加してほしい」と呼びかけている。(読売新聞 2005.4.15)

■ アチェ州の子にマラリア診断キットを 地震被災のインドネシア

スマトラ沖地震とインド洋大津波で被災したインドネシア・アチェ州の子どもたちにマラリア診断キットを送ろうと、佛教大社会学部の満田久義教授(56)が募金の呼びかけを始めた。診断キットは1セット125円で、10万セットの寄付を目指している。アチェ州では、大津波による洪水で多くの水たまりができ、マラリアを媒介するカの大量発生が懸念されている。同国ではマラリアによる死亡者が多く、感染を予防、治療するには診断キットが欠かせないという。募金は、診断キットを製品化するインドネシアの研究所に送る。これまでに各国の研究者や機関が協力して1万セットを寄付したがまだ足りず、あらためて広く協力を求めることにした。22日、京都府庁(京都市上京区)で会見した満田教授は「8月には現地を視察して診断キットの活用状況を検証する。その後に『アチェにマラリア診断キットを送る会』をつくり、継続的に支援する」と話した。(京都新聞 2005.4.23)

■小泉首相のバンダアチェ視察

■小泉首相、バンダアチェを視察

小泉純一郎首相は4月21日夕、50周年を迎えるアジア・アフリカ会議(バンドン会議)に出席するためインドネシア訪問に出発する。首相は22、23両日にジャカルタで開く首脳会議に出席。アフリカ向けに政府開発援助(ODA)を数年間で倍増させる方針のほか、昨年末のスマトラ島沖地震の津波被害を踏まえ、復興や津波予防への包括的な支援策を表明する。23日には同地震で最大の被害を受けたバンダアチェの被災地を視察。24日の50周年記念式典に出席したうえで帰国する。(日経新聞 2005.4.20)

■地震、津波の被災地視察 首相がバンダアチェを訪問

インドネシア訪問中の小泉純一郎首相は4月23日午前(日本時間同日午後)、スマトラ沖地震と津波で最大の被害を受けたアチェ州の州都バンダアチェを訪問する。首相は世界食糧計画(WFP)による被災者への日本政府援助米の配給状況や非政府組織(NGO)による生活物資の配給状況、移動診療所の状況などを視察。小学校を訪れ、被災児童らを見舞う。日本はこれまで15億ドルの無償資金協力や津波の早期警戒システムの構築、国際緊急援助隊の派遣など被災地支援に取り組んでおり、首相が現地入りすることで実績をアピールする狙いがある。(神戸新聞 2005.4.23)

■首相、地震・津波被災地を視察…子供たちと交流も

小泉首相は4月23日午前(日本時間同日午後)、昨年末のインドネシア・スマトラ島沖地震と津波で甚大な被害を受けた同島北部のバンダアチェをチャーター機で訪れ、被災地を視察した。首相は22日のアジア・アフリカ会議(バンドン会議)首脳会議での演説で、アジア・アフリカ地域の防災・復興支援に力を入れる考えを表明しており、食糧など支援物資の支給や巡回医療活動の現場を自らの目で確かめる考えだ。また、民間活動団体(NGO)や国際機関のメンバーとして支援活動に従事している日本人関係者と意見交換するほか、被災地の子供たちと交流する。(読売新聞 2005.4.23)

■津波被災地に支援継続／首相、フラフープ披露

インドネシア訪問中の小泉純一郎首相は4月23日、スマトラ沖地震と津波で最大の被害を受けたアチェ州の州都バンダアチェを視察した。首相は視察後、記者団に対し、日本政府として支援を継続していく考えを強調した。ラムブン地区では、世界食糧計画(WFP)による食糧の配給状況の説明を受けるとともに、近隣の住宅の被害状況を視察。現地入りしている玉村美保子WFP日本事務所長に「海は向こうか？」などと質問しながら、津波の状況を聞いた。非政府組織(NGO)による布団などの生活物資の配給や巡回医療活動の様子も視察。地震で建物が崩壊し仮校舎を使っている小学校では、被災児童らにユニセフ支援物資の箱の中にあったフラフープを取り出して回してみせ、児童らから歓声が上がった。(四国新聞 2005.4.23)

■小泉首相：アチェ州を視察 小学生とフラフープも

インドネシア訪問中の小泉純一郎首相は4月23日、スマトラ沖大地震で大きな被害の出たアチェ州を視察した。大津波が町ごと押し流した荒野を目の当たりにして「4ヵ月たってこの惨状。たいへんな恐怖、被害だったと思う」と驚き、被災者を支援する世界食糧計画(WFP)や日本のボランティア団体のスタッフらを激励。州都バンダアチェ市では小学校を訪れ、歌や踊りで大歓迎を受けた。学用品などの援助物資の中からフラフープを見つけた首相は子どもたちと一緒に腰で回して遊び、「子どもたちの明るい笑顔、勇気づけられますね。日本の支援も役立ってるのかな」。世界が注目する日中首脳会談を前に、貴重な憩いの時間にもなった。(毎日新聞 2005.4.23)

ニアス島グヌンシトリの被害・救援状況

■ カトリック信徒、地震後初の礼拝を野外で行う

ニアス島のカトリック信徒は4月3日、地震後初めての礼拝に集った。ローマ法王ヨハネ・パウロ二世の死を悼み、ニアス島での救援活動中にヘリコプター事故で死亡した9人のオーストラリア人兵士に祈りを捧げるためだ。サンタマリア聖堂で礼拝が始まった時、マグニチュード6.2の余震が発生し、150人の礼拝参加者はあわてて聖堂の外に飛び出した。その後、祭壇やろうそく、十字架などを聖堂の外に移動させて、礼拝は再開された。グヌンシトリのほかの教会でも、野外礼拝の光景が見られた。ミカエル・トプル神父は「法王の死によってわれわれの苦しみはさらに増した」と述べ、強い信仰心を持ち続けるよう人びとに呼びかけた。神父は、オーストラリア人兵士のヘリコプター事故は島民に衝撃と悲しみをもたらしたと付け加えた。トプル神父は「ニアス島がまもなく沈没すると恐れ、多くの人びとがシボルガに逃げている。そんなことはありえない。どうか冷静に」と信者を諭した。(Star 2005.4.4)

(1)津波警報・避難

■ 津波警報で住民が一時混乱、6時間後に警報解除

ニアス島では、サイレンが鳴り響き、津波警報が出され、パニック状態に陥った数万人が自動車などで沿岸地域から高台に避難し、一時混乱状態となった。しかし、地震発生時から6時間が経過した時点で、大規模な津波の兆候は出でらず、多くの地域で津波警報は解除された。ニアス島グヌンシトリの副市長は地元テレビに対し、3万人の住民のうち1万人が高台に避難した、と述べた。(ロイター 2005.3.29)

■ いったん岸に向かってから丘に避難、4時間後に津波への不安が高まる

「ツナミ、ツナミ」の叫び声が響く中、1キロほど離れた岸辺に向かうと、多数の家屋が次々に倒壊、その前で泣き崩れる家族がいた。路地には大けがをした人や死亡したと見られる人が横たわっていた——ニアス島の街グヌンシトリに住む警察関係者は29日、日本からの国際電話に現地の様子を語った。激しい揺れを感じて家の外に飛び出し、いったん岸に向かったが、小高い丘へと引き返した。午前3時ごろ、丘の上にはすでに300人ぐらゐが集まり、「ツナミが来たのではないか」「街がなくなったかもしれない」という情報が流れ、一時パニック状態になったという。ニアス島の病院関係者は29日午前、国際電話に「津波はなかったようだ。被害の状況はよく分からないが、壊れた家の下敷きになっている人が多いようだ。病院に向かう途中の橋のいくつかが壊れているみたいだ」と語った。この病院だけで、すでに100人を超える死傷者が運ばれているという。スマトラ島から約200キロのインド洋に浮かぶニアス島は、昨年12月の巨大地震の震源に近く、被害が大きかった地域のひとつだ。(朝日新聞 2005.3.29)

■ 地震後、津波警戒のアナウンスなし

「ニアス島には津波はきませんよ」。海岸沿いのミガビーチ・ホテルの従業員、ダーリさん(23)によると、地震の後、建物の外に宿泊客5人を誘導したが、丘の方には避難しなかったという。インド洋大津波の際も島に津波の被害がなかった、というだけの理由だ。地震後、島内に津波警戒のアナウンスも流れなかった。ニアス島はサーフィンに最適の波が立つことで知られ、サーファーの聖地とも呼ばれる。大津波が押し寄せていれば、さらに被害が拡大したことは間違いない。(産経新聞 2005.3.30)

■ 地震発生時は暗闇の中をはだして走って逃げた

ニアス島は、昨年12月26日の巨大地震津波の最大被災地アチェ州に近いが、このときの被害は同州に比べて圧倒的に小さかった。人口約70万の島で、死者は北部と西部の計122人。東部にあるグヌンシトリでは揺れも津波も小規模で、避難した住民は1人もいなかった。それでも、住民は地震に敏感になっている。今回の地震発生直後は暗やみの街をはだして高台へと走り、自宅が全壊した主婦メリー・リムさん(55)は「誰も

が『急げ』と叫んでいた」と恐怖を振り返る。わずか3ヵ月前のアチェ州の光景は、住民の目に「この世の果て」の惨状として焼き付いていた。(東京新聞 2005.4.2)

(2)社会基盤の被害・回復状況

■市街地の被害状況

■グヌンシトリの市街地の80%が被害

3月28日深夜に発生したM8.7の地震はニアス県の県都グヌンシトリの市街地の80%に被害を与えている。ユドヨノ大統領の代理としてニアス島に派遣されることになったシララヒ氏は「現地の地域軍管区司令官とニアス県副知事の報告では、街の80%が被害を受けている。少なくとも家屋500棟が倒壊し、住民は押しつぶされている可能性があるとのことだ」と述べた。犠牲者数は数百人から数千人との憶測が流れているが、実際の犠牲者数は不明。シララヒ氏は28日夜から29日朝までニアスと連絡をとっていた。昨夜の時点では停電していた。(Kompas 2005.3.29)

■家屋の約3分の1が全壊、住民は高台のテントに避難

12月の大津波では被害を受けなかった農場経営手伝い、マイマン・ラロッサさん(18)は「地震後、多くの住民が月明かりを頼りに高台に避難した。道路に亀裂が入ったため、乗用車での移動は困難で大半が歩いていた」と話した。避難者の大半はさらなる地震や津波を恐れ、高台のゴム園などにテントを張って待機しているという。マイマンさんの集落では家屋約1500軒の約3分の1が全壊したと証言した。(毎日新聞 2005.3.29)

■市街地では建物の3割が全壊

無残に陥没した屋根、その間から上がる白い煙、駆けつけた救急隊員は「いったい何人が犠牲になったのか」と嘆いた。スマトラ島西岸沖で発生したマグニチュード(M)8.7の大地震から一夜明けた29日、インドネシア海軍の航空機に同乗して、震源地に最も近いニアス島に入った。懸念された新たな津波被害は見当たらなかったが、市街地では建物の3割前後が全壊していた。多くの島民が倒壊した家屋の下敷きになっている可能性がある。島民らは新たな地震・津波を恐れて高台に逃れ、自宅に戻っていなかった。

北スマトラ州の州都メダンから海軍機で約1時間南下すると、青く広がるインド洋上にニアス島が現れた。油ヤシの大農場が広がる美しい島だ。航空機は海岸に沿って低空飛行した。12月の大津波によるとみられる樹木の倒壊が確認できた。海軍機は県庁所在地グヌンシトリの市街地から約20キロ南のグヌンシトリ空港に着陸。航空機を降りて市街地に向かう。数十戸ずつ崩壊した建物があり、道路沿い数百メートルにわたってすべての電柱が傾いている地域もあった。地震直後からの停電が続いていた。柱だけになった家屋から煙が立ち込めている地域も数ヵ所あった。ニアス県の副知事は毎日新聞の電話取材に「地震直後に市場などで火事が発生した」と話した。(毎日新聞 2005.3.29)

■中心部に近づくほど被害が拡大、町の機能はまひ

ニアス県の県庁所在地グヌンシトリ市の被害が最も大きく、数軒から十数軒の全壊家屋の群れが点在、テント数張りの避難所も数ヵ所でできていた。商店はほとんど閉まり、町の機能はまひしていた。同市中心部に近付くほど被害は拡大。道路はひび割れや、数センチから最大約40センチの段差が各所にでき、路肩が崩壊している個所もあった。空港付近では厚さ約2メートル、長さ約8メートルの岩盤ががけから道路の端に割れ落ち、散らばった破片が道路をふさいでいたが、ブルドーザーで同日撤去した。(毎日新聞 2005.3.30)

■グヌンシトリで2万人が家を失う

サーフエイド・インターナショナルによると、グヌンシトリでは2万人が住む家を失った。(AP 2005.4.1)

■ 空港

■ グヌンシトリで空港の滑走路が破損

国軍によると、グヌンシトリ空港の滑走路(1350メートル)は300メートルにわたって破損したほか、多くの亀裂が入っており、29日午前偵察機をニアス島に派遣、状況を調査し可能であれば同日午後にも空路で救援部隊の移動を開始するという。(毎日新聞 2005.3.29)

■ 空港の滑走路に亀裂、復路分の給油燃料も不足、南北の港も破壊

29日朝にヘリコプターで被災状況を調べた政府高官によると、空港の滑走路は亀裂が走って150メートル以上損壊し、管制塔も壊れ、ヘリコ小型機しか使えない状態。復路分の給油燃料が島に不足しているので救援機が入りにくい状態という。空港からの主要道路は寸断され、橋も数カ所で落ち、電柱も多く倒れて停電が続いている。南北にある港も破壊された。ただ、同高官は「情報が交錯した当初の推測より、被害は少ない可能性がある」との見方も示した。(朝日新聞 2005.3.29)

■ ニアス島の空港に被害、セスナ機とヘリコプターのみ使用可能

メダンのインドネシア空軍基地に設けられた北スマトラ災害対策本部の情報によると、1400メートルの滑走路を有するニアス島のビナカ空港は700メートルにわたってひび割れなどの被害を受けている。このため、ヘラクレスやボーイング型の飛行機は離着陸ができず、空路によるアクセスはセスナ機やヘリコプターに限られている。(Waspada 2005.3.30)

■ ビナカ空港は使用可能、ただし空港からグヌンシトリまでの道路は通行不能

ニアス島グヌンシトリのビナカ空港の使用状況についてリザル北スマトラ州知事は、インドネシア空軍はすでにカッサ(Cassa)機2機、ノムド(Nomed)機1機を着陸させており、全く使えないわけではないと説明した。問題は空港からグヌンシトリまでの道路で、7キロにわたって通行が不可能になっているという。したがって、グヌンシトリへの救援物資の輸送はヘリコプターを使うことになるだろうと述べた。(Tempo Interaktif 2005.3.30)

■ ニアス島＝メダンの定期便、再開の見通し

インドネシア国営アンタラ通信によると、ニアス島の中心都市グヌンシトリと、スマトラ島の主要都市メダンを結ぶ定期航空便が早ければ4月1日にも再開する見通しになった。33人乗りの小型機を日に1～2便就航させる予定という。ニアス島の空港は滑走路などが壊れているが、空港当局者が小型機の離着陸なら可能と判断したという。(朝日新聞 2005.4.1)

■ 空港の応急修理が完了、定期便の運航を再開

グヌンシトリの空港の滑走路は3月31日夜までに応急修理が完了。インドネシアのメルパチ〔ムルパティ〕航空は4月1日、グヌンシトリとスマトラ島の最大都市メダンの間の定期便の運航を再開した。支援物資の搬入やニアス島からの負傷者の搬送を円滑化させるため、従来の1日1便から2便に増便した。(読売新聞 2005.4.1)

■ ニアス島出身の青年、メダンの空港で2日間待ちぼうけ

一刻も早くニアス島のグヌンシトリに戻り、家族の安否を確認しようと気がはやるジュニアント(35)は、メダンのポロニア空港で2日間も待ちぼうけをくらっている。ジュニアントの母と兄弟は無事だったが、家が大きく損壊し、ほかの数千人のニアス島の住民とともに避難所に身を寄せている。一方、おじと3人のいとは地震の犠牲となった。ジュニアントは地震があった晩、携帯電話のスイッチを切っていた。翌朝そのスイッチを入れてみると、おじからのメッセージが入っていた。「おじさんのメッセージには『瓦礫に

挟まれて身動きできない。息ができない』とあった。そして『許してくれ』と」。中国系クリスチ안의ジュニアントによれば、彼の一家は100年前からグヌンシトリに住んでおり、「グヌンシトリではみんなが家族」なのだという。ポロニア空港で彼は、日本人ジャーナリストのチャーター機に席を確保してやるともちかける呼び込みに取り囲まれていた。その朝彼は、ニアス島に支援物資を運ぶ軍用貨物機に席を確保できるはずだった。その貴重な席は、カリフォルニア・フライド・チキンのベンチに座っていた40代の女性が、前の晩に彼に保証したものだ。ベレックスと名乗るその女性はこう言った。「関係者を知ってるわ」。ジュニアントは彼女と契約を結び、60万ルピア(約6720円)を支払った。ベレックスはジュニアントを何人かと一緒にバンに押し込み、ポロニア空港の裏側に連れて行った。そこは空軍基地がある場所だった。ジュニアントとともにバンに押し込まれたのは、ニアスに向かう飛行機を29日以来待ち続けているボランティアやジャーナリストだった。ベレックスはいろいろさく指図しながら歩き回り、空軍基地の将校に話しかけていた。彼女の乗客が彼女に状況を尋ねるたび、彼女は「我慢して。待ってなさい」と答えた。1時間半ほどたってベレックスは席が確保できないと悟り、乗客たちに金を返した。ちょうどその時、ジュニアントの携帯電話が鳴った。座席が確保できたかどうかを尋ねる親戚からの電話だった。「まだだよ」と答え、ジュニアントは泣き崩れた。(New Straits Times 2005.4.1)

■ メダンからニアス島への交通はほとんど麻痺状態

ニアス島に向かう飛行機の座席は非常に限られているため、一部のボランティアや救援物資はメダンで足止めを食らっている。ニアス島の空港は地震で損壊し、空港に着陸できるのはヘリコプターと軍用機のみとなっている。様々な組織から派遣されたボランティア約20人は空軍を頼みとするしかなく、3月31日早朝からメダンの空軍基地で待機し、軍用機に座席を確保しようと試みた。だが座席数が非常に限られており、その手配に混乱が生じているうえ、ユドヨノ大統領の視察によってニアス空港が一時封鎖されたため、ボランティアたちは気を揉むしかなかった。香港の『明報』は、ユニセフが派遣した6人の救援チームは1人分の座席をやっと運確保したが、いつ出発できるか分からない状況にあると伝えている。31日には、午前中に軍用機1機が5人の記者と小型発電機1台と数箱の物資を乗せて被災地に飛び立ち、午後数十名のけが人を乗せた軍用機が被災地から到着したのみだった。救援物資の輸送も滞っている。中国から輸送されてきた小型発電機十数台や、台湾から送られてきた遺体収容袋30~40箱などが輸送されないままとなっている。個人所有のヘリコプターや小型飛行機で被災地に飛べると触れ込み、あちこちで救助スタッフや記者を勧誘している人もいるが、彼らは濡れ手に粟で値を吊り上げ、飛行機のチャーター代は2,000~3,500米ドル(約21万円~約29万円)に達している。メダンからニアス島に向かうには軍用機で直接入る以外に、メダンからシボルガまで飛び、そこから5時間船に乗ってニアス島に入るルートもあった。だが、シボルガ空港は3月31日午後以降軍の管制下に置かれ、離陸した民間機が引き返させられるという事態も起こっている。ニアス島に向かう交通はほとんど麻痺状態となっている。(星洲日報 2005.4.1)

■ シボルガの空港では救援機が殺到して混乱

緊急支援の拠点となっているニアス島の対岸スマトラ島シボルガでは、救援機などが殺到し、空港が混乱した。3月31日には医師や援助物資を積んだオーストラリア政府の救援機2機が着陸許可が下りずにジャカルタに引き返した。(朝日新聞 2005.4.1)

■ サッカー場を臨時の発着基地に

空港も、損壊した滑走路を復旧できず、軽飛行機かヘリコプターしか着陸できない状態。国軍はサッカー場を臨時の発着基地に充てている。(東京新聞 2005.4.2)

■ メダンで待ちぼうけをくらったニアス島の青年、グヌンシトリに到着し救出活動に参加

ニアス島へのアクセスを保証してやるという客引きのいい加減な約束のせいで、ポロニア空港とメダン

の空軍基地を行ったり来たりしてとんだ無駄骨を折ったジュニアントは、ヘラクレス輸送機に席を確保し、3月31日の朝グヌンシトリから40km離れたビナカ空港にたどり着いた。グヌンシトリに着くやいなや、ジュニアントはメダンで妹に託された工具を駆使して、5日間瓦礫の下敷きとなっていたヘンドラ・ガンコーヘンの救出活動に参加した。シンガポールやメキシコの救援隊の助けを得て、ジュニアントたちはヘンドラをついに救出した。「今日〔4月2日〕の朝10時頃、ヘンドラの声が聞こえたようだ。あきらめちゃいけないと僕は思った。なぜなら彼は強くて、タフで、とてもたくましいのだから。彼は自分の自転車屋で、いつもたくさんの重労働をこなしているんだ」。夕方5時45分にヘンドラの救出に成功すると、ジュニアントは救助隊員たちに抱きついて、「ありがとう！みんなありがとう！」と叫んだ。(New Straits Times 2005.4.2)

■ メダンからシボルガ経由でニアス島入りの行程

3月28日に地震が起こった後、本紙ではニアスに記者を派遣することを24時間以内に決定した。筆者とカメラマンの2人は上司の命令を受け、ニアス島に急行することになった。だがその試みは挫折した。われわれはメダンからシボルガに飛ぶ予定だったが、シボルガ空港が閉鎖されたため、メダンで3日間足止めをくらった。地震以前はメダンとニアス島を結ぶ空路があったが、ニアス島の空港が地震で破壊され使用できない状態になっていたため、シボルガがニアス島への玄関口の1つとなっていた。だがシボルガ空港はユドヨノ大統領一行のために道を空ける必要があったため、閉鎖されてしまった。その閉鎖が解かれたのは2日後だった。ムルパティ航空に乗ってシボルガ空港に着いた後、車に45分乗ってシボルガ港に到着した。シボルガ港にはニアス島に向かう船を待つ何千人もの人びとが待機しており、窒息しそうな混雑ぶりだった。現地の住人である「ザカリヤさん」がニアス島へのチケットを入手するのを手伝ってくれた。船は150人乗りだったが、出発の日は約300人が乗船した。10時間ほど「ベトナム難民」となり、グヌンシトリ港にたどり着いた。そこからグヌンシトリの被災地まではオートバイで約15分かかった。被災地に到着したのは朝9時だった。(Utusan Malaysia 2005.4.10)

■ 電話

■ グヌンシトリの市街地は完全に麻痺、島内の他地区の状況は不明

ニアス島を襲った地震はグヌンシトリの街を麻痺させている。通信手段は携帯電話を除いて途絶えている。二階建て以上の家屋や建物は倒壊し、グヌンシトリの橋は寸断されている。午前1時現在、ニアス島のほかの郡の状況は確認されていない。地震は3月28日、インドネシア西部時間午後11時10分に発生した。earthquake.usgs.govによると、地震の規模はM8.2、震源地は北スマトラ州西岸のシボルガから南に205キロ、メダンから南西に245キロの地点。震源の深さは30キロメートル。2004年12月26日の地震以来最大規模の地震。(NiasIsland.com 2005.3.29)

■ ニアス島支援の宇野さん、「ニアス島に電話が通じない」

国際NGO「わかちあいプロジェクト」(本部・東京)のスマトラ島事務所代表を務める宇野仰さん(46)は、スマトラ島北部のタルトゥン市で地震に遭った。今年1月、支援物資の食糧や衣料品を届けるため、2泊3日の日程でニアス島を訪れており、「ニアス島の知人に電話が通じず、心配です」と話した。(朝日新聞 2005.3.29)

■ 電話回線が寸断され、情報面でも孤立

ジャカルタとの電話回線が寸断された島は、情報面でも孤立した。日本の気象庁などは発生後、インド洋沿岸諸国に津波の可能性を警告したが、ニアス島では当局からの住民に対する情報提供がなかった。政府による被害状況の把握は遅れ、余震におびえる住民らは今も情報から閉ざされたままだ。停電が続き、新聞も届かない島で、国内外からのメディア記者に「もっと大きな地震が来るというのは本当か」と、聞き回っている。(東京新聞 2005.4.2)

■陸上交通

■交通はバイクが頼り、ガソリンスタンドに200台以上

グヌンシトリでは電柱が道をふさいでいる。重機などが少なく、復旧作業が始まらない。余震も続いている。道走る自動車は、政府や軍、国連の車や救急車などわずかで、バイクが頼りだ。ガソリンスタンドではバイクが200台以上、行列していた。(朝日新聞 2005.3.30)

■ガソリンスタンドでは販売制限、順番待ち3時間以上

島に1つしかないガソリンスタンドは3月29日の休業後、30日午前9時に開店したが、午後になっても1000人以上がオートバイに乗って店の前に密集していた。店は1人600〜700ミリリットルに販売制限しているが、県庁職員のダーウィンさん(29)は「3時間半待っているが順番がこない。開店3時間前から待っている人もいたようだ」と話した。(毎日新聞 2005.3.30)

■配給所に連日の長い列 スマトラ沖地震で被災のニアス島

ニアス島では、ガソリン販売店や米の配給所に連日、長い列ができています。島中心部に近いガソリン販売店では、4月1日も朝から雨の中、数十人が並んだ。ガソリンを入れるためのペットボトルを持ち、午前8時の開店の2時間前から並ぶ人もいた。ガソリンが不足しており、地震後は一度に2リットルしか販売していない。また、島中心部近くには2ヵ所しか販売所がないため、混雑は深刻だ。

島の人の主な移動手段はオートバイ。バイクタクシーの運転手、テマさん(28)もガソリンの確保に頭を痛めている。「援助関係や取材の外国人らが大量、島に来て、普段の3倍も仕事があるのに、ガソリンが足りない。8リットル入れられるのに、なかなか満タンにできない。遠くに行く仕事は断っている」と恨めしそうに話す。テマさんは上着や帽子を脱いだり着たりして、別人のふりをして何度も列に並び直しているという。「監視している兵士に見つかったら殴られるけど、仕事をするためには仕方ない。早く元通りに、自由にガソリンを買えるようになってほしい」。

ガソリン販売所の向かいにある米の配給所も女性や子供を中心に一日中、大混雑している。10キロの米の袋を頭の上にのせたり、自転車にくくりつけたりして何キロも歩いて米を運んでいる。ニアス島のバエハ市長は「水も食料も薬も、赤ちゃんの粉ミルクもすべて不足している。ガソリンは昨日、島を訪れたユドヨノ大統領がエネルギー省に対し不足しないよう指示してくれたが、まだまだ足りない。日本には物資だけでなく、壊れた橋や道路を修理するインフラ整備で特に協力を求めたい」と話した。(朝日新聞 2005.4.1)

■ガソリンの値段は地震前の7倍に

ニアス島内の移動手段は主にバイク。もともと乗用車やトラックが少ない。援助隊が車両を運ぶ手段も船に限られるが、シボルガからの民間船は週に3便。不足するガソリンの値段は地震前の7倍に跳ね上がり、物資を積んで走るトラックは見かけない。(東京新聞 2005.4.2)

■水も電力も輸送手段も不十分、支援活動は難航

ニアス島で活動しているマレーシア医療救助協会の支援チームによると、水や電力の不足により当地での支援活動は困難を極めているとのこと。また、道路や橋などがいたるところで破壊され、交通網が遮断されているうえ、トラックなどの輸送手段が不十分で石油の供給も限られていることが状況をさらに悪化させている。同協会は現在8人のボランティアをニアス島に派遣しており、そのうち3人がグヌンシトリで活動している。(Star 2005.4.3)

■ニアス島内の交通事情は依然として悪い

マレーシア医療救助協会の副会長モハメド・イウラム・モハメド・サレーによれば、ニアスでは地震によって損壊した細い道を通らねばならず、それが支援活動を困難にしているとのこと。これらの道はバイク以

外で通行することは不可能だが、バイクでは支援メンバーや支援物資を運ぶのは困難である。また、たとえバイクで運んだとしても2、3日かかると思われ、ほとんどの道が4輪駆動車やトラックで通行可能だったアチェとは状況が異なると語った。「われわれはサバ航空からヘリコプターを1台借りた。フランスのNGOであるSamaritan's Purseから毎日ガソリンを2バレル寄付してもらっている。2～3時間の飛行が可能だ」。(Bernama 2005.4.8)

■ グヌンシトリ＝テルックダラム間で四輪車の通行が可能に

4月2日、グヌンシトリとイダノゴワ (Idano Gowa) の間は四輪車の通行が可能になった。また、イダノゴワ＝テフエホシ (Tefehosi) ＝テルックダラム間は4月4日から四輪車の通行が可能になった。ガソリンも、ニアス県でソーラー50トン、プレミアム50トン、灯油50トンが、南ニアス県でソーラー28ドラム、プレミアム50ドラム、灯油50ドラムが搬入された。「緊急段階」のあいだは、引き続き燃料の搬入が行われる予定。(Analisa 2005.4.11)

■ 港／フェリー

■ シボルガからの艦艇に乗って約100人の住民や家族がニアス入り

グヌンシトリの港には、到着するフェリーで駆けつける家族を待つ人々が詰め掛けている。インドネシア海軍が3月30日夜、対岸のスマトラ島シボルガから出港させた艦艇には、救援物資を積んだ空きスペースに約100人の住民や家族が乗っていた。暗い海を渡る船内で、メダンから実家に向かう男性は「両親を含め家族9人を亡くした」と目を伏せた。(中日新聞 2005.3.31)

■ グヌンシトリ港は入港の順番待ち

「政府は大量の救援物資を用意した。しかし、それを島に上陸させる手段がない」。対岸の港町、スマトラ島シボルガから、島最大の町グヌンシトリに向かうインドネシア海軍の艦艇内で、乗船していた兵士がそう明かした。甲板と倉庫には白米や即席めん、飲料水の箱が山積みになっていたが、物資は島の数百メートル沖に停泊した船内から運び出せていない。幅約40メートルの岸壁が1つあるだけのグヌンシトリ港は、大型船が1隻接岸すると他の船は入港できない。先行した船の積み降ろしが終わるまで、停泊状態で半日ほど待たねばならず、港の沖では民間のチャーター船を含め、常に4～5隻が列をつくっている。(東京新聞 2005.4.2)

■ アンギン港栈橋の各所に亀裂 ニアス島

4月2日、ニアス島の海岸部を見た。同島最大の港、アンギン港の栈橋には、各所に幅30センチを超える亀裂が入り、港の機能は大きく低下していた。アンギン港にはスマトラ島からの定期船が1日に数便入港する。地震後は、定期船に交じり、インドネシア海軍の艦艇も救援物資を満載して次々と到着する。しかし、栈橋の破損で大型車が港に入れず、救援物資の積み出しは小型トラックやオートバイに頼っている。そのオートバイのドライバーたちも「島の道路は安心して入れない」と話す。今後、電力の復旧や道路整備に必要な機材の運び込みには相当な困難が予想される。(毎日新聞 2005.4.2)

■ 電力

■ ニアス島、電力・通信網の85%が被害

国有企業相スギハルトは3月29日、ニアス島の電力・通信網の85%が地震により寸断されたとの報告を受けたことを明らかにした。被害は甚大であり、復興には災害対策本部主導で行うことになるだろうと述べた。(Median Indonesia 2005.3.31)

■ 中心部で少なくとも2件の火災、住民約1000人が空き地に避難

AP通信によると、3月29日にグヌンシトリの中心部で少なくとも2件の火災が相次いで発生、住民約

1000人が空き地に避難した。同夜は余震を恐れ、多くの住民が野宿したという。(読売新聞 2005.3.30)

■ 住民は余震を恐れて屋外で夜を明かす

住民らは余震による建物倒壊を恐れて屋外で夜を明かしており、臨時の救護所ができた島内のサッカー場では負傷者が手当てを受け、重傷者は救援ヘリコプターで対岸のシボルガなどへ搬送されている。ニマス島など被災地では食料や水の不足も深刻化している。(毎日新聞 2005.3.30)

■ 高台に避難した住民はろうそくや懐中電灯で2晩目を明かす

高台に逃げている数千人の住民は、ろうそくや懐中電灯を頼りに2晩目を明かしたという。8割の建物が倒れ、少なくとも6ヵ所で橋が崩落した。道路も寸断されており、町はほぼ孤立している。(朝日新聞 2005.3.30)

■ ニマス島では全域が停電

AP通信によると、ニマス島では3月29日夜の時点で全域が停電している。救助隊員はろうそくや懐中電灯を使って、がれきの中の生存者の搜索に当たった。(産経新聞 2005.3.30)

■ ニマス島で停電、救援活動は難航

スマトラ島西岸沖で発生した大地震で、インドネシア政府や国際機関は本格的な支援に乗り出したが、最大の被災地となった震源近くのニマス島では3月29日夜現在、全島で停電が続いており、救援活動は難航している。インドネシア政府当局者によると、これまでにニマス島で330人、シムル島で100人の死亡が確認されているが、なお多くの人が倒壊家屋の下敷きになっているとみられる。ニマス島では停電のため、救援隊はろうそくや懐中電灯を使っての作業を余儀なくされており、救助ははかどっていないようだ。(毎日新聞 2005.3.30)

■ 電気が通じているのは全体の15%、水道の復旧は1ヵ月先

政府や国際機関による緊急支援は本格化しているものの、ニマス島の空港や港湾は一度に多数の航空機や艦船を受け入れられず、多くの支援物資が対岸のスマトラ島西部の町シボルガに滞留している。さらに島内では道路や橋が破壊され、多くの被災者に物資が行き渡っていない模様だ。緊急支援の停滞で、復旧・復興のめども立っていない。政府によるとニマス島で電気が通じているのは全体の15%程度。水道の復旧も最低でも約1ヵ月先となる見込みだという。(読売新聞 2005.4.4)

(3)救命救助・医療救護

■ 搜索・救出

■ グヌンシトリで停電、救出作業に困難

AP通信によると、グヌンシトリの基督教会の神父は「街は完全に破壊され、炎が上がっている」と語った。数千人の負傷者が出ているが、津波の襲来を恐れた医療スタッフは高台へ避難してしまったという。現地警察当局者は「30分おきに余震に襲われているうえ、電力が途絶え、暗闇の中での救出作業は困難を極めている」と語った。(毎日新聞 2005.3.29)

■ 現地NGO、グヌンシトリで救援活動を開始

3月29日午前8時40分現在、公共福祉のための基督教協会(YAKKUM)はニマス島で21名の死者を確認した。ニマス島グヌンシトリ市のYAKKUM緊急班のミカエル・ユダ・ウィナルノは、「市内をバイクで巡廻したところ、21名の遺体を発見した。しかし死者数はもっと増えるおそれがある。昨夜から今まで倒壊した家屋の下敷きになっている人がまだいるようだ」と述べた。グヌンシトリ市の建物の60%近くが倒

壊した。宗教施設や公共施設も含まれている。また、コタ市場で火事が発生し、ディボネゴロ通りはシロンブ方面にかけて燃えている。「津波を伴った地震〔2004年12月スマトラ島沖地震〕の際には街の被害は軽微だった。昨夜の地震は数百の家屋、政府関係の建物、3つのモスクと3つの教会、商店街ならびに2軒のホテルに被害を与えた」。YAKKUMはジャミ・モスクとアグン・モスクの2ヵ所にボスコ（詰め所）を設置し、避難した住民を受け入れている。不足しているのは医薬品と医療スタッフ。食料については食料品店などの協力を得て当面の分は確保したという。また、災害対策本部や「児童教育研究センター」などと協力して、避難民の受け入れと犠牲者の救出を行っている。（Media Indonesia 2005.3.29）

■ 役人や医師も避難、住民は「どこに救助を求めているのかわからない」

北部の中心都市グヌシトリでは3月29日、「十数分ごとに余震がある。崩壊が怖くて行政の建物にも近づけない。役人は避難して不在。どこに救助を求めているのかわからない」との住民の声をメディアが伝えた。病院も被害を受け、医師らも高台に避難したため、初期の救急活動がはかどらなかった模様だ。（朝日新聞 2005.3.29）

■ 救急隊員「被害の全体像が把握できない」

ヘリコプターで現場に駆けつけた救急隊員は「被害の全体像が把握できない」と悲鳴を上げた。国軍は3月30日から救援部隊や物資の空輸を始める。物資を運ぶ国軍の艦船3隻も29日、同島へ急派された。（毎日新聞 2005.3.29）

■ 瓦礫の下から自力で脱出

3月29日の朝に自力で脱出したアレックス（27）は、瓦礫の下で、小さな光が差し込む方向へ出ようと身体をよじった。近所の商店の人々の叫び声が聞こえたので、一緒に住む両親とともに声をあげたが、人々の耳には届かなかったのか、立ち去ってしまったという。アレックスによると、父親は狭い空間に閉じ込められ、埃が立ちこめるなか、呼吸ができずに息絶えた。母親はまだ生きていたが、助かる可能性は低いと思うと語った。アレックスが最後に父親を見たのは、地震が起ったときに外に出ようと扉を開けようとした姿だった。しかし間に合わず、アレックスも両親も倒れてきた家屋に閉じ込められた。（Tempo Interaktif 2005.3.30）

■ がれきに足を挟まれたまま息を引き取る

運転手、ビクトルさん（51）は、崩壊した家屋のがれきで肩を強打した母、レニアワティさん（70）を抱えていた。ビクトルさんの近所にある2階建ての弟宅が全壊し、2階にいためい（17）とおい（6）が亡くなったという。「大きながれきに足を挟まれためいを助け出そうと、ハンマーで石を砕こうとしたが、だめだった。めいは血だらけで、ゆっくりと息を引き取った。おいはがれきが頭を直撃し、泣き声すら上げずに亡くなった」。同じ家に住み2人の孫を亡くしたレニアワティさんはショックで食事を受け付けられないという。（毎日新聞 2005.3.29）

■ がれきからの救出作業あちこちで

大地震から2日目の3月30日、ニアス島では全壊家屋の跡に人々が集まり、がれきの下敷きになった家族や知人を助け出そうとする光景があちこちで見られた。市中心部の至るところで、人々ががれきの下から家族を助け出そうとしていた。雑貨店経営、ウィウィウアントさん（38）は自分もすき間に数時間閉じ込められたが、素手でがれきをかき分けて脱出した。その後、がれきの下で亡くなった母（65）と2人のおばを助けようと十数人で作業していたが、3人に覆いかぶさるコンクリート片はあまりに大きく、人力ではどうにもならない。疲れきった顔でがれきの上に座り込み、「すき間から母の体が見えているのに……」とつぶやいた。（毎日新聞 2005.3.30）

■ がれきと泥のニアス島、倒壊家屋を素手で掘る住民も

3月29日夜の降雨で地面はぬかるんでいる。住民は、生き埋めになった家族を救おうと、泥まみれになりながら素手でがれきを掘り起こしている。ある民家の前には、十数人の遺体が泥にまみれて横たえられていた。港に近い繁華街の一角では、3階建ての家屋が土台から崩れ、中には4人が生き埋めになった。しかし、重機などがまだないことから、救出作業に入れない状況だ。飲食店員のデニーさん(22)は「今回の地震は5分間も揺れが続いた。昨年12月の大地震よりも大きな揺れだった」と恐怖の被災体験を語った。(読売新聞 2005.3.30)

■ 50歳の女性、瓦礫の下から救出される

ニアス県グモンシトリで、3月28日深夜の地震以来瓦礫の下に閉じ込められていた50歳の女性が3日ぶりにインドネシア国軍によって救出された。グモンシトリに住むユリアナ(50)は、地震が発生したとき、同居する兄弟やその家族とともにすでに休んでいた。ユリアナはまだ救出されていない家族のことを心配している。(Tempo Interaktif 2005.3.30)

■ がれきの中から悲鳴や声、30日になって静かに

被災した島々はスマトラ島から船で十数時間かかることもあり、救援は遅れている。321体の遺体が確認されたニアス島の中心都市グモンシトリを30日訪れた朝日新聞ジャカルタ支局のインドネシア人助手の目の前では、家族や近所の人たちは泥まみれになりながら、バールや板きれを使って助け出そうとしていた。住民によると、前夜まで町のあちこちで建物が崩れ、がれきの下から泣き叫ぶ声が夜通し聞こえた。バイクタクシーの運転手テルさん(23)は、自宅の下敷きになった兄の遺体を運び出すため、手作業でがれきを取り除いていた。「体が見えるのに、何もできない。くやしい」。警察に連絡したが、誰も来ない。周囲のがれきの中からも前夜までは悲鳴や声があがっていた。30日になって静かになった。(朝日新聞 2005.3.30)

■ 救助活動が難航、大量の医療物資やテントの要請

ニアス島では3月30日、飛行場や道路の倒壊により、国連や民間団体による救助活動が難航している。発生から2日たっても被害の全容は把握できない状態で、国連の援助関係者は「けが人の数は不明だが、現地からは大量の医療物資やテントの要請がある」と述べた。(読売新聞 2005.3.30)

■ 「けが人死んでしまう」ニアス島、援助遅れにいらだち

グモンシトリのサッカー場に設置された野外病院には数十人の重傷者が運び込まれたが、ベッドはなく戸板に横たえられたまま点滴を受けている。対岸にあるスマトラ島の病院への輸送を待っている間に、意識を失う人もいる。3月29日夜、同病院の支援にあたっていた欧米の援助関係者は「このままでは4人が死んでしまう」と話し、移送態勢の遅れにいらだちをあらわにした。当局者によると、29日に島外に移送できた負傷者はわずか17人だった。(読売新聞 2005.3.30)

■ グモンシトリは壊滅的な打撃を受けた

ニアス島で重機など機材が不足し、倒壊した家屋などのがれきを住民が手で掘り返し、下敷きになった被災者を救出しようとしている。島の中心都市グモンシトリは壊滅的な打撃を受け、郊外の空港と同市を結ぶ海岸道路は岩や土砂の崩落で寸断された。また空港の滑走路にも亀裂が入った。(CNN.co.jp 2005.3.31)

■ 「わたしは生きている」…携帯メールで助け求める スマトラ沖地震

「お父さんは亡くなった。わたしは生きている。助けて」――。3月31日付のインドネシアタ刊紙シナル・ハ

ラパンは、スマトラ沖地震の被災地ニアス島の主要都市グヌンシトリで、がれきの下に閉じ込められた少女が、救助を求める携帯電話のメールを同級生に送っていると報じた。少女は中学生のメラニさん(15)。自宅が倒壊し、父親や兄弟と一緒に下敷きになった。30日、懸命に救助を求めるメールが同級生に相次いで届き、担任の教師と携帯電話で話した。倒壊した自宅に国軍兵士やフランス救助チームが集まり、名前を呼びかけたが応答がなく、正確な居所は分からなかった。31日も搜索を続けるはずだったが、同日午前は、ユドヨノ大統領の被災地視察で忙しかったため、兵士は1人も現場に姿を見せなかったと同紙は伝えた。(産経新聞 2005.4.1)

■ がれき下51時間、13歳救出

「だれかいるの? 助けて」――。がれきの下から声が響いた。再び起きたスマトラ沖大地震から51時間ぶりに、倒壊した家屋の下から13歳の少年が救出された。今回の地震で最も被害が大きく、多数の死者が確認されているインドネシア・ニアス島。少年の救出は、悲嘆にくれる島民をいくらかでも勇気づけた。多くの建物が倒壊したニアス島中心部で3月31日午前2時ごろ(現地時間)、地震発生から51時間ぶりに中学生の少年が救出された。電器店の長男のミッチェル君(13)。頭に軽い傷があるものの、命に別条はないという。ミッチェル君は電器店を営む父と母、妹2人の5人家族。母と妹の1人は遺体で発見された。父ともう1人の妹の行方はまだ分かっていない。

建物は1階が店舗で、2、3階が住居だったというが、跡形もなく崩れている。父方の伯母ユニさん(46)によると、地震が起きた時、ミッチェル君は2階の自分の部屋にいたという。揺れを感じてすぐ部屋の前にある階段を下りて外へ出ようとした。その時、家が崩れた。しかし、たまたま1階の部屋のドアが斜めに倒れ、小さなスペースができた。そのすき間に入る形で助かったという。ユニさんたちは地震発生直後から、親類や店の従業員らと協力し、手ではがれきを1つ1つ取り除いていった。かすかに声のようなものが聞こえたため、崩れた壁を取り除くと、「だれかいるの」「助けて」と叫ぶ声が聞こえた。近くにいたノルウェーの緊急援助隊に助けを求め、まもなく救出された。

ミッチェル君に「どれだけ閉じこめられていたのか分かる?」と尋ねると、「1週間くらいでしょ」と答えた。「お父さん、お母さんはどこ?」とも、ユニさんに尋ねた。父ともう1人の妹はいまだにがれきの下で、生存は絶望的だったが、ユニさんは「どこかに逃げているよ。心配しなくていいよ」と言うしかなかったという。ユニさんは「心配するなと言ったけれど、落ち着いたところに両親のことを教えてあげないと」と、つらそうに話した。ミッチェル君が救出された現場付近は、建物のほとんどが跡形もなく倒壊し、強い死臭が漂っている。どこから手をつけていいかわからないような状況の中での生存者救出だった。(朝日新聞 2005.4.1)

■ 商店経営者が遺体で見つかる

スマトラ沖地震発生から5日目。壊滅的な被害を受けたニアス島の中心都市グヌンシトリ市中心部の商店街ではなお、救助作業が続いていた。8軒の商店を経営していたリム・ワットキョンさん(70)は4月1日午後4時、そのうちの1軒のがれきの中から遺体で見つかった。近所の人がリムさんの姿が見えないのに気づいたのは地震直後。最初は近所の人が手ではがれきを取り払い、次には、なたやのこぎりを持って崩壊した店の柱や屋根の破片を1つずつ取り払った。リムさんの遺体は商品の間から見つかった。リムさんの無事を祈り続けた従業員のズルファンさん(28)は「機械なしではどうにもならなかった。もっと早く助け出していたら」と今にも泣き出しそうな表情を見せた。(毎日新聞 2005.4.1)

■ 10歳少女を2日後に救助 ニアス島

食料品店を経営するインドムさん(50)の娘ファニちゃん(10)は地震発生からほぼ2日後の3月30日午後、がれきのすき間からほとんど無傷で助け出された。「地震の時は自分の部屋の外にいた。ものすごく揺れて倒れたら体の上に壁や天井が落ちてきた。泣いて助けを呼んだけど、だれも来なかった」。真っ暗ながれき

の中でファニちゃんは床をたたき続け、それに疲れると眠り込んだ。「だれかが壁を壊して私を外に出してくれた。その時お父さんとお母さんはどこにいるのだらうと思ったの」。しかし、ファニちゃんの父インドムさんと母アグネスさん(50)はいずれも家の下敷きになって亡くなっていた。ファニちゃんの親類の人々は「本人は(両親の亡くなったことを)知っているようだが、だれも、そのことを口にできないんだ」と話した。(毎日新聞 2005.4.1)

■ 生後1週間の赤ちゃんを母親を救助

インドネシアの地元テレビによると、グヌンシトリで4月1日、生後1週間の男の赤ちゃんを母親が救出された。2人とも無事だが、父親や兄は見つかっていないという。(毎日新聞 2005.4.1)

■ 国連、ニアス島での搜索・救出を終了し、復興・再建に移行

国連の搜索・救出担当官オラフ・リングジェルデによれば、ニアス島における被災者の搜索・救出活動はこれ以上継続しても成果がないと思われるため、4月1日に終了し、復興・再建に移行すること。グヌンシトリでは倒壊した200棟の建物で4つの国際救助チームが搜索・救出活動を行ってきたが、現在では生存者より遺体を発見することがはるかに多くなっている。リングジェルデ担当官は「もうこれ以上生存者はいない。3月31日の朝に生存者を1人発見したが、それが最後だ。それから24時間経つが、そのあいだ生存者を発見していない。生存者の存在を知らせる物音が瓦礫の下から聞こえるという地元の人びとからの通報もない」と語った。ニアス島では家屋1936棟、店舗122棟、モスク11棟、教会83棟、仏教寺院1棟、政府機関の建物30棟、学校78棟が倒壊したり損壊したりした。(AP 2005.4.1)

■ スマトラ沖地震、ニアス島など救助難航・多数が下敷きに

インドネシア政府などは4月2日までに、スマトラ島沖地震の被災地ニアス島などで下敷きとなった家屋から200人以上を救出し病院に搬送した。依然430人以上が倒壊した建物などの下敷きになっているとみられる。インドネシア国軍や海外のボランティアが倒壊した建物の下から相次いで島民を救出。ニアス島の空港が一部再開され、オーストラリア軍300人や医療用ヘリコプター2機が到着、各国からの物資が次々運ばれている。ただ現地ではマグニチュード(M)5以上の余震が続いており、救助活動は難航。安否の確認にも手間取っており、インドネシア国家警察は2日昼の時点で死者確認数を前日と同じく、424人から変えていない。(日経新聞 2005.4.2)

■ がれきの下、5日ぶり男性救出

ニアス島で4月2日、男性が倒壊した自宅の下から5日ぶりに救出された。擦り傷程度で意識もはっきりしているという。AP通信などが伝えた。助かったのはグヌンシトリの町に住むヘンドラさん(42)。救助隊は前日に作業を打ち切っていたが、家族が作業員を雇って搜索。がれきの中から助けを求める声が聞こえた。駆けつけたシンガポールの救助隊員は「擦り傷はあるが、声はしっかりしていた」と話した。搜索や救助は難航しており、島の面積の1割ほどしか実施されていないという。各国の支援は本格化し、2日は医療関係者60人を乗せた豪州海軍の艦船が到着した。(朝日新聞 2005.4.2)

■ 5日ぶりに男性救出 ニアス島

スマトラ沖地震の最大の被災地ニアス島では4月2日も生存者救出のため懸命の搜索が続く、主要都市グヌンシトリのビル倒壊現場で、がれきの下敷きになっていた男性が5日ぶりに助け出された。同島など被災地では遺体の収容も続き、インドネシア政府の現地対策本部は2日、計548人の死亡を確認したと明らかにした。この日救出された男性は商業地区の目抜き通りにある自転車店店主ヘンドラさん(42)。2階建ての店舗兼住宅が倒壊し、2階の住居と一緒にいた妻や2人の娘とともに生き埋めになった。

同日午前、倒壊現場を搜索していた店員が「助けて。水が欲しい」と訴えるヘンドラさんの声に気づき通

報。同国の海兵隊や、シンガポール、メキシコの救助隊が駆け付け、5時間以上の搜索の末、近所の人々や報道関係者が見守る中でヘンドラさんを救出、病院へ搬送した。健康状態は良好という。母親のタンさんは「息子は死んだと思い、ずっと泣き続けていた。せめて遺体は確認したいと神に祈っていたが、生きていたとは…」と涙ぐんだ。助けを求める声に気づいた店員のエリパティ・テランバヌアさんは「最初は信じられず幽霊の声かと思った」と話した。グヌンシトリでは、別の倒壊住宅でがれきの下に閉じ込められ、携帯電話のメールで同級生らに助けを求めた中学生の少女、メラニさん(15)の搜索も続けられた。(産経新聞 2005.4.2)

■ ニアス島の電器店主、がれきの下から5日ぶりに救出

ニアス島グヌンシトリの中心部で4月2日午後5時30分、崩壊した鉄筋コンクリート3階建ての住居兼電器店のがれきの下に生き埋めになっていた店主の男性、ヘンドラ・ガンコーヘンさん(42)が、5日ぶりに救出された。同日午前10時ごろ、近くを通りかかった人が、どんどんと壁をたたき音と、「寒い」と言うヘンドラさんの声を聞き、知らせを受けたシンガポールの救助隊が、クラッカーや飲料水をがれきの中に差し入れながら、救出作業を続けた。深さ4メートルのコンクリートのがれきの下から助け出されたヘンドラさんは、「ありがとう」と述べ、救急車で病院に運ばれた。医師の診断によると、腰にすり傷があるだけで、ヘンドラさんは「僕は元気だ」と記者団にしっかりした声で語った。1メートルのすき間の間に横たわって救助を待っていたというヘンドラさんは「水は全く飲んでいなかった。妻と子供がそばにいたんだけど、死んでしまった。もう少し早く救助に来てくれたなら助かったのに」と言い、泣き出した。(読売新聞 2005.4.2)

■ 個人による搜索活動は依然として継続中

グヌンシトリで支援活動を行っているマレーシア特別救助隊(Smart)は4月5日、痛ましい経験をした。おしゃぶりをくわえたまま50代の祖母にしがみついている生後10ヵ月の乳児の遺体を瓦礫から引き上げた。Smartの隊長モハマド・ヤアコブ・ジュソーによれば、瓦礫と化した店舗跡で乳児の祖母の弟に雇われて2人の搜索を行っていた避難民が祖母の手を発見し、Smartの助けを得て人力で10時間かけて瓦礫を掘り起こしたが、2つの遺体を引き上げる結果に終わったとのこと。祖母の弟でタンと名乗る40代の男性は、孫と同居して小さな店を営んでいた姉一家の安否を確認するためスラバヤからやってきたが、2つの遺体と対面する結果となり、悲しみに打ちひしがれた。同じ家に住んでいたメイドの遺体はバラバラの状態で、同じ建物の別の部屋で発見された。(Bernama 2005.4.5)

■ 携帯電話のメールで助けを求めている少女

すっかりスマトラ沖地震が話題に上らなくなったところに、ジャカルタからメールが届いた。高松出身の旅行作家・小松邦康さんだ。2度目の大地震の直後に3日間、震源地近くのニアス島に入ったのだという。彼は一家が自宅の下敷きになった場面に遭遇した。家族5人で閉じ込められているんですーがれきの下から中学生の少女が、携帯電話のメールで助けを求めている。この話は一部のテレビやインターネットで紹介されたから、覚えがある人もいるだろう。彼は取材のコーディネーターとして、まさにその現場にいた。

国軍の作業が始まったのは、発生から3日目の朝だ。ところが「重機がない」と1時間で打ち切る。一方、午後に到着した外国の救助隊は、チェンソーで鉄筋を切り空気を中に吹き込む。それでも日没過ぎ、「明朝、重機を借りてくる」と作業停止。重機は調達できなかった。昼前、国軍兵士が来て救助隊に頭を下げたが、ジャカルタから駆けつけた姉には一言もなかった。姉はショベルを手にも、コンクリートの塊に立ち向かう。だが頼みの救助隊は別の場所に移っていった。

小松さんは言う。「もともと国軍はスハルト体制を守るためにできた軍隊ですから、被災者のために活動しないのです。外国の支援団体以外は災害時に頼りになる組織がないのです」。兵士は支援物資を軍の倉庫に運ぶのに忙しい。この先支援が得られないと察した島民は、島外に脱出を始めた。彼がジャカルタに戻った後も、現地のテレビでは続報が流れていた。少女の携帯電話と両親ら4人の遺体が発見されたという。彼女が見つかったとの知らせはまだない。(四国新聞 2005.4.9)

■ 倒壊した豪邸の瓦礫を入びとは手作業で除去していた

グヌンシトリには、クアラルンプール市のバンサー地区やブキッパンダラヤ地区の高級住宅街にあるような家が数多く立ち並んでいる。その持ち主の多くは、海運業や流通業に従事している華人である。グヌンシトリの被災地では何百軒もの家が倒壊し、いたるところで救援活動が行われていたが、重機が不足していたため、ほとんどの人が手作業で活動を行っていた。鍬やハンマーで作業をしている人もいたが、素手で作業をしている人もいた！ インドネシア政府はアチェの被災からまだ学んでいないようだ。(Utusan Malaysia 2005.4.10)

■ 生後2ヵ月の女兒、日米連携で一命取り留める ニアス島

3月28日のスマトラ島沖地震で最も被害の大きかったニアス島で4月12日、肺炎で危篤状態だった生後2ヵ月の女兒が、日本の国際緊急援助隊の医師らによる救命措置と米海軍病院船での集中治療による「日米連携」で一命を取り留めた。援助隊の団長を務める外務省国際緊急援助室の望月寿信・首席事務官の話では、12日午前10時ごろ、バレンティヌスちゃんが母親のファナハさんに抱きかかえられ、同島最大の町グヌンシトリの県知事公邸そばにある援助隊の野外診療所に運ばれてきた。診察にあたった朝日茂樹医師(弘前大医学部助教授)によると、バレンティヌスちゃんの呼吸はすでに不規則で、顔にチアノーゼが現れており、そのままでは30分ほどしかもたない重篤な状態だった。朝日医師はすぐに人工呼吸を開始するとともに、看護師が女兒の細い血管を何とか探し出して点滴を実施。呼吸障害の原因となっていたたんを吸い出すと、それまで真っ青だった顔が赤みを帯びてきたという。その後、米軍のヘリコプターで米海軍病院船マーシーに搬送。米軍側から13日午前、生命の危機は脱したとの連絡があった。(朝日新聞 2005.4.14)

■ ニアス島被災、JICA医療チームが肺炎の乳児救う

3月28日の大規模地震で壊滅的な被害を受けたインドネシア・スマトラ島沖のニアス島で、地震発生直後から活動を続けている「国際協力機構(JICA)国際緊急援助隊」医療チームが、現地で被災して肺炎で瀕死状態だった生後2ヵ月の女兒の命を救った。ニアス島沖に停泊する米海軍の病院船にヘリで緊急搬送するまでの間、医療チームの懸命の点滴と人工呼吸の救命治療が“小さな命”をつなぎ止めた。

島民のバレンティヌス・ベラムバヌアちゃん。被災した母親に抱きかかえられ、現地時間の4月12日午前11時30分ごろ、同島のグヌンシトリでテントを設営したJICAの診療所に運ばれてきた。重度の肺炎で意識がほとんどなかったため、医療チームは米海軍の病院船にヘリの出動を要請。到着までの約30分間、弘前大助教授の朝日茂樹医師らスタッフが、細い血管を探り当てて点滴を施すとともに、痰を吸引するなどして緊急措置。青白かったバレンティヌスちゃんの顔はまもなく赤みを帯び始め、無事、病院船に収容された。現在、快方に向かいつつあるという。

JICAは、インド洋大津波発生後の昨年末からインドネシア・アチェなど周辺4ヵ国に医療スタッフを派遣。ニアス島での地震でも3月30日から医療チームが現地入りし、1日150人以上の被災者の治療にあたっている。浅野寿夫JICA国際緊急援助隊事務局長は「医薬品や医療設備が乏しい中、献身的な治療が実を結んだ明るいニュース。今後も現地の医療に貢献していきたい」と話している。(読売新聞 2005.4.14)

■ 負傷者の救護・搬送

■ 昨年の津波で病気が蔓延、悪化の恐れも

アメリカやオーストラリアなどの医師らによるNGO「サーフエイド・インターナショナル」のスマトラ島側のパダンにある事務所では、医療チーム代表のデーブ・ジェンキンス医師らが、ニアス島で活動中の20人の同NGOスタッフの安否確認に追われていた。ジェンキンス医師は「島では、75%の家々が倒壊していると聞いた。昨年の津波被害以来、病気が蔓延(まんえん)しており、状況の悪化も考えられる」と話した。(朝日新聞 2005.3.29)

■ 国軍のヘリでシボルガに負傷者を搬送

ニアス島の主要都市グヌンシトリでは建物の8割が壊れ、多くの島民がその下敷きになった。対岸のシボルガの公立病院には「負傷者が国軍のヘリで次々搬送されている」という。インドネシア国軍広報官によると、ニアス島の北側にあるシムル島とバニャック島で地震直後に2～3メートルの津波が観測された。両島で死者・行方不明者が出ているとの情報もあるが、情報収集が遅れている。(日経新聞 2005.3.29)

■ スマトラ島へ搬送されるのを待つ少年

グヌンシトリのサッカー場に設けられた“野外病院”。3月30日午前、顔面血だらけのエルウィン君(11)が、スマトラ島の病院への搬送を待っていた。目の前には急造のヘリポート場がある。「寝ているときに家が激しく揺れて、がれきが落ちてきたんだ。全身が痛くて死にそうだ。早く治療して…」。(産経新聞 2005.3.30)

■ シボルガに移送された負傷者は約20人

多数の重傷者は島外への緊急移送が必要だが、空港までの道が寸断されているため、搬送は大幅に遅れている。ヘリコプターが足りず、対岸にあるスマトラ島シボルガに移送されたのは約20人にすぎない。(朝日新聞 2005.3.30)

■ 病院では重傷患者だけを受け入れ

病院では地震によるけが人10人が入院していたが、大半が「余震が怖い」と廊下などにマットを敷いて横たわっていた。ゼガ医師(53)は「重傷患者だけを受け付けているが、軽傷で未治療の住民も多い」と話した。(毎日新聞 2005.3.30)

■ 負傷者はサッカー場で手当てを受ける

300人以上の遺体が確認された同島の中心都市グヌンシトリでは、市内にあるサッカー場や郡長の自宅などに負傷者がバイクなどで次々と運び込まれ、医師らの手当てを受けているという。医薬品や食料、飲料水などが足りない。(朝日新聞 2005.3.30)

■ 空港に診療所

グヌンシトリの空港には、急ごしらえの診療所がありますが、3月30日だけで200人以上の負傷者が運び込まれました。「街の中に入っていくつもりでしたが、この空港に大勢の負傷者が来たため、ここに急きょ診療所を設けたのです」(フランスの緊急医療チームメンバー)。重傷を負った人はスマトラ島へ空路搬送されています。支援の輪が広がる一方、医薬品不足や、被災地の情報不足で関係者自身が混乱する場面もあり、支援体制の充実にはまだ時間がかかりそうです。(TBS 2005.3.31)

■ 重傷患者のメダンへの搬送始まる

ニアス島で地震により重傷を負った十数名の北スマトラ州メダンへの輸送が始められた。シンガポール政府所有の輸送ヘリコプターは3月31日、メダンのボロニア空軍基地に到着し、搬送された重傷患者はハジ・アダム・マリク病院、ピルンガディ病院、プキットバリサン第一地方軍管区病院、アブドゥル・マリク病院、バヤンカラ病院、ハジ・メダン病院、エリザベス病院へと運ばれた。また、救急車に乗り切らなかった患者は空軍の医療ポストで外国人を含む医療チームに手当てを受けている。北スマトラ州通信情報局局長ナインゴランは、被災地に派遣・輸送すべきものとして、医薬品、医師、看護師、飲料水、食糧、テント、燃料、発電機、毛布の8つを挙げた。また、北スマトラ州政府社会局は、ニアス県と南ニアス県にそれぞれコメ10トンずつを輸送した。災害対策本部では、食糧、医薬品、遺体収容袋、発電機8台を空路と陸路でニアス島に輸送した。(Tempo Interaktif 2005.3.31)

■ 負傷者搬送わずか63人 ニアス島、救助難航 スマトラ沖地震

ニアス島から対岸のスマトラ島シボルガへ、国軍のヘリコプターで搬送された負傷者は3月31日現在で、わずか計63人であることが、地元当局の調べで分かった。ニアス島の主要都市グヌンシトリだけでも避難民は6000~7000人。負傷者が多数含まれており、救援活動の難航ぶりが裏付けられた。機動力の高いヘリによる搬送強化が緊急課題となりそう。シボルガにある同国空軍基地で、この日稼働していたヘリはわずか4機。搬送できる負傷者は1機あたり数人程度で、ヘリの絶対数の少なさが搬送作業が遅れている原因の1つとみられる。ニアス島には空港があるが、地震で滑走路の一部が壊れ、航空機の使用は限定されている。同島とシボルガを結ぶフェリー船もあるが、片道約10時間かかるため、負傷者搬送には適さない。ニアス島の死者は300人とされているが、シボルガの当局者は「ニアス島全体では推定約400人が倒壊した建物の下敷きになるなどして、依然行方不明になっている。最終的な犠牲者数は不明だ」と話している。(産経新聞 2005.4.1)

■ 公立病院では医薬品が不足

医薬品も足りない。発生3日目に再開した公立病院はロビーにベッドを置き、重傷患者が点滴を受けている。受付カウンターに立ったまま処置を受ける光景は、野戦病院さながら。床には血痕が付いたままだ。(東京新聞 2005.4.2)

■ 遺体の処理

■ グヌンシトリの街には遺体が放置されたまま

ニアス県グヌンシトリにいるボランティア、ユダ・ウィナルノがラジオ・ソノラに伝えたところによると、3月29日現在、グヌンシトリでは遺体が街中に転がっており、遺体臭が漂っているとのこと。当局は遺体の回収作業を始めた。ユダは、ディボネゴロ通りで27人、教会近くで14人の遺体を発見した。道端にあって回収されていない遺体は応急措置として布がかけられている。ユダによれば、重機がないために家屋の瓦礫の下にある遺体を収容することがきわめて困難な状況。中央政府からも地方政府からも支援の手は届いていない。一方、AFP通信は、インドネシア赤十字のボランティアを運ぶ飛行機がグヌンシトリ入りしたと伝えている。ユダによると、2本の電柱によって港への道が閉鎖されている箇所などがあり、救援活動は困難をきわめている。また、余震も続いており、住民の多くは丘に避難している。(Kompas 2005.3.29)

■ 遺体は道路上に放置されたまま

3月30日朝、被害の集中した同島西方沖のニアス島(人口60万人)に入った朝日新聞ジャカルタ支局の助手によると、多くの建物が崩壊したままだ。倒れた住宅の下敷きになって死亡した遺体が道路上に放置されている、と地元メディアは伝えている。町の中心を走るディボネゴロ通りには、下敷きになった建物から運び出された遺体が放置されたままになっているという。(朝日新聞 2005.3.30)

■ 遺体は教会やモスクへ

キリスト教徒が多いニアス島では、遺体が相次いで教会に運ばれてくる。カレット通りにある聖マリア教会の敷地には70体を超す遺体が、復活祭で使われたばかりのテントの下に並べられ、布がかけられている。市内のジャミイリルモスク(イスラム教の礼拝所)にも41体の遺体が運ばれ、すでに埋葬された。(朝日新聞 2005.3.30)

■ 遺体は教会の外などに覆いをかけただけで放置

島内のサッカー場は臨時の救護所となり、木のドアに横たわって移送を待つ重傷者もいる。国連のヘリコプターが援助物資を空輸しているが、食料や水が不足しているという。犠牲者の遺体は、教会の外などに覆いをかけただけの状態で放置されている。(産経新聞 2005.3.30)

■外国人の安否

■欧米人サーファー11人の生存を確認

ニアス島では11人の欧米人サーファー(イギリス人3人、スウェーデン人2人、カナダ人2人、フランス人2人、アメリカ人1人、ドイツ人1人)の生存が確認された。スウェーデン外務省の広報担当官クリスチャン・カーソン氏は、「彼らは野宿しながら、水や食べ物を沸騰させ、それらを口にしていた。何を食べていたかは分からないが、ココナツを食べていたのではないかと語った。(AP 2005.3.31)

■ホテル倒壊現場で17人の遺体、外国人の可能性も

国営アントラ通信は31日、ニアス島の主要都市グヌンシトリのホテル倒壊現場で17人の遺体を確認されたと伝えた。このホテルは、サーフィンを楽しむ外国人客が多いことで知られ、外国人が犠牲となった可能性がある。当局が身元の確認を進めている。(日経新聞 2005.3.31)

■シンガポール軍、西洋人観光客7人を救助

シンガポール軍は1日、ニアス島の南西50キロのアス島で観光客と見られるベルギー人5人、スウェーデン人とオーストラリア人各1人を救助し、スマトラ島メダンに搬送した。(読売新聞 2005.4.2)

■スウェーデン人4人が行方不明

インドネシア外務省は4月1日、ニアス島で観光客と見られるスウェーデン人4人が行方不明になっていると発表した。(読売新聞 2005.4.1)

■精神的不安

■余震のたび冷や汗…被災住民悩ます不安 スマトラ沖地震

「小さな余震があるたびに息子の顔は青ざめ、冷や汗が出る」。スマトラ沖地震の直撃を受けたインドネシア・ニアス島で、動悸や不安、不眠などを訴える人が増えている。昨年末の大津波の記憶も、人々の精神的不安を一層高めているようだ。中心都市グヌンシトリの病院に足のけがで入院しているチャンドラ・ダエリ君(13)は、地震以来「寝ているベッドに誰かが座るだけで、強いショックを受ける」(父親)ようになった。地震再発の不安から不眠がち。小さな揺れを感じるたびに顔面蒼白(そうはく)になり、汗がにじむという。「そばに私がいないと『父さん、僕を置いていかないで』『なぜ神様はこんなことをするの』と叫ぶのです」とベッド脇の父親は語った。地震後、同島で医療支援活動をしている日本の国際緊急援助隊の医師によると、隊の仮設診療所を訪れる人の3分の1近くが、動悸や頭痛、目まい、不眠などの症状を訴えているという。地元医療関係者によると、このような人の中には「昨年末のような大津波が再び島を襲うのでは」という不安にとらわれている人も多い。ある病院では、入院患者が「余震で病院が壊れる」と訴えるため、患者を安心させようと医師が病院に泊まり込むようにしているという。(産経新聞 2005.4.4)

(4)必要物資の確保

■食料・飲料水が不足

■ニアス島は孤立状態、2万人に飲み物が不足

副大統領の報道官によると、ニアス島は主な運輸や通信施設が大きな被害を受けて「孤立状態」になっている。現地入りした英国系NGO「オックスファム」は「2万人に飲み水が不足している」という。「数千人が高台に避難したまま2日目の夜を迎えた」との情報もある。(朝日新聞 2005.3.29)

■IOM、シボルガ経由で食料・医薬品を搬送

APによると、国際移住機関(IOM)は3月29日、水や牛乳を含む食料や医薬品を、ニアス島対岸のスマトラ島シボルガに陸送。船でニアス島に送る予定だ。既に現地入りしている英国の非政府組織オックスファ

ムのメンバーは29日「多くの家屋が倒壊している。被害の全体像は把握できていない」と語った。(産経新聞 2005.3.30)

■ 家庭では食料が少なくなり、店は閉まったまま

食べ物が少ない家庭が多いという。店はシャッターを下ろしたままだ。「米をくれ」「水がない」。3月30日昼過ぎ、緊急食糧を備蓄している県知事公舎に約50人の住民が詰めかけた。略奪を警戒した武装警官隊が追い払った。郊外の倉庫でも同様の抗議があった。(朝日新聞 2005.3.30)

■ 2万人分の飲み水が不足

島内では、ほとんどの地域で電気や水道は止まったまま。AFP通信によるとグヌンシトリでは2万人分の飲み水が不足している。また、沿岸の海上には所々にヤシの木や低木などが浮いており、津波の被害もあったことをうかがわせる。被災地には、インドネシア軍の艦船やヘリが到着したが、本格的な救出作業はまだ始まっていない模様だ。(読売新聞 2005.3.30)

■ シボルガからフェリーで食糧輸送、所要6時間

ニアス島グヌンシトリの空港は地震で滑走路が損壊し、大型機が利用できない。このため、国際移住機構(IOM)は29日、水や牛乳、食料、医薬品をスマトラ島のシボルガに陸送し、そこからニアス島へフェリーで運ぶ計画を明らかにした。だが、フェリーの輸送だけで約6時間かかるという。(毎日新聞 2005.3.30)

■ 空港損壊で救援物資の輸送は難航、オートバイで輸送

グヌンシトリでは、空港の滑走路が地震で損壊したため、小型飛行機などしか離着陸できない状態。道路の破損状態も激しく、救援物資の輸送は難航している。救助に当たっている国際援助団体オックスファムは、ヘリコプターで空輸した支援物資をオートバイで輸送している。同団体のメンバーは「被災が激しく、被害の全容を把握するのが非常に困難」と話した。(読売新聞 2005.3.30)

■ シンガポール空軍が救援物資搬送、住民による奪い合いで大混乱

シンガポール空軍のヘリがグヌンシトリの競技場に着陸し、食料など支援物資を届けたが、集まった住民による奪い合いから大混乱となったため、国連は競技場への輸送を停止することにした。(CNN.co.jp 2005.3.31)

■ ニアス県政府、コメ配給へ

ニアス県政府は3月30日、高台などに避難している住民に対し、ただちにもとの村や町に戻るよう呼びかけた。3月30日夕方に社会省からの支援物資を配ることになったため。所定のポスト(詰め所)に集まり、配給を待つよう指示した。およそ10万人の避難民に対し、二日分のコメ50トンが配られる予定。(Tempo Interaktif 2005.3.31)

■ 住民数十人、コメを求めて政府の備蓄所へ

ニアス島では3月30日、生存者数十人が飢えに耐えきれず、政府のコメ備蓄庫を襲うという事件が起こった。グヌンシトリの住民の1人がロイターに語ったところによれば、武装した警官が備蓄庫にはもうコメがないと叫んでも、コメを目指して備蓄庫に向かう島民が後を立たず、警官はそれを阻止するすべがなかったとのこと。警官はこの間、発砲したりすることはなかった。イスラム教徒のタンジョン(55)は「彼らは豚を追いかけるように私たちを追い払いました。私たちがここに来たのはとても飢えているからです。しかも私たちは災難にあったばかりなのです。私たちを助けてください」と語った。また、他の住民は「長官どの、お願いします。私たちを助けてください。私たちは非常に飢えています」と語った。警官は最終的に、困窮者

のためにコメを備蓄している倉庫の警備を放棄した。(星洲日報 2005.3.30)

■ 被災者300人が食糧を求めて知事公舎へ 飲み物の値段は2倍に

「食糧をよこせ。子供たちが飢えているんだ」。30日午後、水や食糧などの支援物資を積んだトラックが島最大の都市、グヌンシトリの知事公舎に到着すると、被災者約300人が公舎内にワースと押し寄せた。「インド洋大津波のとき、支援物資を軍や政府関係者が横流ししたことを知っているためだ」。地元のジャーナリストはこう解説する。28日の発生から丸2日で飲み物の値段は早くも2倍に高騰するなど、被災者の生活は困難に直面している。「家屋は倒壊し、テントもない。この子のほかに4人の子供が腹をすかせて待っているのよ」と、生後10ヵ月の娘を抱いてデモに加わった主婦、メリアグルさん(30)は訴えた。(産経新聞 2005.3.30)

■ グヌンシトリで群衆が県長官邸に押し寄せる

ニアス島では食糧や水が欠乏しており、各地で倉庫の略奪や混乱が生じている。政府の食糧庫や県長の官邸を襲撃したり、商店から食糧や衣類を略奪したりする人びとも現れている。ニアス島グヌンシトリでは県長の官邸に500人が押し寄せた。人びとの目的は、官邸に停車中の物資を満載したトラック3台だった。人びとが物資を奪い去った後、治安当局は速やかに秩序を回復させた。3月30日の早朝にも、人びとは県長官邸の外に集結していた。この時は1人の村長がやってきて人びとをなだめ、群集は去っていった。(星洲日報 2005.3.31)

■ 飢えに憤るグヌンシトリの住民、社会相に詰め寄る

グヌンシトリは3月31日に至っても電気や水の供給が止まったままである。住民のユスマン・グレは、フリーズドライの食料を持っているが、それを戻す水がないため、その粉末を6歳の娘ユムニに与えて飢えをしのいでいる。ユムニは耳を失い、腕や指をひどく骨折しているが、まだどうにか笑えるのが救いだ。ユスマンは「私たちを置き去りにしたままで死なせないでください。食べ物を手に入れるのはとても大変です。私たちができるのは乞うことだけです」と語った。同日には飢えに憤った群衆がグヌンシトリを訪れていたパフティアル・ハムシャ社会相に詰め寄り、食糧を求める一幕もあった。メトロテレビの映像には「行動が遅すぎる！ 地震以来、何も食べてないのよ！」と叫ぶ女性の姿が映し出されていた。パフティアル社会相は被災者に対し、同日中に食糧が到着するので、いましばらく辛抱してほしいと理解を求めた。「食糧の配給が遅れたことを認める。人々の不満も理解できる。だが、幸いなことに状況は改善しつつある」と社会相は語った。(AP 2005.3.31)

■ 20万人の2か月分の食糧が必要、ただし物資輸送は難航

国連世界食糧計画(WFP)はニアス島だけで20万人の2か月分の食料援助が必要と訴えているが、道路の寸断や電話の途絶などで物資搬送は難航している。(毎日新聞 2005.3.31)

■ 救援隊は少なく、食糧は足りない

国内外からの救援隊はまだ少なく、対策本部近くの空き地には7張りのテントがあるだけ。食料は足りず、子どもたちがわずかなクラッカーを分け合っていた。がれきを掘り返しても見つかるものは少ない。Tシャツを汚しながらレンガを取り除く男性は「自分の力ではどうすることもできない」とうなだれた。(中日新聞 2005.3.31)

■ 地震発生から4日、援助物資は一度も届かない

約200人が避難するカトリック教会には、地震発生から4日たった今も援助物資が一度も届かない。避難している商店主らが、倒壊した店から食料や水を掘り出して運んでいるが、教会の責任者ベルナデス・ラサ

さん(49)は「もうすぐ底をつく。その先のことは、どうすればいいかわからない」。簡易コンロで炊いた2皿の白米を5人家族が分けていた。(東京新聞 2005.4.2)

■ 空腹を感じないように子どもたちを早く寝かしつける

マハティール・モハマドにはもう父も母もいない。彼に愛情を注いでくれるのはワシリヤ孤児院だけだ。グヌンシトリからそう遠くないグヌンシトリ郡ムディック(Mudik)にある孤児院だ。マハティールは9歳。前回彼に会ったとき、彼は人見知りをしていてほとんど何も話さなかったうえ、われわれも時間がなかったため、あまり話ができなかった。マレーシアの前首相マハティール・モハマドに会いたいと切望していた彼ももっとたくさん話をするため、彼のいる孤児院を再び訪れてみた。われわれが孤児院を訪れたのは夜8時半だったが、驚いたことに子どもたちはすでにみな寝ていた。10人をやっと収容できるスペースのキャンプに20人の被災孤児が寝ていた。さらに4人のスタッフが後からそこに加わる。孤児院のコーディネーターを務めるヨハルマンはこう語る。「実は食糧の配給がだんだん少なくなってきているのです。だから子どもたちに早く寝るよう言っているのです。寝てしまえば空腹を感じませんから。今朝、支援事務所に行って食糧の配給を受けようと思ったのですが、断られました。理由は何も説明されませんでした」。台所を訪ねてみると、コメをはじめとした食糧は非常に少なく、1週間もつのがやっとに見えた。(Utusan Malaysia 2005.4.9)

■ 「飢えは発生していない」社会相の発言にグヌンシトリの住民が反発

4月6日、バフティアル・ハムシャ社会相が地震被災者が飢えに苦しむような事態は発生していないと語ったことがテレビを通して伝えられ、グヌンシトリの社会指導者や住民の反感を呼んでいる。メダン市ニアス住民協会のスディルマン・ハラワ会長は、社会相の語った内容は事実とかけ離れており、人びとの誤解を招くと指摘した。スディルマン会長は、ニアス島からシボルガへの多数の避難民は彼らが深刻な食糧不足にあることを示していると語った。「政府があたかも『最善の』働きをしたような発言をして、弱点を隠そうとしてはならない。社会相を現場に、特に内陸部の村落に來させればいい。そこでは支援の影すら見られない」。同会長は、被災者が飢えに苦しんでいることはすでに秘密ではなく、活字媒体やネット上で伝えられているのに、なぜ社会相がそのような声明を出したのか理解できず驚いていると述べた。南ニアス県選出のアリオジソキ・ファウ国會議員も同じ意見だ。アリオジソキ議員は、グヌンシトリ周辺を見る限り飢えは発生していないが、「ニアス島はサッカー・グラウンドよりももっと大きいのだ」と語った。同議員によれば、グヌンシトリでも地震発生から1週間経った時点においてさえ、食糧の配給が1日2回だけだったとのことだ。「現実にも起こってもいいことがらを語れば反感や憎悪を呼ぶだけだ。今回の発言で社会相は間接的に自らの威信を貶めることになるだろう。だが今回のことは驚くようなことではない。政治家はいつもこうだ」。(Utusan Malaysia 2005.4.9)

■ ニアス島の人びとはみな感情的になっている

われわれが訪れたいくつかの避難民キャンプでは、全ての人が困難な状況にあり、苦しみのため息を漏らし、怒っていた。みな非常に感情的になっていた。人びとは支援が届かないと怒り、政府は支援物資の配給が遅いと役人に怒っていた。(Utusan Malaysia 2005.4.10)

■ 略奪・強盗が頻発

■ 略奪事件が頻発

ニアス島では略奪事件が頻発しており、2階建てのある商店では老若男女が押し寄せ、食べ物や衣類、テレビなどを持ち出しているという。タンジョンは「ここには水も電気もコメもないのです。状況は非常に深刻です。私たちには何の助けもあります。どうすればいいのでしょうか?」と嘆く。(星洲日報 2005.3.30)

■ 強盗事件が9件発生

略奪も起きており、警察当局によると、グヌンシトリで家電製品や文具などの強盗事件が9件あり、9人

が逮捕された。(朝日新聞 2005.3.31)

■ 人災追い打ち、略奪横行

スマトラ沖地震で大きな被害を受けたニアス島グヌンシトリで、倒壊した商店からの略奪が横行するなど治安が悪化している。救援活動を続ける国軍は急きょ、市街地の夜間警備を開始。崩れた店舗に妻や娘が埋まったままの商店主は「生き残った人たちにまで苦しめられるのか」とうめいた。グヌンシトリの被害は、建物がひしめき合う海岸沿いの市街地に集中している。通りに並ぶ建物のほぼすべてが倒壊する壊滅的な状況だ。直下型地震だった阪神大震災と同じく、1階部分が跡形もなく押しつぶされている。住民による略奪は、発生2日目の29日から始まった。食料品や衣類のほか、いすやベッドまで大人数で持ち出し、現地対策本部は「グヌンシトリが直面している最大の問題は、食料の不足でも薬でもない。治安維持だ」と頭を抱える。

目抜き通りで衣料品店を営むリムさん(54)は、がれきの片づけ中に店を襲われた。「10人ぐらいの男らが突然押しかけ、ほとんどの品物を持っていった」。被災したショックに、同じ被災者が追い打ちをかける。「やめてくれ」とすがったが、相手は持ち出したシャツやズボンを、路上で奪い合いながら逃げ去った。略奪防止のため、余震におびえながら店に入り、残った品物を運び出す店主が目立つが、雑貨店主のヨハネスさん(55)は、ただぼうぜんと店の前に立っていた。3階建てだった自宅と店舗は2階の高さにまでつぶれ、救助隊が31日、がれきのわずかなすき間から、下敷きになっている長女(26)のほこりだらけの細い腕を見つけた。ヨハネスさんは、今回の地震で妻(55)も亡くしている。真っ赤な目をさらに潤ませて「これ以上、私たちから何を奪うのか」と嘆いた。(中日新聞 2005.4.1)

■ コメの値段が急騰 地震後に窃盗容疑で20人が逮捕される

孤島化した現地では、食料をはじめとする物資が絶対的に不足し、50キロで12万5000ルピア(約1,500円)だった白米が35万ルピア(約4100円)に急騰。地元警察は地震後、窃盗容疑で20人を逮捕している。(中日新聞 2005.4.1)

■ 治安当局は強奪行為を取り締まらない

インドネシア百家姓協会のニアス支部長で華人コミュニティ災害支援委員会会長の林寶天によると、食糧不足が深刻なため、多くの地域で被災者が食糧を強奪する事態が生じているが、特別手当を支払って軍や警察の人員を雇わない限り、治安当局は強奪行為を意に介さず、それを阻止することもないという。家屋の損害が少ない家は、自発的に被災者を支援する「食堂」を開いている。林寶天と彼の妹夫婦の家も、そのような救済センターの1つとなっている。彼らのところには、華人やニアス島の原住民、インドネシア人が昼食と夕食を食べにやって来る。(星洲日報 2005.4.9)

■ 「火事場泥棒」が増加中

ニアス島の被災した地域では、廃墟から金目の物を掘り出す人びとが現れ始めた。彼らは灼熱の太陽の下、自らの危険を顧みず、瓦礫の中から「お宝」を探すのに夢中だ。腕時計や携帯電話、アクセサリ、家電などのほか、テーブルや椅子をリヤカーに乗せて持ってってしまう人もいる。法的に見れば彼らの行動は「火事場泥棒」であるが、人道的観点から見れば、物資や金銭が欠乏する中で正規の経路によらず生計を立てる手段になっているとも言える。ニアス島を襲った地震は、2004年12月の津波の経験を経たインドネシア政府にとって1つの試練でもあった。だが結局、外国の支援団体がいち早く支援を行い、政府は被災者の問題を解決する上であまり誠意を見せていないように思われる。(星洲日報 2005.4.11)

■ 肉類や海産物は物価を維持

グヌンシトリの住民によると、地震のあと物価が値上がりしており、特にコメや卵の値上がりが著しい

とのこと。スナック菓子やジュース、ビールなども多少値上がりしている。一方、肉類や海産物は通常時の値段を維持しているとのこと。(星洲日報 2005.4.9)

(5)外部社会による救援活動

■ 救援体制の混乱

■ 情報や指揮系統が混乱、物資の搬送に支障

現地の対策本部によると、グヌンシトリだけで約5000の家屋が倒壊し、最大500人が死亡した可能性があるという。停電も続いたままだ。対策本部の幹部、イデアリマン氏は「海上輸送は時間がかかるし、空港も地震の被害で閉鎖が続いている。ヘリによる輸送に頼らざるを得ない」という。しかし、対策本部で情報や指揮系統の混乱が続き、物資の搬送に支障をきたしている。もっとも、大津波のときのアチェ州でも、災害2日後の政府の活動はまだ十分機能していなかった。だが、住民には支援物資であふれたアチェのイメージだけが残り、そのギャップに怒りが助長されている側面もある。(産経新聞 2005.3.30)

■ 政府の救難活動は一部混乱

スマトラ沖で起きた地震の最大の被災地、インドネシア・ニアス島に3月30日、入った。中心部は8割以上の家屋が倒壊し、街全体を焦げたにおいが包み込む中、住民の救出作業や遺体の収容作業が続いている。政府の救難活動は一部混乱しており、3ヵ月前の大地震と大津波の影響が指摘されている。(産経新聞 2005.3.30)

■ 政府要人の被災地視察

■ インドネシア大統領が被災地入り・救援本格化へ

インドネシアのユドヨノ大統領は3月31日、スマトラ島西沖の大地震で最大の被災地となったニアス島に入った。インドネシア政府は大規模な救援活動を始める。ブルドーザーなど大型重機を島内に大量に搬入、倒壊した家屋の下敷きとなっている島民の救出を急ぐ。日本の国際緊急援助隊も同日現地入り。遅れている救援活動を支援する。インドネシア政府は31日中に大型トラックやブルドーザーなど大型重機15台を島内に搬入。ニアス島では空港や主要な港湾が壊れているため、建機や物資の搬入に手間取っていた。カラ副大統領は死者は1000~2000人になるとの見通しを発表しているが、現時点で確認された死者は500人台となっている。政府はシムル島やバニャック諸島にも重機を搬入し、遅れている救援活動を急ぐ考えだ。バニャック諸島でも200~300人の死者情報がある。(日経新聞 2005.3.31)

■ 大統領が被災地を視察

地震後初めて被災地を訪れたインドネシアのユドヨノ大統領は3月31日、ニアス島で「全力を挙げて支援する。もう少し我慢してほしい」と、被災者たちをなだめた。大統領は夫人や閣僚とともに、午前11時前、飛行機とヘリコプターを乗り継いで現地に入った。犠牲者が埋葬されているモスク(イスラム礼拝所)や医療施設などを訪れた。(朝日新聞 2005.3.31)

■ インドネシア大統領が被災地を視察

インドネシアのユドヨノ大統領は3月31日、スマトラ沖地震で大きな被害を受けたニアス島を初めて視察し、今後の救援活動について地元幹部と協議した。同島を中心とする被災地では余震が続く中、政府や国際機関、非政府組織(NGO)などが負傷者の救助や食料・医薬品の搬送などを続けているが、道路の寸断や電話の途絶で難航している。(日経新聞 2005.3.31)

■ ユドヨノ大統領がニアス島訪問

インドネシアのユドヨノ大統領は3月31日、スマトラ島西岸沖大地震で最大の被災地となったニアス島

を訪問し、被災者を見舞った。同島では余震が続く中、日本の国際緊急援助隊の医療チームなど各国の救助隊が現地入りした。がれきの下に生き埋めになった住民らの搜索が本格化し、3日ぶりに13歳の少女ら数人が相次いで救出された。ユドヨノ大統領は現地のキリスト教会で追悼の祈りに参加。「私たちはすべてを復旧するので、辛抱してほしい」と忍耐を訴えた。大統領らはこの後、モスク（イスラム礼拝所）や屋外医療施設で被災者らを見舞った。（毎日新聞 2005.3.31）

■ 副大統領、ニアスを視察し「復旧には最低3ヵ月かかる」

インドネシアのユスフ副大統領は4月2日、ニアス島を視察し、「同島で電気や水道の完全復旧には最低で3ヵ月かかる」との見通しを示した。ニアス島では日本政府の緊急援助隊やシンガポール軍の医療部隊に加え、2日には医療部隊を乗せたオーストラリア海軍の艦船が到着。（読売新聞 2005.4.2）

■ 国際支援が本格化

■ 緊急救助隊、現地入り 外国政府の医療チームとして初めて

日本の国際緊急援助隊も3月31日午後、現地入りし、負傷した被災者の治療開始に向けて準備を始めた。町のあちこちでは、時折雨が降る中、生き埋めになっている人たちの救出作業が続いている。病院には負傷者が運ばれてくるが、医師や医薬品が圧倒的に不足している。外国政府の医療チームとして初めて現地入りした日本の国際緊急援助隊に対する期待は高い。（朝日新聞 2005.3.31）

■ 豪雨で救援作業中断

被災地のニアス島には日本など海外の支援チームが相次いで現地入りしたが、午後からの豪雨で救援作業は中断となった。家屋の下敷きとなっている被災者の安否が懸念される。ニアス島には31日、ユドヨノ・インドネシア大統領のほか日本の国際緊急援助隊やオーストラリア、国連などの物資、支援チームが相次いで到着した。大型建機15台も搬入されたが、激しい雨のため救援作業は遅々として進んでいない。（日経新聞 2005.3.31）

■ 国際支援の動きが本格化、豪医療チームがニアス島入り

スマトラ島沖で3月28日起きた地震で、最大の被災地となったニアス島では31日、国際支援の動きが本格化した。オーストラリアは30日、政府の対外援助機関の医療チームをニアス島入りさせた。ダウナー外相は同日、医療チームは1日で80人の患者を診察したと述べた。その上で、「島では建物が倒壊し、病院内での診察は危険な状況にある」と指摘。医療チームを追加派遣する方針を表明した。

また、シンガポール空軍のヘリコプター2機も30日、ニアス島に到着。援助物資を被災者に配布し始めた。続いて3機目が現地入りしたが、被災者が殺到し、着陸できなかったという。一方、米務省は30日、米海軍が病院船マーシーなど2隻をニアス島に派遣したと発表した。現地は滑走路が損壊、大型機の乗り入れは困難な上、道路の破損から輸送も困難な状況にある。（読売新聞 2005.3.31）

■ グヌンシトリの緊急支援はすでに需要を満たした

3月28日の地震で被害を受けた地域の復興・再建が、国際支援機関の主導のもとで展開されている。2004年12月26日の地震の被災地に提供された支援物資が、今回の地震で被災した地域に転送されている。4月1日には、グヌンシトリの港に救援物資や機材を積み下ろすボートが並んだ。国連の支援調整員フランソア・デスルイセオーズによれば、3月31日の夜中に米や水、缶詰など350トンの救援物資を積んだ船がニアス島に到着し、4月1日にそれらの物資が被災者に配給された。米はアチェ州の倉庫から運んできたものとのこと。デスルイセオーズ調整員によれば、グヌンシトリの被災者に対する緊急支援はすでに需要を満たしたとのこと。（AP 2005.4.1）

■ オーストラリア軍の軍艦がニアス島沖に到着

オーストラリア軍によれば、同軍の軍艦カニンブラ号は4月2日早朝にニアス島沖に到着し、被災者の治療を開始する予定とのこと。(AP 2005.4.1)

■ オーストラリア軍ヘリ墜落、9人死亡 スマトラ島支援

インドネシア国営アンタラ通信によると、スマトラ沖地震の緊急支援活動のため、スマトラ島沖のニアス島南部トゥルダラム〔テルックダラム〕に向かっていたオーストラリア軍のヘリコプターが4月2日午後5時半(日本時間午後7時半)ごろ、南部アマンダヤ村で墜落した。ヘリには11人が乗っていたが、豪AAP通信によると、このうち9人が死亡した。AP通信によると、墜落したのは豪海軍の艦船の艦載ヘリ。この輸送艦はインド洋の津波被害の救援活動に3ヵ月間携わった後、シンガポールを経由して現地近くに2日着いたところだったという。(朝日新聞 2005.4.2)

■ 地震救援の豪軍ヘリが墜落、9人死亡・ニアス島

オーストラリア国防省によると、先月末のインドネシア・スマトラ島沖地震で救援活動にあたっていた豪州軍のヘリコプターが4月2日墜落した。豪AAP通信は搭乗していた豪州人11人のうち9人が死亡したと伝えた。ヘリコプターは医療チームを乗せていた。2日午後、被害が最も大きかったニアス島南部に着陸しようとして墜落。死亡したのは海軍5人、空軍3人、陸軍1人で、うち2人が女性。残りの2人は重傷で、豪州軍の揚陸艦カニンブラで治療を受けている。豪州は地震直後から、救援機やカニンブラを現地へ派遣。昨年末の地震・津波被害に関する10億豪ドル(約830億円)とは別に、100万豪ドルの支援を表明している。(日経新聞 2005.4.2)

■ スマトラ沖で支援物資運搬船が遭難か

スマトラ島沖大地震で、大きな被害が出ている同島沖のニアス島に緊急支援物資を運んでいた船が4月2日、スマトラ島シボルガ沖で「故障した」との無線連絡を最後に行方が分からなくなった。海軍は遭難した可能性が高いとして、捜索を開始した。地元メディアが海軍当局者の話として伝えたところによると、行方不明なのは乗組員2人を含む6人が乗った35トンの船。海軍当局者は、船はドイツの非政府組織(NGO)がチャーターしたとしているが、団体名などは明らかにされていない。(朝日新聞 2005.4.3)

■ 地震被災ニアス島で日本の援助隊、診療所を開設

ニアス島の中心部グヌンシトリで4月3日、日本の国際緊急援助隊(青山滋弥隊長)がテント式の診療所を開設し、医療活動を本格的に始めた。この日は、スタッフ19人がけがや精神的ストレスに苦しむ島民約80人を診察した。援助隊は3月31日に島に到着した。まず、被災した地元の病院の復旧を手伝った後、4トンの機材が届くのを待って自前の診療所をグヌンシトリ中心部の広場に設けた。北スマトラ州職員のワヒュ・ウィダヤイさん(45)は「日本の支援はいつも素早く、本当にありがたい」と話していた。(読売新聞 2005.4.4)

■ 緊急支援から復興段階へ

■ ニアス島沖地震の緊急段階は4週間の予定

北スマトラ州知事リザル・ヌルディンは4月10日、ニアス島グヌンシトリでの視察を終え、メダンのポロニア空軍基地に到着した。その際、北スマトラ州災害対策本部ならびにインドネシア国軍・警察、国連、外国NGO、外国軍によるニアス県と南ニアス県での緊急段階の支援活動は、2005年3月29日から数えて4週間で完了することを目標にすると明らかにした。北スマトラ州災害対策本部のナインゴランによれば、最初の2週間で国軍・警察、救出救命班、医療チームと内外のボランティアを中心に人命救助活動が行われた。第2段階では復興活動も開始し、食糧・燃料支援、公共サービス部門、商業部門、学校教育などの再開が試み

られる。これらの目標が達成されれば通常の生活に戻れるよう再建段階に入るが、いつごろまでに再建が終了するかについては定かではないという。(Analisa 2005.4.11)

■ ニアス島沖地震の緊急段階支援活動に北スマトラ州政府は2187人を投入

北スマトラ州災害対策本部のナインゴランは4月10日、同州のニアス島沖地震被災地における緊急段階支援活動に2187人を投入することを明らかにした。内訳は、陸軍1500人、海軍120人、ニアス県警察462人、救命救急105人、国内のボランティアが37団体から386人、国外のボランティアが75団体から237人。(Analisa 2005.4.11)

■ 社会相、ニアス島沖地震被災者に1人あたり3000ルピアを支給

バフティアル社会相は4月10日、ニアス島沖地震の被災者に対し、政府が1日3000ルピアの生活支援金を支給する方針であることを明らかにした。(Analisa 2005.4.11)

■ 政府、地震によりこわれた家屋を補償しない方針

リザル・ヌルディン北スマトラ州知事はニアス島グヌンシトリのアンギン港で4月12日、政府は地震で壊れた家屋の補償を行わない方針であると述べた。インドネシアで生じたほかの自然災害についても同様の態度が望ましいとも述べた。州知事はこの日、グヌンシトリ第一中学校を訪問していた。ただし、政府は被災者の苦しみを軽減すべく、建材や貸付資金の用意などに努めるし、公立学校など政府管轄の公共施設については政府が責任をもって再建を行うとのこと。復興費用はいまにいたるまで予算配分されていないが、緊急段階が終了するころには予算配分も実施されるだろうとの見通しを述べた。物価については、砂糖の価格が1キロあたり5600ルピアとなっているなど、メダンよりも安くなっており、落ち着いてきているとの見通しを示した。(Waspada 2005.4.13)

■ ニアス県で倒壊した学校は448校

ニアス県知事ビハナティは4月11日、北スマトラ州災害対策本部のデータとして、ニアス県では3月28日の地震で建物が倒壊して授業をまったく行えなくなっている学校が448校にのぼることを明らかにした。現在、テント2530張を用意するなどして授業を行っている。(Waspada 2005.4.14)

■ アチェの津波被災地にマングローブを再植林

マラム・サンバット・カバン森林相は4月17日、津波によって破壊されたアチェ州のマングローブ林35万ヘクタールに4年計画でマングローブ再植林プロジェクトを実施したいと述べた。大アチェ県ランガ(Lam Nga)村におけるマングローブ再植林プロジェクト始業式に出席しての発言。(Jakarta Post 2005.4.18)

■ 外国救助隊の撤退

■ シンガポール国軍の医療チーム、4月9日までにニアス島から撤退

シンガポール国防省によれば、同国の医療支援チームは4月9日までにニアス島での任務を終え、帰国する予定だとのこと。「ニアス島では生活の復旧が非常に早い。市場も屋台も営業を再開している。医療状況も安定した。緊急治療はもはや必要とされておらず、必要なのは初期診療や公衆衛生だ。国際機関やNGOも到着しつつある」。シンガポール軍がグヌンシトリに設置した医療施設は、シンガポール赤十字社やマーシー・リリーフ、インドネシアのNGOであるヤックム・エマージェンシー・ユニットなどが引き継ぐ。同軍はインドネシア政府や国際機関、NGOなどと密接に協力しながら、3月31日以降約800人を治療したとのこと。ニアス島の輸送手段は回復しつつあるが、輸送手段に対する需要は依然として高く、また、緊急の事態に備えるため、同軍のチヌーク・ヘリコプター3機は活動を続ける。(Bernama 2005.4.6)

■ マレーシア医療救助協会、4月10日までにニアス島での支援活動を終了する予定

マレーシア医療救助協会の副会長モハメド・イクラムによれば、同協会はグヌンシトリの活動拠点と島内ラヘワ郡ラヘワ、アフル郡のアフル(Afulu)とファイグンナ(Faighunna) *に設置した移動診療所での活動を4月10日までに終了する予定とのこと。ニアスには食糧や医療を支援するNGOが多数いるためだという。ニアスで活動する同協会のメンバーは当初15人だったが今は7人が残るのみで、彼らもすでにアチェおよびマレーシアに戻りつつある。被災直後は1日50人に達した患者数も、現在は1日20人に減少。重傷者も減ってきており、患者の大半は切り傷や擦り傷の治療に訪れている。(New Straits Times 2005.4.8)

■ マレーシア医療救助協会、グヌンシトリ総合病院の修復・復興へ

マレーシア医療救助協会の副会長モハメド・イクラム・モハメド・サレーによれば、同協会ボランティアは4月9日までにニアスから引き揚げるが、グヌンシトリ総合病院の手術室の損壊程度を調べ、修復・復興を行い、M9.7まで耐えうる耐震構造に建て直すため、4月21日にニアス島にまた戻ってくるとのこと。同協会のモハメド・イウラム副会長は、死者の数は600人以上と伝えられているが、1000人以上いるのではないかと語る。同協会はニアス島の支援にすでに7万リンギ(約196万円)を費やしたとのこと。(Bernama 2005.4.8)

(6)その他

■ 地震によって絆を強めるニアス島の人びと

56歳のイスラム教徒ファリド・ムシャフは、危険を冒して隣人のキリスト教徒の遺体を泥から引き上げ、自分のトラックに載せてサンタマリア聖堂まで運んだ。ニアス島の住民の90%はキリスト教徒だが、イスラム教徒などほかの宗教の信者もいる。だがこの島の人々はお互いずっと平和に暮らしてきた。異なる宗教を信仰する人びとが協力し合わずにはいられない状況が地震によって作り出され、その中で人びとの絆は一層強まりつつある。ファリドは「この島では、われわれは第一に人間である。何の違いもない」と語る。サンタマリア聖堂とともに、モスクや仏教寺院が臨時の遺体安置所になっており、犠牲者の遺体はそれぞれの信仰に見合った遺体安置所に運ばれる。かつてニアス島を獲得しようとするオランダの試みに対して島民は南部の集落を中心に激しく抵抗したが、オランダは1909年にニアス島の占領に成功した。それ以降、島民のキリスト教への改宗が徐々に進んだ。ムスリムの多くは島の外から移住してきた人で、商人や飲食店オーナーが多く、グヌンシトリの港湾地区に集住している。仏教寺院で遺体安置所の管理を手伝うタン・スイベンは、「地震が起こる前、われわれはイスラム教系の孤児院に食べ物を運んだものだった。しかし今はムスリムが(仏教徒の)遺体をわれわれの寺院に運んできてくれる」と語った。(AP 2005.3.30)

■ 家財道具を満載した避難民の車で大渋滞

ニアス島に3月30日、入った。対岸のスマトラ島シボルガから1日1便の木造民間フェリーで12時間余り、ニアス島最大の町グヌンシトリの港に到着した。グヌンシトリの中心部では、建物の大半が倒壊。道路は電柱が倒れ、思うように通行できない状態だ。主要な通りは、家財道具を満載した避難民の車で大渋滞。ガソリンスタンドの前には、燃料を補給しようとする数百台のオートバイが行列を作っていた。多くの住民は、避難する場所がなく途方に暮れている。<(読売新聞 2005.3.30)>

■ ニアス島 がれき散乱し今も白煙

たたきつけられたように崩れ落ちた家屋。焼け跡から今も立ち上る白い煙——。スマトラ沖地震の震源に最も近いインドネシア・ニアス島は、地震から4日目の3月31日も壊滅状態のままになっている。人々はがれきが散乱する道をさまよい歩き、街には砂ぼこりと異臭が漂っている。ニアス島最大の港町、同島東岸のグヌンシトリ。街の中心部は、ほぼすべての建物が崩れ、原形をとどめていない家も目立つ。「ここが私の家だったんだ」。立ちつくしていた男性が、叫ぶように指し示した。がれきの中から見つかった遺体が、

ひつぎに納められている。倒れた電柱から黒い電線がへびのように垂れ下がり、地震による火災で燃え尽きた家は今もなおくすぶり続けている。アスファルトの道路は割れ、所どころが陥没している。(中日新聞 2005.3.31)

■ 華人が約200人死亡、多くは倒壊したコンクリート家屋の下敷きに

インドネシア百家姓協会主席の熊徳怡によると、ニアス島で3月28日の地震で犠牲となった華人の多くはコンクリート家屋に住んでいた人たちで、倒壊した家屋の下敷きになり命を落としたとのこと。熊主席は、「正確な数字ははっきりしないが、およそ200人の華人が死亡した。当協会のニアス島支部の副主席も今回の地震の犠牲となった」と語った。木造家屋の倒壊による被害はそれ程大きくなかったが、コンクリート家屋の倒壊は致命的な被害をもたらしたという。熊主席によると、地震後のニアス島では水や電気が不足し、けが人が治療を受けられず、状況は非常に劣悪だとのこと。同協会はすでに医療チームをニアス島に派遣し、救助活動を行っている。ニアス島の人口は約10万人で、華人はそのうち1000人あまり。そのほとんどが自営業者で、食堂や日用品店などを営んでいる。漁業を営んでいる者もいる。ニアス島の華人は3月31日に遺体の埋葬を始めたが、政府の協力が十分得られず、多くの人が自力で墓穴を掘っている。(星洲日報 2005.4.1)

■ 被災地に新たな悲しみ ニアス島民、法王の冥福祈る

「何という悲しい知らせ」——。ローマ法王ヨハネ・パウロ二世の死去の報は、スマトラ沖地震で多数の犠牲者を出したインドネシア・ニアス島に住むカトリック教徒に4月3日、新たな衝撃をもたらした。島内のカトリック教会で開かれたミサには多くの信徒が集い、法王の冥福を祈った。ニアス島は、イスラム教徒が9割前後のインドネシアでは例外的にキリスト教徒が多い。同島の中心都市グヌンシトリにあるサンタマリア教会でのミサには約300人が参加した。「集まったすべての人々がショックを受け、悲しみに暮れていた」と神父(42)。「法王は人道と平和のために戦い続けていた」と話し、信徒に対し、度重なる悲劇の中にあっても「うわさに惑わされ、パニックに陥ることのないよう」呼び掛けた。(産経新聞 2005.4.3)

■ ニアス島民の心の傷深く 被災から1週間

スマトラ島沖で再度、巨大地震が起きてから4月4日で1週間を迎えた。最大の被災地となったニアス島では、昨年末の巨大津波で漁に出ていた漁民に多くの犠牲者が出たが、近くのアチェ州のような壊滅的な被害は受けなかった。しかし当時、連日のように報道されたアチェの惨状は、島民の胸の奥にこびりついたままだ。余震の度に家を飛び出し、海のかなたを見つめ続ける島民の心に残った傷は深い。

島の中心都市グヌンシトリの中心街にモスク(イスラム礼拝所)を利用した「ジャンミ・イリル・モスク」避難キャンプがある。奥行き50メートルほどの敷地に500人以上のイスラム教徒の住民たちが「神の加護」を求めて避難していた。モスクから約1キロの場所に住んでいた食品販売業のアンブリル・アチェさん(36)は28日夜の地震直後、山に向かった。暗闇のあちこちから「『津波が来る』という叫び声が聞こえた」。家から約5キロの山に駆け上がる。大きな余震が何回も起きた。その度にアチェさんは地面に伏せた。ふと気が付くと、妻ニルハンマルさん(27)と3人の子供の姿が見えなくなっていた。「捜しに行きたかったが、津波が起きたらと思うと動けなかった」。アチェさんは地震2日目の29日、避難先の山で家族とやっと再会した。

子供や孫を含め8人の大家族を抱える敬けんなイスラム教徒のルスリさん(63)は地震直後、モスクに駆け込んだ。しかし、モスクの中にも「津波が来るぞ」という声があふれていた。ルスリさんは2階に駆け上がって祈り続けた。やはりモスクに飛び込んだアブドル・ルビスさん(78)は「津波」の声に我を忘れた。家族と一緒に、今度はモスクを飛び出し、3キロ以上走って山に逃げ込んだ。孫の1人、アセウシルさん(19)は「山に入ってしばらくしたら雨が降ってきた。明かりもなく、草の上にただ座っているしかなかった」と振り返る。山に逃げた多くの人は水も食料も持っていなかった。アセウシルさんは「僕たち家族が町に降りたのは地震の2日後だった。でも、町のキャンプにいて、津波が来るかもしれないと思うだけで寝れない」と言っ

た。キャンプには、睡眠不足でやつれた表情の人たちが目立つ。キャンプを運営するスマトラ北部の中心都市メダンのNGO(非政府組織)「子供保護センター」のメンバーは、「ここの狭いキャンプに昼は500人、夜には600人以上が来る」と語る。

家で夜を過ごすアチェを襲った巨大津波の悪夢が頭をよぎる。その恐怖を少しでも和らげようと、住民たちはモスクの小さな避難キャンプに集まっているように思えた。(毎日新聞 2005.4.4)

■ 1週間ぶりに学校再開 地震被害のニアス島

3月末のスマトラ沖地震で大きな被害を受けたインドネシア・ニアス島で4月4日、地震以来休校していた学校が、生徒への被災状況説明などのため一時的に再開。制服姿の生徒が約1週間ぶりに校舎に姿を見せた。主要都市グメンシトリの公立第一中学校には4日朝から、生徒や保護者が地震で半壊した校舎を訪れ、教師から「ラジオによる授業再開の案内があるまで自宅で待機するように」などと説明を受けた。ソキゾヤ・ヒア校長によると、この日学校を訪れたのは全校生徒約950人中わずか150人で、多くの生徒は、地震の再発を恐れ山などに避難したまま。授業再開のめどは立っていないという。登校したメモ・アルタ・ゼフル君(15)は「友達と地震についていろいろ話したかったので、学校に戻れたのはうれしい」と話した。(産経新聞 2005.4.4)

■ 羊1,000匹いけにえにすれば地震回避? インドネシア

インドネシア国営アンタラ通信によると、ユドヨノ大統領は4月12日、昨年末から同国周辺で相次いでいる大地震を回避するため、子羊を1,000匹殺害するよう繰り返し忠告を受けたことを明らかにした。同大統領は「ばかげた迷信だ」と語り、忠告を相手にしない考えを強調した。忠告は電話のメッセージサービスを通じて寄せられた。子羊をいけにえにすれば、地震の力を抑制できると主張し、「大統領閣下。どうか1,000匹を殺害してください」と訴えているという。ユドヨノ大統領は「地震は自然現象であり、科学的に説明できる」と語り、国民に対し、迷信を信じないよう呼び掛けた。インドネシアは国民の大半がイスラム教徒だが、今も多くの人々が古くから伝わる魔術を信じている。(AFP 2005.4.13)

■ 大統領に「1,000頭のヤギを生けにえに」と提案

12月末のスマトラ沖大地震では同島を中心に約13万人が死亡、約4万人が行方不明になった。先月のニアス島沖の地震では600人以上の死者が確認されている。約50万人が避難生活を続けており、住民は疲弊している。大統領の元には、「自然災害の連鎖を断ち切るため、1000頭のヤギを生けにえにすべきだ」という携帯電話の文字メッセージが届いた。地元には伝わる慣習だが、大統領は「地震や津波は科学的な理由で起きる。冷静に対応してほしい」と国民に呼びかけた。(朝日新聞 2005.4.15)

■ ニアス島の小さなマハティール・モハマド君

ムディックのワシリヤ孤児院にいるマハティール・モハマド君(9)に会うため、彼のいる孤児院を再び訪れてみた。われわれは夜8時半に孤児院を訪れたが、子どもたちはすでにみな寝ていた。スタッフが語ったところによると、実はマハティール君には実母と実父がいるとのことだ。だが、彼らが今どこにいるのか誰も知らないという。実父と実母は生活が苦しかったため、マハティール君をある夫婦に売った。その後間もなく養父は他界し、養母は1人で彼を育てるのはたいへんだからと孤児院にマハティール君を預けてきた。養母は病気で倒れ、現在寝たきりであるという。「マハティール君は彼女を慕っていて、学校が休みの時などは彼女に必ず会いに行くのです。石ででこぼこした遠い道のりを、1人で歩いていくのです」。(Utusan Malaysia 2005.4.9)

■ ニアス島の小さなマハティール君、マハティール前首相との面会が実現

ワシリヤ孤児院の小さなマハティール・モハマド君は、ウトゥサン・マレーシア紙の計らいにより、孤児

院のスタッフとともにマレーシアを訪れ、マハティール前首相と面会した。マハティール前首相は、がんばって勉強するようにと小さなマハティール君を励ました。小さなマハティール君は、クアラルンプール市内を観光した後、4月18日にニアス島に戻る予定。(星洲日報 2005.4.16)

■ニアス島脱出

■避難民がスマトラ島に向かうフェリーの空席を探して港に殺到

ジョコ公共事業相は4月1日、グヌンシトリで破壊された建物や住居、公共施設は70%にのぼり、「経済活動が完全に停止し、生活物資の入手が極めて困難となっている」と述べた。ニアス島では避難民らが港に殺到し、対岸のスマトラ島に向かう木造フェリーの空席探しに躍起になっている。(読売新聞 2005.4.1)

■ニアス島 負傷者ら避難希望者、島外へ

ニアス島で4月2日、負傷者や避難希望者の島外への脱出が始まった。ニアス空港には島内各地から重傷者がヘリコプターで運び込まれ、島の中心都市グヌンシトリの港は、対岸のスマトラ島・シボルガへ向かう避難民が集まり大混雑した。空港の待合室は医療援助のNGOの緊急治療室に様変わり。空港から5キロの自宅から自力でたどり着いた主婦ルツニナさん(50)は、地震で倒壊した家の中で顔や背中を強打した。乳児と空港に運ばれてきた主婦ハリバさん(30)は、医療スタッフの問いかけに答える力もなく、胸に抱えた子供の口に、ただ無意識のように水やビスケットを運んでいた。交通が完全に遮断されたニアス島南部からは、ヘリコプターが次々と重傷者を空港に運び込んだ。逃げる途中にころんで背中を強打した島南部トゥルダラム〔テルックダラム〕のバティサ・トンハさん(60)は身動きもできない状態だ。息子テリフさん(39)は「早くメダンの病院に入れたい」と母の手を握り締めた。

港は、シボルガに出発する船を待つ数百人の避難民でごった返した。東ジャワの親類を頼って家族5人で島を出るアブリアノさん(30)は「食べ物や飲み物がない。島を出る決意をしたのは、昨日の夜。本当は出て行きたくない。東ジャワで新しい仕事に就けるかどうかかわからない」と不安を口にした。シボルガへ向かう船は老朽船が多く、約120キロの距離に12時間かかる。家族4人で西スマトラに避難する主婦エルメリさん(43)は「いつ帰って来られるでしょうか。津波は来ないでしょうね」と、記者に真剣な表情で問いかけた。(毎日新聞 2005.4.2)

■ニアス島からの脱出が加速 余震、津波に強い警戒心

3月末に起きたスマトラ沖地震で、最大被災地インドネシア・ニアス島の多数の住民が余震や、余震による津波に強い警戒心を抱き、同島から脱出する動きが加速している。人口約70万人の同島で4月4日現在、「連日、数百人が島を後にしている」(地元港湾関係者)との推計もある。脱出に歯止めがかからなければ、巨石文化をはじめ歴史的遺産に恵まれリゾート地として有望な同島に痛手となりそうだ。島を出るのは「再び強い地震に襲われたら、同島は水没する」との流言が広がっていることも一因。電気や水道の復旧が遅れ、島の経済活動がまひ状態に陥っている中で、収入を断たれた島民が多い上、食料不足への懸念が強いことも脱出に拍車を掛けている。避難先の多くは、肉親や親類が住む対岸のシボルガなどスマトラ島の都市。「いつ戻るかわからない」「島が復興するまでスマトラ島で待つ」といった住民が多く、帰るめどが立たないまま島を離れた人が多いことをうかがわせた。

ニアス島の主要都市グヌンシトリ西方の村でゴム園を営む男性(33)も脱出組の1人だ。妻、3人の子供とスマトラ島西部パダンの兄の所に身を寄せる予定。これまでに村の157世帯のうち半分が島を去ったという。男性は「食料の配給が少なく、島に残ったら飢え死にしてしまう」と話した。(四国新聞社 2005.4.4)

■華人住民の被災とニアス島経済

■インドネシア百家姓協会、206人の華人の遺体を埋葬

4月4日にニアス島を訪れたインドネシア百家姓協会主席の熊徳怡によれば、同協会はインドネシアの救

援部隊の支援を受けられなかった華人犠牲者の遺体掘り起し作業を支援し、206人の葬儀・埋葬費用を負担したとのこと。(星洲日報 2005.4.9)

■ ニアス島から8割の華人が去って行った

ニアス島に住む華人のうち、現在島内に残っているのは20%のみである。生き残った大部分の華人は、メダンの親戚のところに身を寄せた。身を寄せる親戚がいない被災者は、避難所で支援物資を受けながら暮らしている。一部の華人は山の上にあるカトリック修道院に身を寄せたが、修道院は彼らを10日間だけ受け入れるとしているため、身を寄せる場所を新たに探さねばならない。ニアス島に住む華人は3000人で、その多くが商業に従事しており、中下層に属する華人は一部のみ。華人の多くはグヌンシトリに住むが、テルックダラムやプラウテルック、ラヘワに住む華人も多い。ニアス島内の華人の被災者は400人を超え、グヌンシトリだけでも300人に達した。(星洲日報 2005.4.9)

■ 華人運輸・流通業者に犠牲者多数、ニアス島の経済が停滞する恐れ

隠居した67歳の宣教師ペテンセルは、成長を続けてきたニアス島の経済が崩壊してしまうのではないかと心配している。683人の犠牲者および行方不明者の多くは華人で、生き残った華人も島から出て行ってしまったか、出て行こうとしている。ペテンセルは、それはゴムの買い手がいなくなることを意味していると言う。ニアス島の経済はゴムに依存してきた。「今や彼らの多くは死んでしまった。ニアスの人びとはゴムを売ることができない」。ニアス島の主要産品の一つで、香水に使われるパチョリ・オイルを売ることができない。ペテンセルは技師で船乗りだったが宣教師に転身し、1965年からニアス島に派遣され、そこに10年間住んでいた。2004年12月に地震と津波が発生したあと、ペテンセルは1月にニアス島に入り支援活動を行っていた。2月か3月中旬にニアス島を去る予定だったが、3月28日の地震発生時も、彼はまだニアス島にいた。グヌンシトリの住民は、大地震が再び起きて島が沈没すると信じ、島での生活を捨てて別の場所に逃げようとしている。だが全ての住民がそのような選択をしたわけではない。ある男はベテルセンに何を栽培したらいいかアドバイスを求めに来た。「ゴムとニラム(パチョリ・オイル)はもう植えてあります。何か他にも植えたほうがいいですか?」ペテンセルはこれに対し、「ゴムとニラムは売るのが難しい。コメを植えなさい」とアドバイスした。(Star 2005.4.8)

■ 華人運輸・流通業者の被害、ニアス島の住民全体に及ぼす影響大

ニアス島の人口の90%を占める原住民は、カカオやゴムの栽培や、乾燥ココナツの生産で生計を立てている。彼らは輸送手段を有する華人を通じて、これらの農産品を島の外に売り出さねばならない。今回の地震で壊滅的な被害を受けた被災者の多くは華人だったが、それがニアス島全体の人びとの生活に影響する恐れがある。(星洲日報 2005.4.9)

■ 島外への農産物の輸送は停止したまま

ニアスでは部分的に商業活動が回復したが、輸送手段を持つ多くの華人がニアス島から逃げてしまったため、島外との商業活動は停止したままである。グヌンシトリで「海運業のボス」と呼ばれる「強兄貴」も家屋の下敷きになり、地震の犠牲となってしまった。彼の船舶は遺族の許可を得て救援物資の輸送に使われているため、島外への農産物の輸送は全て停止している。(星洲日報 2005.4.11)

■ ニアス県知事や地方官吏に積極的な復興事業を期待

島内外を結ぶ流通・輸送業を営み、ニアス島に6世代に渡って住んでいる林寶天は、ニアス島の華人は島内に留まって商業活動が続けるだろうと語った。彼によれば、ニアス島の華人はどこに行っても災害から逃れられないと考えており、自分の一番よく知っている場所に留まっていた方がゼロからやりなおすにしても簡単だと認識しているとのこと。林寶天は、スマトラ島でまた地震が起こる可能性があると聞いて

いるが、この土地を離れる気はないと断言した。長年にわたって政府官吏と関係を築いてきたため、問題があってもその都度スムーズに解決してきたと語る。「他の場所に行ったら、関係を一から築き直さねばならない。ニ阿斯島に留まるのがやはり一番望ましい」。彼は、しばらくすると避難民が続々と戻ってきて、様々な物品の需要が増えるため、ビジネスチャンスが増大するだろうと信じている。彼は、ニ阿斯県知事が積極的に支援・復興事業を展開すれば、ニ阿斯島はかつての面影を取り戻すだろうと語った。また、多くの華人はニ阿斯島に残るか、じきにニ阿斯島に戻ってきて島の復興に参加するだろうと語った。(星洲日報 2005.4.11)

ニ阿斯島(グヌンシトリ以外)の被害・救援状況

(1)テルックダラム地区(ニ阿斯島南岸、南ニ阿斯県県都)

■ 南ニ阿斯県「テルックダラムは8割が被害を受けた」

南ニ阿斯県開発局局長ヘルマン・ライラは南ニ阿斯県の県庁所在地テルックダラムで街の8割が被害を受けたと思われると述べた。県政府の建物は崩壊しているという。ヘルマン・ライラはビンタン・ラウト教会のある丘の上に避難しており、外部からの支援を必要としているという。また、テルックダラムへの道は途絶えており、ヘリコプターが唯一の交通手段となっている。犠牲者数は不明。数百から数千の可能性がある。犠牲者の救出作業も始められていない。ビンタン・ラウト教会では教会スタッフが避難してきた住民の看護にあたっている。(NiasIsland.com 2005.3.29)

■ テルックダラムにインドネシア政府からの支援物資届かず

4月1日現在、南ニ阿斯県テルックダラムの避難民はハンガリーや米国、フランスといった諸外国からの支援物資を受け取っているが、インドネシア政府からは食糧・医薬品ともに何の援助も届いていない。テルックダラムで活動をしているビンタンラウト教会のセラビウス寮長は4月1日、「われわれは食料品店で残っているコメを集めているところだ」と語った。現在、ビンタンラウト教会には2000人の避難民がいるという。また、ステラマリス病院のゲトルダは医薬品不足のため応急手当しかできていないと嘆く。南ニ阿斯県警察のロビン・シマトパンによると、テルックダラムへの救援活動が遅れているのは、グヌンシトリからテルックダラムへの交通路が寸断されているため。ほとんどすべての橋が落ちているという。(Tempo Interaktif 2005.4.1)

■ テルックダラム、船着場の破損のため重機を陸揚げできず

4月1日になり、コメ20トンと重機をグヌンシトリからテルックダラムまで船で輸送しようとしたが、船着場の破損がひどく、着岸できなかった。コメは小さな船に移して運び込んだが、重機はグヌンシトリまで持ち帰ることになった。(Tempo Interaktif 2005.4.1)

■ 南ニ阿斯県では102遺体を確認

南ニ阿斯県では102体の遺体が収容された。このうちテルックダラムは53体。そのほかの郡の犠牲者は次のとおり。ラフタ(Lahuta)18人、ゴモ(Gomo)20人、ロロワ(Lolowa)7人、ロロマトウア(Lolomatua)4人。アメントラヤ(Amantraya)、キバラ(Kibala)、バトゥ(Batu) 諸島については情報がない。(Tempo Interaktif 2005.4.1)

■ テルックダラムでは2メートルの津波、数百年の歴史をもつ伝統的家屋も被害

テルックダラムの住民によると、3月28日の地震の際に海水が上昇し、その高さは2メートルに達したという。テルックダラムのバウマタルオ(Baumataluo)にあった数百年の歴史をもつ伝統的な家屋も崩壊した。この家は初代王ラオウォサオの家で、現在は第5世代が住んでいたが、3月28日の地震により、もとあつ

た場所から20センチ移動した。(Tempo Interaktif 2005.4.1)

(2)その他の地区

■ 西海岸ラヘワでレンガ造りの家が倒壊

ジャカルタからニアス島に住む両親の消息を尋ねにきた会社員のフランシスカスさん(36)は、「両親は西海岸のラヘワに住んでいるが、レンガ造りの家が倒壊したと聞いた。両親をスマトラ島に連れて行こうと思っている」と話していた。(読売新聞 2005.3.30)

■ ニアス島内遠隔地に対する緊急支援はまだ不十分

国連の支援調整員フランソア・デスレイセオーズによれば、グヌンシトリの被災者に対する緊急支援はすでに需要を満たしつつあるが、島内の遠隔地の被災者の多くはまだ飢えているとのこと。グヌンシトリから約19km離れたトゥモレイ村に住むマハヤティ・イナディマンは、「村人は飢えている。ジャングルからバナナを取ってきて空腹をしのいでいる。政府から米の配給があったが、まだ足りない」と語った。マハヤティによれば、トゥモレイ村では多くの家屋が損壊したものの、死者は出ていないとのこと。(AP 2005.4.1)

■ マレーシア政府の支援チーム、アワアイ村に到着

ニアス島の被災者を支援するマレーシア政府の人道支援チームは4月2日、グヌンシトリから北に25km離れたトゥヘムブルア郡(Tuhemberua)アワアイ村(Awa'ai)に到着した。一行は、壊れた橋3ヵ所など地震によって破壊された道のりをたどって目的地に到着した。チームを率いるアスワール・ラーマドによれば、今回のチームはマレーシア特別救助隊(Smart)、クアラルンプール病院、マレーシア赤新月社などから編成されており、4月3日から支援活動を開始する。アスワールによれば、「われわれはインドネシア政府から、アワアイ村にはまだどの国の救援部隊も入っていないのでそこで活動してはとの提案を受けた」とのこと。ニアス島の県知事公邸で行われる日々のブリーフィングでは、マレーシアの支援チームは当初テルックダラムに派遣されることになっていた。だが、テルックダラムまでの距離と10時間の移動時間を考慮した上で、その計画は断念された。アワアイ村での支援チームの活動は医療活動が中心となる。アスワールによれば、支援チームはけが人を治療する基本的な医療器具、簡単な手術用具、抗生物質など700kgの医療物資を持ち込む。Smartは捜索・救助活動に従事する予定だったが、「アワアイ村では瓦礫の下に生き埋めになったり挟まれたりしている人はいないため、マレーシア救助隊の活動内容を変更した」とのこと。(Bernama 2005.4.2)

■ マレーシア政府の支援チーム、アワアイ村に仮設診療所を開設

マレーシア政府が派遣した人道支援チームは、4月3日にアワアイ村のヒリムボシ地区(Hilimbosi)で仮設診療所を開設した。最初の患者は、近所の人に連れられてやってきた女性2人で、地震の恐怖から精神的外傷を患っていた。そのほかに、落ちてきた岩にあたって足を骨折した少女や、高血圧の女性、重度のだるさを訴える人びとなどが診療所を訪れた。医療班を率いるクアラルンプール病院のモハメド・ファドリ・ヤハヤ医師は、医療班は患者に対して応急処置を施しており、患者の状態は安定していると語った。(Bernama 2005.4.3)

■ マレーシア政府の支援チーム、派遣の遅れはインドネシア側の行政上の手続きが原因

マレーシア政府によるニアス島への支援チームの派遣が遅れたことについて、ナジブ副首相は「何も勧める必要はない。インドネシア政府は、派遣が遅れたのは必要不可欠な行政上の手続きを行うためだったと語っている」と述べた。ナジブ副首相は、インドネシア政府に求められれば、マレーシアはさらに多くの人員を派遣する用意があると語った。(Bernama 2005.4.3)

■ アチェからニアス島へのアクセスは困難

アチェに駐在しているマレーシア救助協会のスタッフは、200個のシェルター・ボックスを持参して、ニアス島に向かう準備をしている。シェルター・ボックスの中にはテント、寝袋、水、調理器具、火や熱を起こすための道具などが備わっている。シェルター・ボックスはニアス島の2000人の被災者に配布される予定。だがニアス島へのアクセスが確保できず、スタッフたちはアチェに足止めされている。(Star 2005.4.3)

■ 僻地の被災者は口伝で情報を伝達、情報の浸透は遅い

「まだ行かないでください。さらに多くの方が治療を必要としています」——マレーシアの支援チームがアワアイ村ヒリムボシ地区に開設した診療所で、看護婦として支援チームを手伝っていたカーリー・ゼブア(28)は、マレーシアの支援チームが4月5日に荷物をまとめ始めたのを見て、ほとんど涙を流さんばかりにこう訴えた。カーリーは本紙記者に対して、「マレーシアの支援チームがヒリムボシ地区で医療活動をしていることは、村人の間に口伝で広まっています。その知らせはようやく村人に知れ渡り、みなこれから村に下りようとしているのです」と語った。カーリーによれば、3月29日の地震の後、津波を恐れて多くの人びとが山の上に避難し、バシング(Basinge)、ウカリ(Ukali)、ナモハル(Namohalu)などの地域に留まっているとのこと。カーリー自身も10kmの道のりを歩いて、診療所に来ている。ヒリムボシ地区で医療支援を行っていたのは、クアラルンプール病院の医師2人と医療スタッフ2人、およびマレーシア赤新月社のメンバー4人で、ヒリムボシ地区から南北20kmの範囲に住む350人が彼らの治療を受けた。付近一帯で救急手当てを受けられるのは、この診療所だけであった。マレーシアの支援チームは4月4日にヒリムボシ地区での活動を終了し、インドネシア政府が同地区の診療所の運営を引き継いだ。(Bernama 2005.4.4)

■ マレーシア救助協会、不十分な医療環境の中で外科治療を展開中

マレーシア医療救助協会の会長ジェミラー・マフムド医師によれば、同協会は外科医や外傷治療の専門医など10人のボランティアをニアス島に派遣し、毎日約100人を治療しているとのこと。ジェミラー医師は4月5日、マレーシア女性を保護する協会から5万リンギ(約140万円)の寄付金を授与された際に、ニアス島での同協会での活動を語った。ジェミラー医師によれば、同協会のボランティアは、ラヘワ(Lahewa)郡のように医師がいない地域では地震の被害を免れた協会や学校、木陰などで外科手術を行っているとのこと。また、同協会はヘリコプターを1機借りて交通網が遮断された地域に支援物資を輸送し、重傷者をグヌンシトリやメダンの病院に搬送しているとのこと。(Bernama 2005.4.5)

■ ラヘワでは海面の水位が下がり、船による輸送が困難に

マレーシア医療救助協会が活動しているラヘワでは海面の水位が2メートル下がり、住民は津波が再び起こるのではないかと恐怖におののいていた。「津波を恐れてみな山の中に避難していた。当協会が来るまで人びとは恐怖におびえていた。われわれは、津波が起こるとは考えにくいと伝えた」。ただ、水位の低下により、船による支援物資の輸送や物資の引き上げが困難となり、支援を遅らせている原因になっている。(Bernama 2005.4.8)

■ マレーシア医療救助協会、4月10日までにニアス島での支援活動を終了する予定

マレーシア医療救助協会の副会長モハマド・イクラムによれば、同協会はグヌンシトリの活動拠点と島内ラヘワ郡ラヘワ、アフル郡のアフル(Afulu)とファイグンナ(Faighunna)*に設置した移動診療所での活動を4月10日までに終了する予定とのこと。ニアスには食糧や医療を支援するNGOが多数いるためだという。ニアスで活動する同協会のメンバーは当初15人だったが今は7人が残るのみで、彼らもすでにアチェおよびマレーシアに戻りつつある。被災直後は1日50人に達した患者数も、現在は1日20人に減少。重傷者も減ってきており、患者の大半は切り傷や擦り傷の治療に訪れている。(New Straits Times 2005.4.8)

【* FaekhunaaあるいはFaekhu Na'aと表記されることもある。】

シムル島とバニャック諸島の被害・救援状況

■ 津波を恐れて3万6,000人が避難生活

ニアス島以外のシムル島、バニャック諸島などの被災地は、ニアス島以上に救助活動が遅れている。余震に伴う津波を恐れて高台などで約3万6,000人が避難生活を続けており、自宅に戻れない状況だ。(日経新聞 2005.4.2)

■ シムル島付近でM6.1の地震

米地質調査所によると、インドネシア・スマトラ島北部の西方沖インド洋で11日午後1時(日本時間同3時)ごろ、マグニチュード(M)6.1の地震があった。震源はアチェ州のシムル島付近。死傷者や建物の被害の情報はないが、シムル島は3月28日にM8.7の大地震で被害を受け、インドネシア政府の災害対策本部は22人の死者を確認していた。スマトラ島中部の沖合のムンタワイ諸島付近でも10日にM6.8の地震があり、余震が続いている。(日経新聞 2005.4.11)

(1)シムル島の被害・救援状況

■ シムル島、連絡がとれず

シムル島では、通信手段が寸断されているために犠牲者数や被害の状況は不明。『アチェキタ』では現地通信員と連絡を試みているが、携帯電話も固定電話もつながらない状態。(Acehkita.com 2005.3.29)

■ シムル島で2～3メートルの津波

震源に近いシムル島では「2～3メートルの津波が押し寄せ、波止場が被害を受けた」(国軍幹部)という。(朝日新聞 2005.3.29)

■ シムル島の日本赤十字社職員「ホテルが倒壊したが、けがはない」

日本赤十字社によると、29日未明、シムル島で復興活動をしていた職員から「泊まっていたホテルが倒壊した」と連絡があった。けがはなかったという。(朝日新聞 2005.3.29)

■ アチェ州知事代行「シムル県とアチェシンキル県で住民数百人が犠牲に」

アチェ州知事代行のアズワル・アブバカルは3月29日、3月28日夜の地震により、同州のシムル県とアチェシンキル県で住民数百人が犠牲になったと述べた。両県では海水面の上昇も見られた。バンダアチエで開かれていた会議に参加していたアチェシンキル県知事マクムル・シャブトラは状況を見るため直ちにアチェシンキル県に戻った。(Acehkita.com 2005.3.29)

■ シムル島 「津波が来る」とのデマで騒然

兵庫県の姫路赤十字病院からシムル島に派遣されている看護師高原美貴さん(39)の宿舎は大きな被害を受け、3月29日正午ごろ、電話でムラボの日赤職員粉川直樹さんに連絡してきた。高原さんは部屋にいて、けがはなかったが、自室以外は多くの部屋や施設が崩落。「向かいの部屋の通訳は、命からがら廊下に飛び出して助かった」という。昨年末の地震で傾いていたシムル島の建物などは、ほとんどが完全に倒壊。余震が続く、高原さんらは一睡もできなかった。住民ははだして家から飛び出し、軒下で雨にぬれ、震えていた。橋は落ち、道路も陥没した。「津波がくる」とデマが被災民の間で伝わり、その度に騒然となり、高原さんらも周囲にせき立てられるように丘の上に避難した。「前回の地震が人々に大きなトラウマとなっている」という。(産経新聞 2005.3.29)

■ シムル島は28日から雨

姫路赤十字病院の看護師、高原美貴さんによれば、シムル島では3月28日夜から雨が降り続き、被災者は裸足のまま、倒壊を免れた建物の軒先で雨をしのいでいるという。また、インドネシア赤十字のスタッフが、ジャカルタの本部と連絡を取る手段がないため、高原さんに本部への連絡を依頼してきたといい、救助作業にあたるボランティア15人と救急車の派遣を求めているという。(毎日新聞 2005.3.30)

■ シムル島で建物や道路に被害、救急車の通行が困難に

震源に近いシムル島には、昨年12月の地震を受けた復興支援の調査のため、日本赤十字社(東京)から派遣された姫路赤十字病院の看護師、高原美貴さん(39)が滞在中だった。高原さんから3月29日、日赤本社に入った連絡によると、島内のシナバン地区では家屋が軒並み倒壊し、道路や橋も大きな被害を受けており、1台しかない救急車など車の通行が困難になっている。インドネシア赤十字のスタッフが、がれきの下から2人の遺体を収容し、軽傷の6人を病院へ搬送。NGO(非政府組織)なども加わり、救助作業が続いている。(毎日新聞 2005.3.30)

■ シムル島の市街地で火災発生との情報

シムル島では市街地で火災が発生した、との情報もある。これまでニアス、シムル両島で確認された遺体は421体となった。(朝日新聞 2005.3.30)

■ シムル島、家屋の建材が軽いために犠牲者数は少ない

シムル島では全ての村が押しつぶされているが、イモジェン・ウォール国連スポークスマンによれば、シムル島の家屋は軽い建材を使っていたために犠牲者数は少なかったとのこと。(AP 2005.4.1)

■ シムル島で8000人が家を失う

サーフエイド・インターナショナルによると、シムル島では8000人が住む家を失った。シムル島では、2004年12月26日の地震により、すでに2万3000人が家を失って避難民となっている。(AP 2005.4.1)

■ シムル島の避難民1万2000人

国連の被災者救援調整員が4月1日に語ったところによると、シムル島では全ての村落が被害に遭い、40%の島民が慌てて家を離れて避難したとのこと。損壊の程度が70~80%の地域もあれば、100%に至る地域もある。国連はシムル島の犠牲者数を17人と予測しており、おそらくこれ以上は増えないだろうとしている。シムル島では2004年12月26日の地震以降現在に至るまで、1万6000人がなお家を離れたままである。2005年3月29日の地震では、さらに1万2000人の島民が家を離れて避難した。(星洲日報 2005.4.1)

■ 新たな地震と津波の発生の噂に住民、一時避難

シムル島では4月1日、さらに大きな地震と津波が発生するという噂に住民の多くが高台へ避難する騒ぎがあった。シムル島では3月28日の地震による犠牲者は17人ととどまっているが、7万8000人の住民の多くが飢えと恐怖におびえている。(Jakarta Post 2005.4.2)

■ シムル島で津波のうわさ、住民が一斉に避難

地元メディアによると、被災地のシムル島では4月1日、新たな地震で津波が来るとのうわさが広がり、住民が丘陵地に一斉に逃げる騒ぎがあった。(産経新聞 2005.4.2)

■ 島民の90%が依然として避難中

シムル島の地方官ダルミリによれば、シムル島の住民の間では3月28日の地震よりさらに大きな地震が発

生するという噂がなおも絶えず、津波が再度発生することを恐れ、島民7万8000人の90%が家を離れて避難しているとのこと。同地方官は、シムル島で最も大きな町であるシナバンは「住人がいなくなってしまったため、ゴースト・タウンと化して」おり、「人びとが家に戻ろうとしないのは、津波に対する恐怖心に加え、帰れる家が実際にないからでもある」と語った。3月28日の地震によるシムル島の犠牲者数は20人だったが、人びとの精神面に及ぼした影響は非常に大きい。3月28日以降、シムル島では大きな地震は起こっていないが、小さな余震は依然としてほぼ毎日発生している。国連食糧計画や国連の支援により、シムル島における食糧や医療品の蓄えは十分であるとのこと。(Star 2005.4.5)

(2) バニャック諸島の被害・救援状況

■ 国連、バニャック諸島を上空から調査

国連は3月29日、震源地に最も近いバニャック島とバンカル島の被災状況を上空から調べた。数千人が住んでいる両島も被害が「甚大」と見られるという。(朝日新聞 2005.3.30)

■ バニャック諸島では津波でコメが塩水に浸かり食糧不足に

被災地を視察中のアチェ州知事代行アズワル・アブバカルとイスカンダル・ムダ軍管区司令官エンダン・スワルヤに同行している『スランビ・インドネシア』記者ヤルメン・ディナミカの3月30日の報告によると、アチェシンキル県バニャック諸島でもっとも大きい島ハロバン島では、1,500人の住民が地震の発生でいっせいにパニックとなり、高台へと避難した。3月28日の地震の震源地から数マイルの距離にあるハロバン島では、地震によって海水面が3メートル上昇し、陸地へとあがってきた。このため、コメが塩水に浸かってしまい、現在、住民は蒸しバナナなどで飢えをしのいでいるという。砂糖や食用油の備蓄もつきている。住民は、続く余震に、このまま島が沈むのではないかという恐怖を感じたという。住民は地震と津波が再び起るのではないかと不安におびえている。津波は3メートルの高さに達した。ただし、12月にバンダアチェを襲った津波ほど押し寄せ方が急激でなかったために助かった、とハロバンの住民ムダシル(45)は語っている。(Serambi Indonesia 2005.3.31)

■ バニャック諸島を州知事代行らが視察、住民は「金をもらっても買うものがない」と不満

州知事代行と軍管区司令官が3月30日午前10時にバニャック諸島ハロバン島のサッカー場にヘリコプターで到着すると、2人の高官と言葉を交わそうと数百人の住民が一行に向かって押し寄せた。感きわまって泣き出す住民もいた。県長はもちろん郡長でさえ同島を訪れることはまれで、州知事代行と司令官の訪問にはとても感激した、とスニー(47)は語った。州知事代行はハロバン島のハロバン村とアントリア村にそれぞれ2500万ルピアの義捐金を渡したが、お金があっても買うものがないと不満を述べる住民もいた。州知事代行は視察を終えた後、アチェ・シンキル県知事マクムル・シャフブトラに対し、ハロバン島とバライ島にコメ60トンを投下するよう指示した。両島は地震で家屋150棟が倒壊した。バライ島では5500人がモスクや高台に避難している。州知事代行によれば、島民の全島避難はまだ検討していないとのこと。ハロバン島は丁子、ココナツ、魚が主な産品。(Serambi Indonesia 2005.3.31)

■ バニャック諸島では犠牲者はないが食糧と水が足りない

バニャック諸島のある村の村長ルクマン氏は、バニャック諸島に犠牲者はいないが食糧と水の欠乏が深刻で、4月1日に到着した10トンの米も不十分だと訴えた。ルクマン村長は「水や米を置いている商店は全て塩水に漬かってしまったため、たくわえがない」と語った。バニャック諸島は99の小島からなり、そのうち30の島に6000人が住んでいる。(AP 2005.4.1)

その他の地区の被害・救援状況

(1)アチェ州の被害状況（シムル島とバニャック諸島を除く）

■ アチェ州では西南海岸4県で死者31人、負傷者97人

アチェ州知事代行アズワル・アブバカルによると、3月31日現在、確認されているアチェ州全体の被害は、死者31人、負傷者97人、避難民4万162人、倒壊した家屋806棟。南アチェ県、シムル県、アチェシンキル県、西アチェ県で被害が出ている。アズワル・アブバカルはイスカンダルムダ軍管区司令官エンダン・スワルヤとともに2台のヘリコプターで上記4県を視察した。もっとも犠牲者が多いのはシムル県で、死者17人、負傷者62人、避難民1万8000人、倒壊家屋320棟。アチェシンキル県では死者11人、避難民1万8386人、負傷者27人、倒壊家屋226棟。西アチェ県では死者1人、負傷者8人、倒壊家屋7棟、南アチェ県では死者2人、避難民3776人、倒壊家屋222棟。(Serambi Indonesia 2005.3.31)

■ バンダアチェ

■ アチェ州で大きな揺れ、バンダアチェ市内で停電

スマトラ島北部のアチェ州などで大きな揺れを感じた。バンダアチェ市内は停電している。シンガポールやマレーシアなどでも強い揺れを感じたとの情報がある。インド洋周辺諸国で津波が発生する可能性もあるとみられるが、29日未明現在、被害の状況は不明。太平洋津波警報センターによると、震源は北緯2.3度、東経97.1度で、スマトラ島の北西部沖合。(毎日新聞 2005.3.29)

■ バンダアチェで津波を恐れた住民がパニックに

スマトラ島最北端のバンダアチェなどでは、津波を恐れた住民らが一斉に戸外に飛び出し、パニックとなった。(読売新聞 2005.3.29)

■ バイクで山の中のモスクに避難

毎日新聞助手のエディさん(27)は、バンダアチェ市内の自宅で寝ていたところを地震でたたき起こされた。自宅は海岸から4キロほど内陸に入った場所。昨年12月のスマトラ沖大地震では津波被害を受けなかったが、毎日新聞の電話に「それでも怖かった。妻と一緒に、バイクで30分ほど行った山の中にあるモスクに逃げた」と話した。エディさんによると、市内の道路は避難する人たちでごった返していたという。バンダアチェでは29日未明までに津波がこなかったため、自宅に戻った人もいるが、エディさんのいるモスクでは、29日朝現在も約40人の住民が避難を続けているという。(毎日新聞 2005.3.29)

■ 地震から3時間後、津波の恐れがないとラジオ放送

「あの波が再び来るかと想像するだけでぞっとする」。インドネシア、スマトラ島北端のバンダアチェに住む元英語教師、イスマイル・ザイヌンさん(27)は28日深夜、激しい揺れを感じて、家の外に飛び出した。ザイヌンさんによると、市内では「津波がやってくる」とのうわさが飛び交い、市民は一時、パニック状態に。多くの市民は屋外で待機し、津波の危険があれば、すぐに逃げ出せるように備えたという。3時間後によりやく、ラジオ放送が津波の心配はないとの情報を流し、パニックは収まった。「怖くて、少なくとも2時間は家に入る気がしなかった」。ザイヌンさんは恐怖の数時間を振り返った。自宅は昨年12月の津波で跡形もなく流され、今も親類宅に避難し続けている。(毎日新聞 2005.3.29)

■ バンダアチェに日本人68人

町村信孝外相は3月29日午前の記者会見で、インドネシア・スマトラ島西方沖で発生した巨大地震に関連し「(今のところ)日本人の被害があったという情報には接していない」と述べるとともに、情報収集を急ぐ考えを示した。町村外相によると、震源地に近いインドネシア・アチェ州の州都バンダアチェには68人の日

本人が滞在しているが、同日朝までに50人と連絡を取り、無事を確認した。被害が大きいとされるスマトラ島北部西方のニアス島に日本人が滞在していたとの情報はないという。町村外相はその後の参院外交防衛委員会で、被災地での医療・救援活動や物資輸送などの要請に備え、国際緊急援助隊の派遣準備に入ったことを明らかにした。(東京新聞 2005.3.29)

■ バンダアチェの華人、「被害がないため今回は避難しない」

2004年12月の地震で大きな被害を受けたバンダアチェは、2005年3月28日夜に発生した地震ではほとんど被害を受けなかった。そのため今回の地震の後、アチェで生計を立てている華人でメダンに避難した人は見られなかった。バンダアチェでオートバイの部品を扱っている卓岳平氏は香港の新聞『明報』に対して、前回の地震ではメダンに避難したが、今回は震源地も遠く津波も発生しておらず、店の商品が盗まれるのも心配なので避難する気はないと語った。卓氏は、床に付こうとしていた時に突然地面が激しく揺れたため、急いで外に飛び出したという。多くの人が子どもを背負い、車やバイクで内陸の高台に逃げようとしているのを見たが、今回の地震は前回ほど大きくなくあまり心配しなかったため、卓氏は避難しなかったとのこと。卓氏は、今回の地震の震源はバンダアチェから遠く、メダンに近いので、メダンでも相当大きな揺れを感じただろうと語る。卓氏によれば、バンダアチェでは地震の後しばらく停電があったがすぐに復旧し、地震の発生から数時間経っても津波が起これなかったため、人びとは家に帰り、大きなパニックは起これなかったとのこと。翌日29日に卓氏は平常どおり店を営業し、売上額が目立って減少したりすることもなかったとのこと。(南洋商報 2005.3.30)

■ 西南海岸

■ 西アチェ県、ショック死1名との情報

西アチェ県では地震により住民がパニック状態に陥った。ムラボにある「ルモキタ」ボスコ(詰め所)の支援スタッフであるイルワンは3月29日昼に『アチェキタ』の取材に答えて、高台に避難していた住民はそれぞれの村に戻り始めているが、ムラボの街の活動はまだ再開していないと語った。ムラボの建物にも被害を受けたものがある。また、場所により停電状態が続いている。西アチェ県サマティガ郡では1名が精神的ショックにより死亡したとの情報もある。(Acehkita.com 2005.3.29)

■ ムラボでは車で避難

ムラボでは、多くの住民たちが地震直後、車で山に避難していたという。(朝日新聞 2005.3.29)

■ ムラボでは車やバイクで避難、市内は一時騒然

「何かにつかまらないうと立っていられなかった」「津波が来るといううわさで、何度も避難騒ぎが起きている」。インドネシア・スマトラ島沖で再び起きた大地震について、復興支援のため同島アチェ州や震源地に近いシムル島に滞在していた日本赤十字社の医療スタッフは、現地の生々しい被災状況を電話で語った。アチェ州の都市ムラボに26日から入っている日赤職員の粉川直樹さん(52)によると、大きな横揺れが3、4分続いた。宿舎には粉川さんら日本人スタッフが2人いたが、建物に被害はなかった。住民は津波を恐れ、海岸から一刻も早く離れようとして車やバイクで避難し、市内は一時騒然となった。その後はスコールが降ったため、住民らも家の中に入り、様子を見守ったという。余震もあり、停電が続いた。(産経新聞 2005.3.29)

■ アチェシンキル県も被害、揺れは1時間近く

アチェ州西南部のアチェシンキル県では、3月28日夜の地震で市街地に大きな被害が出た模様。犠牲者数は不明。シンキル市の住民マスタヌディン(56)は、バンダアチェ市からの連絡に対して3月29日、住民1万人が津波の発生を恐れてモスクなどに避難していると答えた。住民のなかにはアチェ州の海岸部を襲った

災害が再び起こったのではとの懸念から、子どもを抱きかかえて裸足で家から飛び出した者もいた。シンキル市では、数十から数百の家屋や政府事務所、商店などが倒壊した。電柱が倒れ、街全体が暗くなっている。アチェ・シンキルの住民でバンダアチェにいたジュリアルディン(38)は、現地の家族と昨夜電話で連絡を取り、家族の安否を確認した。シンキルの街の住民はパニック状態になっており、シンキルの大モスクなど安全と思われる場所に避難している。揺れは断続的に一時間近く続いたという。(Kompas 2005.3.29)

■ アチェ州知事代行「シムル県とアチェシンキル県で住民数百人が犠牲に」

アチェ州知事代行のアズワル・アブバカルは3月29日、3月28日夜の地震により、同州のシムル県とアチェシンキル県で住民数百人が犠牲になったと述べた。両県では海水面の上昇も見られた。バンダアチェで開かれていた会議に参加していたアチェシンキル県知事マクムル・シャプトラは状況を見るため直ちにアチェシンキル県に戻った。(Acehkita.com 2005.3.29)

■ アチェシンキル県、海水面の上昇により家屋倒壊、死者も

アチェシンキル県開発局長ラザリは『アチェキタ』の取材に対し、同県プロスロック村では1.5メートルほどの海水面の上昇が見られ、上昇した水に運ばれて数軒の家屋が道路に押し流されたと語った。家の中にいた住民4名は倒れた家屋に押しつぶされて死亡した。また、3階建ての商店兼住居にいた3名の住民が倒壊した家屋の下敷きとなり死亡したと見られると述べた。遺体はまだ収容されていないという。また、同県では海水面の上昇を受けていくつかの橋も被害を受けた。地震による道路のひび割れや崩壊も起こっている。モスクの一部にも使用不可能になるほどの被害を受けているものがあるという。シンキル市の住民は街の中心から40キロ離れたところにあるリモ村に避難している。バイクに乗って避難する途中で電柱に衝突し、死亡した者が1名いるという。(Acehkita.com 2005.3.29)

■ アチェ西南海岸部、メダンとのアクセスが断たれて孤立

アチェ西南海岸部から北スマトラ州メダンへ向かう陸路は南アチェ県南クルト(Kluet Selatan)郡レンバン(Lembang)村のグンティンブヤ(Genting Buya)橋の状態が悪く、寸断されている。この橋は2004年12月のスマトラ島沖地震津波で壊れていたが、インドネシア国軍が応急修理していた。また、道路も1キロにわたってひび割れており、四輪車両は通行ができない状態。このため、アチェ西南海岸部の4県は北スマトラ州メダンへのアクセスを断たれ孤立している。現場近くの北クルト郡コタファジャル(Kota Fajar)では、重機を運ぶ車両を含め、トラックや車両数十台が立ち往生している。四輪車が通れなくなった区間を数百人の乗客がバイクタクシーを使って通行している。橋まで一人当たり5,000ルピア、橋から15キロ離れたクデバコンガン(Kuede Bakongan)までさらに5000ルピア。(Acehkita.com 2005.3.30)

■ 北海岸

■ 地震のためアチェ州の北海岸5県1市で電力供給に障害

ロスマウエの電力公社のスライマン・ダウドが3月30日昼に明らかにしたところによると、3月28日の地震でメダンの発電所の発電量に影響が出ている。通常だと1000メガワットの発電量が500メガワットに落ち、北スマトラ州の一部とアチェ州の東アチェ県、ランサ市、北アチェ県、ビルン県、中アチェ県、ピディ県の計6県市では、2時間ごとに順番に電力供給するという体制を強いられている。(Tempo Interaktif 2005.3.30)

(2)北スマトラ州の被害状況（ニアス島を除く）

■ 西海岸

■ 北スマトラ州シボルガの住民数万人が丘陵地へ避難

シボルガ市災害対策本部から北スマトラ州知事になされた報告によると、北スマトラ州西岸のシボルガ市

では、3月28日の地震を受けて海岸部に住む住民数万人が丘陵部へ避難した。3月29日昼現在、まだその多くが安全な場所を求めて丘陵地に留まっている。現地では28日夜から29日昼まで強い雨が降った。余震と津波を恐れる住民は丘陵地や宗教施設、学校などに避難を続けている。シボルガ市は地震があったインド洋側に面した町の1つ。シボルガ市官房局局长ダウィル・ナシティオン博士が署名した報告によると、シボルガ市の住民の95%が、パロンブナン山、シボルガ＝タルトン間の幹線道路沿いの丘陵地、インドネシア国营放送アンテナ基地などに避難した。(Kompas 2005.3.29)

■ シボルガの市街で建物が倒壊

シボルガでは地震により住民がパニック状態となった。アフマド・ヤニ通り、パンゲラン・ディポネゴロ通り、Sパルマン通り、ストモ通り、独立プリンティス通りなどの建物が倒壊している。また、ブラカン市場の住民2名が倒壊した建物の下敷きになって重傷のほか、1名がメダンにある北スマトラ病院へ搬送された。トゥンギリ・シボルガ通りにあるアイシャ幼稚園が倒壊しているほか、市内の学校は休校を余儀なくされている。生活基本物資の供給には滞りが出ており、商店も営業を取りやめている。(Kompas 2005.3.29)

■ 西海岸の道路で崖崩れ

北スマトラ州の南タパヌリ県ではシピロク＝タルトン間の幹線道路の3ヵ所で崖崩れが起きている。また、スンブル郡とダイリ県シディカランとを結ぶ道でも崖崩れが起きている。(Waspada 2005.3.30)

■ シボルガ空港は軍の管制下に

シボルガ空港は3月31日午後以降軍の管制下に置かれ、離陸した民間機が引き返させられるという事態も起こっている。(星洲日報 2005.4.1)

■ シボルガでは津波を恐れて数千人が高台で暮らしている

最大被災地ニアス島の対岸にあるスマトラ島のシボルガ郊外でも、高台で暮らし続ける住民が数千人いるという。(産経新聞 2005.4.2)

■ 東海岸

■ メダンで断続的に余震

在メダン総領事館によると、メダンでは3月29日も断続的に余震が続き、午後1時ごろには部屋のブラインドが動くほどのやや強い揺れがあった。住民らはそのたびに屋外に逃げ出しているという。(読売新聞 2005.3.30)

■ ブラワンの発電所も被害、メダンで停電

3月28日の地震で北スマトラ州メダン市郊外のブラワン発電所が被害を受けた。発電容量は800メガワットだが、現在は300メガワットに落ちている。このため、メダン市とその周辺で停電が発生した。(Tempo Interaktif 2005.3.29)

■ メダン市の華人、多くが一時路上に避難

インドネシアで3月28日夜に地震が発生した際、多くの華人が住むメダン市では外に飛び出し一時避難する人が多かった。メダン市の人びとは、今回の地震は2004年12月26日の地震よりも揺れが大きかったと語る。メダン市在住の労働者氏は香港の新聞『明報』の記者に対し、電話インタビューで「地震は昨晚(3月28日)夜11時10分ごろ発生し、約5分間続いた。今回の地震は前回の地震よりも強烈だった。われわれはみな外に飛び出した。津波が発生するという情報が飛び交ったが、結局それらはすべてデマだったと分かった。メダン市では今回の地震で特に被害はなかった」と語った。メダンから365キロ離れているニアス島は、

メダン市の華人の間では「領事島」と呼ばれている。労氏にはニアス島に親戚が住んでいる華人の友人が何人かいるが、その友人たちはニアス島の親戚と現在でも連絡が取れていないという。今回はアチェ州での被害はそれほど大きくなかったため、29日夕方の時点でアチェ州からメダン市に避難してきた人はいないとのこと。(星洲日報 2005.3.30)

■「スマトラの華人に地震を恐れて移住した人はいない」

インドネシア多様性の中の統一党(Rartai Bhineka Tunggal Ika)の党首である呉能則氏は、「私が知る限り、スマトラの華人の中に地震を恐れて移住した人はいない。彼らはここに長年住み、生計を立ててきた。他にいくところなどない」と語る。呉氏は、インドネシア人にとって地震は頻繁に起こるもので、その程度が様々なだけで、地震がいつ起こるかもわからないし、被災するかもしれないなどと言っていられないと語る。「インドネシア新兄弟協会」の張錦美氏は、2004年12月にアチェ州からメダン市に逃れてきた数千人の華人は、メダン市の親戚の助けを得て長期滞在の環境を整えた人以外は、みなアチェに帰りがっているという。(星洲日報 2005.3.30)

■ランカット県ではモスクの尖塔が倒壊、死者はなし

北スマトラ州ランカット県の対策本部からは、同県クアラ郡のモスクの尖塔が倒壊し、住民の1人ソフィアン・サマンの家を押しつぶしたとの報告が出ている。各郡の住民はより安全と思われる広場などへ避難している。ランカット県では地震による死者はいない模様。(Kompas 2005.3.29)

(3) その他のスマトラ地域の被害状況

■パダンやブカンバルでも家屋が損壊、一部で停電

揺れはスマトラ島の広い範囲で観測され、地元テレビによると中部の都市パダンやブカンバルで家屋が損壊、複数の地域が一時的に停電した。(読売新聞 2005.3.29)

■リアウ州と西スマトラ州でも大きな揺れ

リアウ州ブカンバルのアントラ通信の取材によると、3月28日インドネシア西部時間23時15分ごろに大きな揺れがあり、建物が大きな音を立て始めたため、住民が家の外に飛び出した。壁にかけられていた飾りや家具なども大きく揺れた。住民はこうした大きな揺れはここ数年経験したことがなかったという。西スマトラ州パダン市でも同じ時刻に大きな揺れがあり、驚いた住民が家を飛び出した。23時52分現在、パダンパンジャンの地震記録センターからは地震の大きさや強さについての情報は報じられていない。住民はパニック状態で家の外にいる。(Media Indonesia 2005.3.29)

■メンタワイ諸島(シベルト島)

■地震発生の可能性が指摘され、メンタワイ諸島で避難騒ぎ

西スマトラ州メンタワイ諸島の住民で海岸から5キロメートル圏内にいる住民は避難するようにとの呼びかけがなされたことで、人びとは混乱している。人びとは調整もなされないまま、家を出て、より安全と思われる場所に避難し始めている。この呼びかけを行ったパダンのタビン気象地質局のジュネド・ブルワントは、住民がこれほどの反応を示すとは思っていなかったという。ジュネドは4月1日、SCTVの「6時のニュース」のなかで、地震を警戒するようにとの呼びかけを行ったのは、メンタワイ諸島周辺で地震とそれに伴う津波が発生する可能性があったため、人としてやむにやまれず個人的な呼びかけとして行ったものだったと釈明した。一方、西スマトラ州知事代行のタムリンは、避難の呼びかけは気象地質局の公式の声明ではなく、また、避難すべきときは今ではないと述べた。ジュネドは自らの言葉が住民を不安に陥れたことを認識し、呼びかけを撤回した。しかし、ジュネドは住民に対し、今後も警戒を怠らないように、また、夜は家族全員が寝てしまわず、必ず1人は起きて様子を確認できるようにしておくようにと述べた。(Luputan6.com 2005.4.1)

■ 地震発生の噂を受けて、メンタワイ諸島から避難する動き

2005年3月28日にニアス島沖で発生した地震がメンタワイ諸島とパダン周辺地域でさらなる地震の引き金になるとの噂が出ている。このため、パタンとメンタワイ諸島の住民のあいだに不安が広がり、数日前からパダンやメンタワイ諸島を行き交う船舶にも大きな影響を及ぼしている。メンタワイ諸島の住民にはスマトラ島本土へ避難するも続出している。ムアラパダン港にはメンタワイを出てパダンへ向かってくる乗客が急増した一方、メンタワイへ向かう乗客は減少している。4月4日、午後2時現在、メンタワイへ向かう予定のレゼキバル号の乗船予定者は21人のみ。通常ならば出港1時間前には100人以上がチケットを購入しているところ。(Riau Pos 2005.4.5)

■ スマトラ島沖で地震、M6クラスが90分間で5回

米地質調査所(USGS)によると、インドネシア・スマトラ島中部パダンの南西約110キロ、シブルット島近くで現地時間4月10日午後5時29分(日本時間同日午後7時29分)ごろ、マグニチュード(M)6.8の地震が発生した。震源の深さは30キロ。この地震による被害は明らかになっていない。USGSによると、この地震後、大きな地震が複数回発生。約15分後の午後5時45分ごろにM5.8、午後6時14分ごろにM6.3、午後6時45分ごろにM5.5、午後6時55分ごろにM5.9の地震が観測された。いずれの地震も、震源はほとんど同じ場所で、震源の深さも30キロとなっている。(CNN.co.jp 2005.4.10)

■ 震源はムンタワイ諸島付近 パダンパンジャンで住民が高台に避難

震源はムンタワイ諸島付近で、震源の深さは約30キロ。死傷者や建物の被害があったかどうかは明らかでないが、同諸島の対岸の西スマトラ州パダンパンジャンの住民は民放メトロテレビで「大きな揺れを感じ、住民は高台へ逃げている」と語った。スマトラ島北部の西方沖では昨年12月、インド洋沿岸諸国に空前の津波被害を与えたM9以上の巨大地震が発生。その震源のやや南方で3月28日にM8.7の地震が起き、北スマトラ州のニアス島などで600人以上が死亡した。各国の研究者は、さらに南のスマトラ島中部沖で今後、地震が起きる可能性がある」と指摘していた。(産経新聞 2005.4.10)

■ 気象地質局「津波のおそれはない」

気象地質局メダン第一地区のヘンドラ・スワルタは4月10日、パダンで感じられた地震について、3月28日のニアス島沖地震の際にメダンの住民が感じた地震とほぼ同じ強さであると述べた。また、津波の恐れについては「パダンの観測所スタッフが地震発生後15分のあいだ、海水面の変化を観測したが、変化は見られなかった。したがって、われわれはこの地震による津波の発生はないと確信している」と説明した。(Kompas 2005.4.11)

■ 気象地質局「メンタワイ島沖地震は一連の地震と関連あり」

インドネシア気象地質局局長スハルジョノは、4月10日に発生したメンタワイ島沖地震を、2004年12月26日に発生したアチェ州シムル島沖地震、2005年3月28日に発生したニアス島沖地震と関連性があるものとの見方を明らかにした。「メンタワイ島とその周辺で、プレートの移動速度が減速していることが観測されていた。これは、この地域周辺で緊張が高まっていたことを意味している。この緊張が放出されるときに地震が起こる」とのこと。(Kompas 2005.4.11)

■ ムンタワイ諸島とは連絡が不通 ニアス島の国際緊急援助隊は全員無事

インドネシア・スマトラ島中部の西方沖のインド洋で4月10日発生したマグニチュード6.8の地震で、国営アンタラ通信などによると、震源に近い同島西海岸の都市パダンでは11日未明にかけて10回以上の強い余震があり、数万人の住民が津波を恐れて、高台などに一時避難した。けが人などの報告はないが、一部地域では家屋の倒壊もみられるという。米ハワイにある太平洋津波警報センターは10日夜、この地震による津波の恐れはないとの情報を出し

た。だが、震源地に近いインド洋上に浮かぶムンタワイ諸島の各島々とは音信が途絶えており、被害の詳しい状況はわかっていない。一方、北スマトラ州メダンの日本総領事館によると、パダンには、新空港建設プロジェクトにかかわっている日本人技術者など約50人の在留邦人がいるが、被害に遭ったとの情報は入っていない。また、3月28日の地震で大きな被害を受けたニアス島で医療支援活動を行っている国際緊急援助隊スタッフ21人の全員無事を確認している。(読売新聞 2005.4.11)

■ パダンでいくつかの建物が倒壊

4月10日17時18分ごろ、西スマトラ州パダンは大きな地震に見舞われた。住民は大きな混乱に陥り、数千人が先を争って高台に避難した。地震による被害は、同日夜の時点でも、いくつかの建物が倒壊したとの情報があるほか詳細は不明である。パダンパンジャンのルブックマタクシン地震観測所のジョハルマンは電話での取材に対し、パダンを襲った最初の地震は規模がM7.4で、震源はパダンパンジャンから200キロメートルのメンタワイ諸島付近とのこと。その後、M6.5などの余震が続いた。同日20時30分までにパダンパンジャンの地震観測所では110回の余震を観測しており、このうち15回が有感地震だった。一方、ジャカルタの気象地質局局長スハルジョノによれば、パダンで観測された地震は17時29分発生、規模はM6.7、震源はインド洋でパダンの西方105キロ、震源の深さは30キロメートルである。(Kompas 2005.4.11)

■ パダンで住民が高台に避難、シンガポールでも揺れ

震源はスマトラ島西海岸の都市パダンから南西120キロのムンタワイ諸島付近で、震源の深さは約30キロ。死傷者や地震、津波による建物の被害があったかどうかはわかっていないが、AP通信などによると、パダンでは、強い揺れで一部住民がパニックに陥り、建物から飛び出したり、津波襲来を心配して高台に逃げるなどしている。また、シンガポールなど近隣諸国の一部地域でも地震の揺れを感じた。(読売新聞 2005.4.11)

■ ブキティンギでも住民が避難 日本人被害の情報はなし

震源は、3月28日の地震で大きな被害を受けたニアス島からさらに南にあるムンタワイ諸島(西スマトラ州)付近。死傷者や建物の被害の情報はなし、強い揺れを感じた同州などで住民多数がパニックに陥って高台などに避難、交通が混乱した。津波発生の可能性について、日本の気象庁は「日本への影響はない」としている。昨年12月と今年3月にスマトラ沖地震が相次いだ後「さらに南方の海域で大地震が起きる可能性がある」と内外の地震研究者が指摘、住民の不安が強まっている。地元テレビなどによると、同州では州都パダンや外国人観光客も訪れる景勝地ブキティンギなどで、津波を恐れる住民が一斉に避難した。北スマトラ州メダンの日本総領事館によると、スマトラ島で日本人に被害があったなどの情報は入っていない。(中日新聞 2005.4.11)

■ ベンクル州、ジャンビ州の一部でも揺れ

メンタワイ諸島沖の地震による揺れは、スマトラ島のベンクル州やジャンビ州の一部でも感じられた。一部の地域では、住民が混乱して家から飛び出した。ベンクル州のクパヒアン気象地質局のアリムザインは、同州のレジャンレボン県クパヒアンやムコムコ県で揺れが感じられたと語った。また、ジャンビ州クリンチ県でも揺れが感じられたという。(Kompas 2005.4.11)

■ メンタワイ海峡の地震でリアウ州の住民も一部パニック

メンタワイ海峡で4月10日に発生した地震では、リアウでも揺れが感じられた。地震がもたらした影響について詳細な報告は得られていないが、リアウの住民にパニックを引き起こしたことは確かである。住民の中には地震と同時に家の外に飛び出したものも多くいた。プカンバルでは午前0時半ごろまで度重なる揺れが感じられた。クアンタンシンギンギ(Kuantan Singingi)県では18時15分ごろ地震がおき、揺れは3分ほど続いた。住民が恐怖を感じるほどではなく、人びとの動きは通常とかわらなかった。(Riau Post 2005.4.11)

■ 地震に襲われたパダン、学校を休校に

パダン市長フォウジ・バハルは4月11日早朝、4月10日にパダンを襲った地震が住民生活に大きな影響を及ぼしていることから、インドネシア共和国ラジオやそのほかの民間ラジオ局を通じて、4月11日は学校を休校とするよう指示を出した。(Detik.com 2005.4.11)

■ 西スマトラ州パダンの住民はパニックに

パダンにいるコンパス紙記者が4月10日夜、電話で伝えたところによると、パダンの住民、特に海岸から3キロメートル以内の距離に住んでいる住民は正真正銘のパニック状態に陥り、リマウマニ、インダルン、クランジ、ルブックミントゥルンといった高台へ先を争って移動した。中にはパダンから23キロメートル離れたブンハッタ森林公園地域まで逃げ出した人もいる。海岸から高台への道路は渋滞となった。また、ガソリンスタンドには自家用車に燃料を補給しようとする住民が押し寄せた。「大混乱だった。地震から数秒してパダンの街は完全に停電状態になり、それと同時に携帯電話通信にも障害が出た」と本紙記者ユルナルディは語った。また、パダンの住民エミル・サリムはジャカルタからのコンパス紙の取材に対し、地震はまるでいつまでたっても終わらないかのように感じられたこと、4月10日21時現在、高台へ避難しようとする人と車の波が依然として途切れていないことなどを伝えた。人的被害についての報告はまだない。西スマトラ州政府の建物の一部が崩れたほか、いくつかの建物が倒壊したり、崩れたりしているとの報告がある。(Kompas 2005.4.11)

■ タラン山が噴火

■ 西スマトラ州のタラン山、5回噴火 噴煙を噴出

4月12日、西スマトラ州ソロク (Solok) 県のタラン (Talang) 山が噴火した。インドネシア西部時間12時20分現在までに、すでに5回にわたって噴火し、噴煙を噴出している。周辺の4つの村落で「警戒」宣言が発令された。タラン山はパダン市の東、海岸線から60キロの地点に位置する標高2800メートルの山。最初の噴火は3時30分。その後も4度にわたって噴火した。この噴火でソロク県とその周辺でM5の揺れを観測し、山は噴煙を噴き上げている。灰は周辺の住宅や道路、田畑、農園に降り注ぎ、降灰量は20センチに達している。「警戒」宣言が発令されたのは次の4つのナガリ (村)。ブキットバトゥダラム (Bukit Batu Dalam)、ブキットシレ (Bukit Sileh)、バトゥバジャンジャン (Batu Bajanjang)、バトゥバニヤ (Batu Banyu)。これら4村の住民はすでに避難している。現在、ソロク県にいる西スマトラ州地質協会会長アデ・エドワルによると、火山灰は居住区と田畑をすっかり覆いつくしてしまったという。一方、スマトラ・西ジャワ火山観測局局長バンドゥン・イシャ・ワルハナは、タラン山の状況が現在「警戒」段階に引き上げられていることを明らかにした。4月10日のメンタワイ諸島沖地震以後、タラン山の活動が活発になっていたという。「われわれはすでにソロク県政府に対して警戒するよう申し入れていた」。(Waspada 2005.4.12)

■ タラン山噴火で周辺5郡の住民2万人が避難

4月12日早朝のタラン山噴火を受けて、西スマトラ州ソロク県政府はタラン山周辺の5つの郡の住民2万人を避難させた。タラン山は火山灰と噴出物をはきだし続けている。避難所はパユアンサカキ (Payuang Sakaki) 郡のクバンナンドゥオシルカム (Kubang Nan Duo Sirukam)、アラハンパンジャン (Alahan Panajang) のコンベンション・ホール、そのほか2カ所に設置された。避難勧告が出されたのは次の5郡。レンバンジャヤ (Lembang jaya)、グヌンタラン (Gunung Talang)、ダナウケンバル (Danau Kembar)、ブキットスンディ (Bukit Sundi)、レンバグマンティ (Lembah Gumanti)。(Median Indonesia 2005.4.12)

■ タラン山の活動、沈静化のきざし

現在、西スマトラ州ソロク県レンバンジャヤ郡バトゥバジャンジャン村にいる西スマトラの地質学専門家のダリファ・マルジシによれば、タラン山が噴出するたびに観測される揺れの間隔がしだいに長くなり、

活動が沈静化してきているとのこと。また、噴火直後から灰や煙に覆われて完全に姿を隠していた山頂がしだいに見えるようになってきたという。タラン山は4月12日午前3時42分に火山灰を噴出し、周辺住民2万人が避難していた。(Media Indonesia 2005.4.12)

■ タラン山噴火で3万2,000人が避難 マラピ山も活発に

4月12日に噴火したスマトラ島中部、西スマトラ州にあるタラン山(標高2896メートル)はその後も噴火活動が続いている。地元メディアなどによると、14日は噴煙が800メートルの高さまで上がった。15キロ離れたソロク県の県庁所在地カユアロでは、降灰で車が昼間からヘッドライトをつけて走っているという。政府は4段階ある警戒度を最高の「危険」に引き上げた。避難民の数も増えており、ふもとに住む3万2000人が安全な場所に避難した模様だ。同州のマラピ山(標高2891メートル)も活発になっているという。タラン山のふもとに住むユスマリダルさん(40)は13日、政府の用意したトラックに妻と3人の子供を乗せて、避難所に逃れた。「家でおびえているより、避難所の方が安心だ。いつまでこうした状態が続くのだろうか」と、地元メディアに語った。(朝日新聞 2005.4.15)

■ 避難民4万3,000人超す スマトラ島の火山噴火

インドネシア・スマトラ島中部で4月12日に噴火したタラン山(2690メートル)は16日、火山活動がさらに活発化し、国営アンタラ通信によると、避難した住民は約4万3000人を超えた。タラン山からは火山灰の激しい噴出が続いているほか、この日だけで5、6回にわたり大きな音と揺れが観測された。当局は、火口から5キロ以内の住民に避難勧告を出している。昨年12月と今年3月に巨大地震に襲われたスマトラ島周辺では、その後も地震が続発。さらにタラン山の噴火で住民に強い不安が広がっており、ユドヨノ大統領は13日に現地を訪れ避難民を見舞った。タラン山の噴火後、同国ではジャワ島西部バンドン郊外のタンクバンブラフ山などでも火山活動が活発化。火山観測当局はタラン山のほかに8つの火山について注意を呼び掛けている。(日経新聞 2005.4.16)

■ タラン山が再び噴火 避難住民4万3,000人超す

インドネシア・スマトラ島中部で4月12日に噴火したタラン山(2690メートル)は16日、火山活動がさらに活発化し、国営アンタラ通信によると、避難した住民は約4万3000人を超えた。タラン山からは火山灰の激しい噴出が続いているほか、この日だけで5、6回大きな音と揺れが観測された。当局は、火口から5キロ以内の住民に避難勧告を出している。昨年12月と今年3月に巨大地震に襲われたスマトラ島周辺では、その後も地震が続発。さらにタラン山の噴火で住民に強い不安が広がっており、ユドヨノ大統領は13日に現地を訪れ避難民を見舞った。タラン山の噴火後、同国ではジャワ島西部バンドン郊外のタンクバンブラフ山などでも火山活動が活発化。火山観測当局はタラン山のほかに8つの火山について注意を呼び掛けている。(毎日新聞 2005.4.17)

■ タラン山、「警戒」レベルに引き下げ

北スマトラ州ソロク県のタラン山の活動は急速に沈静化している。4月17日からタラン山は「危険」レベルから「警戒」レベルに引き下げられた。バンドン火山地質局のデヴィ・クルニアは17日、18日から全避難民に対し段階的な帰村を呼びかける予定であると述べた。一方、ソロク県知事がマワン・ファウジは「タラン山が「注意」レベルに落ち着いてきたことで、避難した住民は村に帰ることが可能になった」としながらも、7郡から避難した4万3,000人以上の住民が帰村には4日間を要するだろうと述べた。また、活動レベルが「注意」さらに「平常」に戻るまで9カ所に設置された避難用テントは撤収しない予定とのこと。タラン山の噴火は周辺地域のコメの収量に影響が出るのではと懸念されていたが、降灰ののちに降雨が始まったことで、噴火が自然の肥料となるのではとも見られている。(Waspada 2005.4.18)

■ タラン山で3名死亡

西スマトラ州タラン山の避難民キャンプで3名が下痢のために死亡した。さらに132人が火山灰を吸い込みすぎたために体調を悪化させていた。これら132名は、集中的な医療措置を受け、現在は体調も回復し、それぞれのテントに戻っている。ソロク県県長ガマワン・ファウジによると、4月18日に生後5ヵ月の乳幼児が下痢のため死亡した。このほか、13歳の少女と75歳の女性が死亡している。コンパス紙によると、仮設テントで暮らす避難民は7262世帯4万3111人。7地区に設置された32ヵ所の避難民キャンプで暮らしている。それぞれ、グメントラン(1604人)、ダナウクンバル(9684人)、パユンスカキ(1万6000人)、クブン(1208人)、レンバンジャヤ(5080人)、ブキスンディ(1450人)、レンバグマンティ(8088人)。タラン山の危険度は4月17日に第4レベル(警戒)から第3レベル(注意)まで引き下げられているが、村民は危険度が再びあがることを懸念し、避難民キャンプに留まっている。(Indonesia Relief 2005.4.19)

■ シベルト島とメンタワイ人

メンタワイ諸島には、北からシベルト島、シボラ島、北パガイ島、南パガイ島の4つの島がある。シベルト(Siberut)島はメンタワイ諸島の中で最大の島で、面積は4090平方キロメートル。住民の多数派はメンタワイ人(約2万5000人)で、その他にミナンカバウ人、ジャワ人、バタック人などがいる。(メンタワイはムンタワイとも書かれるが、地元の人々の発音はメンタワイに近いので、ここではメンタワイとする。)

メンタワイ人はシベルト島の川岸に住み、伝統的に狩猟・採集および養豚・養鶏を主な生業とする。主食はサゴだが、移動式耕作を行うこともある。比較的最近になってメンタワイ諸島に稲やトウモロコシがもたらされた。

伝統的には、父系による集団が50~60人ごとにウマ(uma)と呼ばれる共同住宅に住み、1つのコミュニティを形成する。1950年頃までにシベルト島には250~300のウマが形成されていたが、この地域を植民地支配したオランダは1950年代に村制度を導入して、これらのウマを約60の村(カンボン)に再編した。インドネシア独立後は、1979年の村落統治法によって60の村が20の村(デサ)とされた。

メンタワイ諸島では、シベルト島に代表される原始的な生活が観光客の関心の対象となり、伝統的な生活が撮影され、西洋諸国や日本・シンガポールなどのアジア諸国でも上映された。また、西洋人の観光客や環境保護を訴える国際NGOの注目を集めた。シベルト島で活動を行った主な国際機構・NGOに次のものがある。

- サバイバル・インターナショナル(本部イギリス) 1979~1982年、伐採反対と土地の権利保護
- ユネスコ 1982年、シベルト島を「人間と生物圏」保存地域に指定
- WWF 木材伐採権の見直しと自然保護地の設定、1982年にメンタワイでの活動を終了
- ADB 1994年、シベルト島の自然保護運動に地元住民を参加させるため、地元NGOに資金援助(メンタワイ人の中では、この自然保護運動を契機に、スマトラ本島出身のミナンカバウ人やバタック人と区別して自分たちをメンタワイ諸島の「先住民」とする呼び方が広まったと言われている)
- SKEPHI(インドネシア熱帯保護ネットワーク、本部ジャカルタ) シベルト島にアブラヤシ・プランテーションを作ることに反対運動を行っている。

年間の降雨日は約250日で、その期間は内陸部の丘を越える道路がぬかるんで使えなくなる。市街地では学校や医療施設などが比較的整っているが、内陸部ではこれらの施設は十分でない。例えば医者は市街地にしかないため、月に2回、医者がスピードボートで4時間かけて内陸部に往診している。

シベルト島は西スマトラ州パダンパリアマン県の一部とされ、島内には北シベルト郡と南シベルト郡の2つの郡がおかれていた。2001年11月、メンタワイ群島県の正副県知事が任命され(任期2001~2006年)、メンタワイ諸島はメンタワイ群島県として西スマトラ州内の独立した県としての地位を得た。

(4)マレーシアの被害状況

■ マレーシア気象局、沿岸地区に津波警報

マレーシアのナズリ首相府大臣が3月29日に国会でメディアに語ったところによると、気象局地震課は地震発生の知らせを受け取ると即座に警察本部の管制センターに通知し、全国の警察署に通知させたとのこと。また、気象局はペナン州、ブルリス市、クダ州および同州ランカウイ島、ペラ州などの沿岸部の住民に警報を出し、急いで海岸から離れて安全な高台に避難するよう勧告した。ペナンとクダでは1525人が一時避難した。地震発生後5～10分後にTV1とTV2が地震情報を流し、人々に注意を促した。(南洋商報 2005.3.29)

■ ブルリス州

クアラスランゴールやクアラスンガイバルなど海岸地区に住む人びとは津波を恐れて安全な場所に避難した。通常は夜中から早朝にかけて営業しているクアラスンガイバルの海岸沿いの飲食店も閉店していた。(Bernama 2005.3.29)

■ ペナン州

当局は各地区の官吏を沿岸地区に送り、安全な場所に移動するよう住民に呼びかけた。また、バトゥフェリンギ地区のホテルに対して、津波の可能性があると警告した。(New Straits Times 2005.3.28)
ペナン州大臣コー・ツークンによれば、早朝6時に気象局局長の通知を受け取り、津波警報を解除したとのこと。(南洋商報 2005.3.29)

大勢の人が、今回の地震の揺れは2004年12月26日の地震の揺れと同じくらいであったと証言した。ブルマタントピラウトやバヤンルパスの漁民約70人は、地震を感じた後、即座にボートを安全な場所に移動した。スブランプライでも揺れを感じたという報告があった。(Bernama 2005.3.29)

■ スランゴール州

スルダンのマレーシア・プトラ大学では、寮生が寮から一時避難するよう指示された。シャーアラムのセクション13にあるプルダナ・アパートメントでは、住民が互いに呼びかけあいながらアパートから退去し、混乱状態が生じた。住民によれば、揺れを感じたのは2004年12月26日以来とのこと。アパートが倒壊するのではないかと恐れ、車両を移動する住民も見られた。多くの人が消防救急局に電話し、揺れの原因を突き止めようとした。プタリンジャヤのマラヤ大学病院では681人の患者が一時混乱状態に陥り、医師や看護師の制止で平静さを取り戻した。スバンスリアの高層住宅では住民100人が建物から一時避難した。住民どうし、建物から逃れるよう声をかけあったとのこと。(Bernama 2005.3.29)

スランゴール州消防救急局によると、午前0時15分頃以降地震に関する通報を多数受けたが、建物の倒壊や死傷者の発生に関する通報はなかったとのこと。(星洲日報 2005.3.29)

■ マラッカ州

タマンムラカラヤの高層住宅に住む人びとが建物の外に飛び出して避難したが、約20分後に家に戻った。(Bernama 2005.3.29)

マラッカ州のマールコタ病院では、看護師の誘導で患者が病院の外に避難した。病院の警備員は消防局に連絡し、人ごみの整理を要請した。(New Straits Times 2005.3.28)

■ クダ州

ランカウイ島、クリム、コタクアラムダ、アロースターなどで特に揺れが感じられた様子。2004年12月26日の地震の際に大きな津波の被害を受けたコタクアラムダでは、海岸沿いの村落の人々が家から飛び出

し避難した。警官が出動してブルマタンカトンの仮設住宅周辺に集まるようアドバイスした。ランカウイ島では、ホテルから飛び出して空き地に避難する人もいた。アロースターとクリムでは揺れは45秒間続いたとのこと。(Bernama 2005.3.29)

コタクアラムダの沿岸地区(カンポントピスンガイ、カンボンマスジッド、カンボンバダンサリム、カンボンクパラジャラン、カンボンクダ、カンボンパヤ)に住む4000人の住人が、2004年12月26日の被災後に避難所になった学校2校に避難した。(New Straits Times 2005.3.28)

■ ペラ州

キャメロンハイランドのRosa Pasadena Hotelで研修を行っていた2団体約190人は、建物から逃げろという叫び声を聞いて建物の外に避難した。外で30分程屋過ごした後、建物の中に戻ってよいと許可が出たので各自部屋に戻った。(Bernama 2005.3.29)

■ クアラルンプール市

セントゥル地区のスリペラ・アパートに住む住人は、12時15分頃揺れを感じたがそれが地震によるものだとは思わず、妻と子どもを起こして建物から逃げたと語った。アンバン通りの日航ホテルでは、宿泊客の多くがホテルの部屋からロビーに飛び出した。(Bernama 2005.3.29)

ブキビタン地区では多くのホテルが宿泊客をホテルから避難させ、路上でしばらく待機させた。クリンチ地区のビスタアンカサ・アパートでは、多くの住人が地上に飛び出して避難した。(New Straits Times 2005.3.29)

クアラルンプール市消防救急局によると、市内のほとんどの高層ビルで揺れが感じられたとのこと。建物の倒壊や死傷者の報告はない。(星洲日報 2005.3.29)

■ 地震の影響で高速道路に陥没が生じる

マレーシアでは、3月29日未明(マレーシア時間)に発生したスマトラ沖の地震の影響により、新パンタイ高速道路(New Pantai Expressway)に直径3.5メートル、深さ1メートルの陥没が生じた。陥没ができたのは南プタリンジャヤにあるメダン料金所付近。初期調査では、道路下の地層の下層部分が石灰岩の洞穴となっており、そこに変動が生じたとされている。サミー・ヴェル建設大臣は、高速道路の安全性を保証し、3月28日の地震によって建設省が管理している施設や設備に構造上問題がでたという報告はないと述べた。建設省は、公共事業局やマレーシア高速道路局などを通じて道路や建築物の安全を監視していく。(Bernama 2005.3.29)

■ マレーシア、地震を想定した建築ガイドライン作成へ

半島部マレーシア都市・郊外計画局は、地震を想定した建築ガイドラインを作成する意向。同局の局長モハメド・ファドヒル・モハメド・キールによれば、同局は43項目のガイドラインを定めているが、マレーシアは地震活動がほとんどない地域であるため、地震に備えたガイドラインはないとのこと。3月29日未明(マレーシア時間)に発生したスマトラ沖の地震では、マレーシア各地でも揺れが感じられた。「これは新しい現象だ」。耐震設計のガイドラインにはゴムの利用を導入する予定。これは国内のゴム産業を活性化するという利点もあるという。耐震設計を強制するかどうかは、今後の調査を行って決定するとのこと。(Bernama 2005.3.30)

■ 放送副大臣、官営放送機関の即時性の欠如に不満

ザイヌディン・マイディン放送副大臣は3月30日、国会ロビーで行われた会見において、ラジオ・テレビ

ジョン・マレーシア(RTM)の地震報道にあちこちから非難の声があがっていることに対し、RTMが報道における即時性を欠いていたことを認めた。同副大臣によれば、自身は午前0時45分に地震に関する知らせを受け、その後すぐにRTMに連絡したが、RTMは午前1時15分に最後のニュースを伝える段階になってやっと地震について報道し、しかもその報道も長く続かず、サッカーの試合に切り替わってしまったとのこと。RTMは午前2時20分にナジブ副首相と市民の反応を放送するまで、地震に関して何も報道しなかった。同副大臣は、CNNは絶えず地震関連情報を報道して市民の要求を満たしたと評価し、また、国内のテレビ局NTV7は報道のプロとして情報を提供したと褒め称えた。同副大臣は、臨機応変に番組を変更し、地震関連の速報を放送することを決断しようとする人がRTMにはいなかったと指摘し、RTMは柔軟な姿勢を備えていくことが必要だと述べた。また、同副大臣は、官営の放送機関であるRTMは情報を慎重に調査・確認する必要があることを認めた一方で、RTMが各地に派遣した記者がCNNや民間のテレビ局の記者のように新しいニュースを報道できなかったことにも不満を示した。(星洲日報 2005.3.30)

■ 放送大臣、官営放送機関は即時性より正確さ・慎重さが重視される

アブドゥラ・カディール放送大臣は、3月29日未明の地震に関してラジオ・テレビジョン・マレーシア(RTM)の報道が遅れたことに対し、RTMは官営の放送機関であり、全てにおいて慎重さが求められており、情報を調査・確認してから報道する必要があったためだと答えた。同大臣は、「われわれは軽々しくニュースを報道するわけにいかない。官営機関は市民のお金で成り立っている。そのためニュースを慎重に処理し、市民のお金を有効に使っていかねばならない」と語った。(星洲日報 2005.3.31)

■ ナジブ副首相、気象局の対応に理解を示す

マレーシア気象局が地震に関する公式声明を出すまでなぜ時間がかかったのかという質問に対し、ナジブ副首相は、気象局は津波の有無を判断する必要があったためだと答えた。3月29日午前0時9分に発生した地震に関して、マレーシア気象局は午前1時に公式声明を発表した。ナジブ副首相は「もし津波が起こるという情報をあわてて出してしまうと、パニックを引き起こしただろう。人びとは理由もなく逃げ始め、その過程で事故が起こった可能性もある」と指摘した。(Bernama 2005.3.31)

■ マハティール前首相、避難訓練の実施を提案

マハティール前首相は、政府は地震や津波を想定した避難訓練を行い、人びとが天災に備えられるようにすべきだと提案した。前首相はマレーシアを訪れた日本の高校生26人の質問に答え、「マレーシアの問題は、われわれが津波を理解していないことだ。大きな波がマレーシアを襲ったことなどなかったから」と語り、地震や津波への対処法に関する知識がマレーシア人には不足していると指摘した。また、政府はテレビやラジオなどを通じて迅速で正確な情報を提供しなければならないと語った。(Bernama 2005.3.31)

■ ナジブ副首相、新しい建築基準は慎重に導入すべき

地震に備えるような建築基準を実施する計画が政府にあるかという質問に対して、ナジブ副首相は「いかなる形の改善も金がかかる」ため、専門家の助言を求める必要があると答えた。また「それ[新しい建築基準を導入すること]が実施する価値があるものかどうかを検討しなくてはならない。もしそれを法律に盛り込めば、建築費が増えることになり、最終的に国民の負担が増えることになる」と語った。(Bernama 2005.3.31)

■ ペナン州政府、建物の亀裂を調査する特別委員会を設置

ペナン州大臣コー・ツークンが3月31日に語ったところによると、ペナン州政府は3月28日の地震で亀裂が生じた建物の危険性を調査する特別委員会を設置するとのこと。特別委員会の委員長はペナン州行政委員のコアイ・カーホアが務め、建築技師や土木技師などの専門家を官民双方から委員に任命する。コー

州大臣は「ペナンには高層住宅に分類される住宅が1200棟ある。特別委員会は亀裂とその危険性を測定する方法の確立に取り組む」と語った。また、特別委員会は通信システムの脆弱さを明らかにする意向もあるとのこと。「地震が起こったとき、通信システムに混乱が生じたことにより、私自身も一部の官吏や関係者と連絡を取ることができなかった。天災に備え、こうした事態を警戒し、調査を行わねばならない」。なお、コー州大臣によると、建物に亀裂が生じたという通報は、メディアで報道されたケース以外は公式にはなされていないとのこと。コー大臣は市民に対して、建物に亀裂を発見した場合、ペナン市議会およびスンプライ市議会に直接通報するよう呼びかけた。(Bernama 2005.3.31)

■ 建設大臣、専門家の協力を得て地震に備えた手段を講じる

サミー・ヴェル建設大臣は4月5日の国会で、将来地震が起こりうることを念頭において建築士や設計士が建築・設計を行うよう方策を講じる意向であると語った。建設省、住宅・地方政府省、科学技術革新省、技師・建築士委員会など関係機関の専門家によるフォーラムを行い、そこに専門家を招いて意見を聞く予定もある。3月28日の地震の影響を調べるためにスマトラに技師を送る可能性があるかという質問に対しては、インドネシア政府の許可をまず取る必要があると返答した。マレーシアの専門家を台湾や日本、イランに派遣したり、日本や台湾から専門家を招いて地震関連技術の移転を依頼したりすることを計画しているとのこと。(Bernama 2005.4.6)

■ 地震国になる可能性を研究・調査

気象局によれば、インドネシアで起きた大地震が地層の構造を変化させ、将来マレーシアが地震国になりうる可能性は、今の段階では確定するすべがないとのこと。地震班の劉氏は、気象局は各国の専門家や学者の研究報告を受けた後で見解を出す予定であると語った。すでにカマルディン科学技術革新大臣が、各国の専門家や国内の学者による研究・調査を提案したとのこと。(星洲日報 2005.4.6)

(5) その他の地域の被害状況

■ ココス島で津波を観測

オーストラリア気象局によると、スマトラ島南方の豪領ココス島では2回津波が観測され、第1波は10センチ程度だったが、第2波は25センチだったという。12月の地震では、ココス島では33センチの津波が観測されていた。(ロイター 2005.3.29)

■ ココス諸島で津波を観測

震源から約1600キロ離れたオーストラリア領ココス諸島で午後3時41分までに小規模な津波が観測されたという。気象庁は午前1時50分から、インド洋の広い範囲に津波発生の可能性があるとして前回の大地震で被害の大きかったインドネシア、タイ、スリランカ、モルジブ、インド、マレーシアの沿岸6カ国に津波情報の提供を開始。同2時45分には津波の到達予想時間などの情報も提供、警戒を呼びかけている。(日経新聞 2005.3.29)

紛争と被災からの復興

■ 地震の被災者追悼で2万人集会 インドネシア・アチェ州

昨年12月のスマトラ沖地震で最大の被害を受けたインドネシア・アチェ州の州都バンダアチェで4月5日、震災から100日が経過したのに合わせ、犠牲者を悼み復興を祈る集会が開かれた。海岸に面するウレレー地区のイスラム教礼拝所に2万人以上が集まり、同州のアズワル副知事は「新たな地震に見舞われたニアス島やシムル島の犠牲者にも祈りをささげたい」とあいさつ、救援に尽力した国連や各国の非政府組織(NGO)に感謝の言葉を述べた。同国政府は、津波で壊滅状態となったウレレー地区を、惨害を語り継ぐ津波パーク

にする構想を進めている。(産経新聞 2005.4.5)

■ 津波発生から100日、インドネシアで式典に数千人が参加

インド洋津波発生から100日が経過した4月5日、バンダアチェ郊外のモスクで式典が催され、数千人が参加した。5,000人を超える人々が集まり、犠牲者を追悼した。当局者によると、さらに数千人が参加する見通し。インドネシアでは、津波の死者・行方不明者の総数が22万人を超え、50万人以上が住居を失い、大半が避難所生活を余儀なくされている。(ロイター 2005.4.5)

■ 不明者、5万人以上少なかった インドネシア政府が訂正

インドネシア政府は4月7日、昨年12月26日のスマトラ沖大地震・津波による行方不明者の数について、公表済みの9万3,458人から5万人以上少ない3万7,063人へと大幅に修正した。これにより、これまで確認された死者12万6,915人と合わせると、死者・行方不明者を合計した犠牲者の数は22万余りから16万余りに減少。他国の犠牲者も合わせた全体の死者・行方不明者も30万人弱から大きく減ることになる。政府当局者はAFP通信に対し、多くの避難民を行方不明者として数えていたためとしている。(朝日新聞 2005.4.7)

アチェ州・ニアス島 復興計画

■ 政府、ニアス島とシムル島に「緊急事態」を再適用

インドネシア政府は3月29日、3月28日に新たな地震が発生したことを受けて北スマトラ州ニアス島とアチェ州シムル島に「緊急事態」を適用することにした。ユドヨノ大統領は、関係する地方政府と直接連絡をとり、現地の国軍・警察と協力してただちに対応するよう要請したことを明らかにした。最優先課題は負傷者の手当て、救出、遺体の回収などで、負傷者をできるだけたくさん救出するよう指示したという。インドネシア国軍・警察、関係する省庁に対して災害への迅速な対応を要請した。(Kompas 2005.3.30)

■ ユドヨノ大統領「国際機関・団体の人道支援を歓迎」

ユドヨノ大統領は3月29日、3月28日に地震が発生したことを受けて、アチェ州に現在いる国際機関・団体や、現在アチェ州にいない国際機関・団体に対し、人道支援のために再び積極的に対応してくれるよう求めていることを明らかにした。「インドネシア政府は人道支援を歓迎する」とユドヨノ大統領は述べた。今回の地震が津波後のアチェ州の復興再建計画に与える影響については、「すでに行ってきたことについて大きな変化があるとは思っていない。北スマトラ州とアチェ州の再建プロセスが滞ることのないことを望んでいる」と述べた。(Kompas 2005.3.30)

■ 国家開発企画庁、アチェの復興再建計画見直しへ

国家開発企画庁長官スリ・ムルヤニは3月30日、3月28日夜にニアス島近くで地震が発生したことを受けて、アチェ州と北スマトラ州の復興再建計画を見直す予定であることを明らかにした。2005年中央開発計画会議に出席したムルヤニは、会合後、「今回の地震はアチェと北スマトラの復興再建計画のマスタープランに大きな影響を与えるものである」と述べた。国家開発企画庁は今回の地震の被害状況や影響を調査する。復興再建計画については、大統領令という形で確定される前の段階であり、変更が可能であるとの考え。ニアス島に関連した部分について見直しを行う予定。ニアス島は2004年12月26日スマトラ島沖地震・津波後の復興再建計画の対象となっていた12県のうちの1つだった。ムルヤニは今回の地震後、日本政府から支援の申し出があったこと、また、オーストラリア、アメリカ、ドイツがマスタープランにしたがってニアス島のインフラ再建を支援する姿勢を示していたことにも言及した。(Kompas 2005.3.30)

■ インドネシア政府、「計画を再検討する」

昨年12月の大津波の被災地アチェ州を中心に、防災や復興の計画草案を3月26日にまとめたばかりのイン

ドネシア政府は、今回の震災で「計画を再検討する」(ムルヤニ国家開発企画庁長官)としているが、大幅な防災対策見直しを迫られそうだ。(産経新聞 2005.4.2)

■ アチェ人、外国人、インドネシア政府の3者がそれぞれ利を得られる復興計画の立案を

2005年3月にニアス島を襲った地震の被害は、2004年12月にアチェ州を襲った津波の被害ほど大きくはなかったが、アチェ州の復興計画に対して大きな影響をもたらすと思われる。アチェ州の復興計画には、2004年12月に津波の被害を受けたニアス島も含まれていたが、今回の地震のあとインドネシア政府は早い段階で復興計画の見直しを発表し、ニアス島の復興をその計画に盛り込むとした。当初のアチェ州復興計画は、2005年4月から2006年4月までを復興段階とし、それ以降2009年まで再建段階とし、国際機関や各国からの支援で大部分をまかなった40兆ルピア(約4468億8000万円)の資金を投じるとしていた。時間枠や資金の規模に変更は生じるのだろうか。アチェ人は外国人がアチェ州の再建に関わることを望んでいるが、インドネシア政府は自らの手だけでアチェ州を再建していくのだろうか。アチェ人は政府に対して不信感を持っている。またインドネシアは世界有数の汚職国である。とは言え、外国人がアチェ州の再建に関わっていくとしても、膨大な規模の再建事業を行っていく力は今のアチェ人にはなく、外国人は有能なパートナーを得る必要がある。アチェ人、外国人、インドネシア政府がそれぞれ利を得られるような方策を見つけていかねばならない。アチェ州の復興・再建計画を政府が立案するのでもいいだろう。だがその場合、資金運用をモニターする機会をアチェ人にも提供すべきだ。(Star 2005.4.3)

■ インドネシア政府、地震復興予算を積み増し

インドネシア政府はスマトラ島沖地震の被災地の復興計画を見直す。3月末に策定したものの、昨年12月末の地震・津波に次いで3月28日に新たな地震が発生してニアス島などが被災したため、計画を修正する。具体的には復興費用を41兆7,400億ルピア(約4,670億円)から48兆7,600億ルピア(約5,460億円)に引き上げる。増額分はニアス島中心に道路や住宅の修復費用に充てる。これに関連して、同政府は12月末の地震・津波の行方不明者を9万3,458人から3万7,063人に下方修正した。(日経新聞 2005.4.8)

■ バンダアチェ＝ムラボ間の道路、陸軍3大隊が整備・監視活動を継続

陸軍参謀長ジョコ・サントソ中將は4月10日、国軍の農村開発プログラムによって再建されたバンダアチェ＝メダン間の幹線道路について、今後も国軍が整備・監視していくと述べた。「山間部へと抜ける道は土砂崩れの危険もあり、この地域の道路は手入れと整備が必要である」とのこと。国軍は地元住民と協力しながらバンダアチェ＝ムラボ間の273キロメートルのうち、82キロを開通させた。また、仮設橋梁23脚を設置したほか、41脚の補強を行った。すでに2005年4月8日～9日にかけて、陸軍戦略予備軍の第10戦闘大隊がアチェジャヤ県ラムノ郡トゥマラ(Teumara)村の1.5キロメートルを補強する活動を行った。このほか、第4戦闘大隊とブキットバリサン第一軍管区の合同部隊が道路や橋梁の修復・補強作業を行っている。(Tempo Interaktif 2005.4.11)

■ アチェ州知事に禁固10年 汚職裁判所が初判決

インドネシアの汚職裁判所は4月11日、ロシア製ヘリコプターの購入代金を水増しして公金を着服、136億ルピア(約1億5,000万円)の損害を州財政に与えたとして、アチェ州のアブドラ・ブテ知事(停職中)に禁固10年と罰金5億ルピアの有罪判決を言い渡した。裁判官を含む公務員の腐敗に悩む同国では昨年、特別司法機関として汚職調査委員会と汚職裁判所が発足。最初の事件として昨年12月7日に同知事が逮捕され、今回が同裁判所の初判決となった。知事は無罪を主張していた。これまでは、汚職事件で起訴されても裁判官が買収され無罪となる例が多く、今回の事件は腐敗一掃を公約とするユドヨノ政権の試金石にもなっていた。昨年12月のスマトラ沖地震で最大の被災地となったアチェ州では、国際社会から今後流れ込む巨額の復興支援をめぐっても不正防止が焦点だ。(産経新聞 2005.4.11)

■ アチェ州知事に10年間の禁固刑

4月11日、ロシア製ヘリコプター購入資金不正流用疑惑で起訴されていたアチェ州知事アブドゥラ・プテに10年間の禁固刑が申し渡された。アブドゥラ・プテはアチェ州知事だが、起訴に伴い停職処分を受けていた。立証された汚職総額は100億ルピア。禁固刑のほか、アブドゥラ・プテは5億ルピアの罰金と36億8,750万ルピアの賠償金を支払わなければならない。判決によれば、プテがアチェ州知事として行ったロシア製ヘリコプターMI-2の購入は、公開入札を経ずにプトラ・ポビアガン・マンディリ社を直接指名して行われており、2000年大統領決定第18号に違反している。この購入でプテは36億5,000万ルピア、プトラ・ポビアガン・マンディリ社は38億7,000万ルピアを得て、国家財政に損害を与えた。クレスナ・メノン裁判長は判決の中で、この汚職行為は紛争地域で行われたものであることに加え、本来清潔な行政を実現すべき州知事という立場にありながら行われたもので、政府のイメージを破壊するものであり、プテの罪は重いと述べた。ただし、これまでに罪を犯した前歴がなく、家族を有していることや、アチェ州の州政府予算を返還していることも考慮して、量刑は禁固10年となった。(Tempo Interaktif 2005.4.11)

■ インドネシア、スマトラ沖地震で5,500億円の復興基本計画

インドネシアのユドヨノ大統領は4月15日、昨年12月と今年3月のスマトラ沖地震で大きな被害が出たアチェ州とニース島などの復興に、今後5年間で約48兆8,000億ルピア(約5,500億円)を投ずる必要があるとの復興基本計画に署名した。復興資金について政府はこれまで約41兆7,000億ルピアとの試算を示していたが、3月28日にニース島を襲った2回目の大地震を受け、増額した。計画は道路や橋などインフラの再建や災害に強い街づくりの基本方針を定めているほか、住宅再建のため、住居が全壊した世帯に2,800万ルピア(約32万円)、一部損壊の世帯に1,000万ルピアを支給するとしている。被災地では今も50万人以上が避難所やテントなどで生活している。政府当局者によると、基本計画を実施する専門機関を設置する政令を来週にも出す方針。(日経新聞 2005.4.15)

■ アチェ復興に関する大統領規則が発効

ユドヨノ大統領は4月15日、アチェ州ならびにニース諸島の復興再建マスタープランに関する大統領規則に署名をする。ユスリル・イザ・マヘンドラ国家官房長官は4月14日、大統領府において政府がマスタープランの作成を完了したことを明らかにした。作成にあたっては、有識者、研究者、地方政府などにも協力を仰いだ。当初、アチェに対する再建復興計画とニースに対する再建復興計画をわける考えもあったが、現実性を考え、大統領決定は1つにまとめることになった。3日後にはアチェならびにニースの復興再建局の設置に関する政府規則が出される。復興再建局は立案部門、監査部門、執行部門から構成される予定。(Tempo Interaktif 2005.4.15)

■ 津波防止でマングローブ林復活の大計画開始＝インドネシア

インドネシア政府は12月26日の大地震で発生した津波の大被害を被ったスマトラ島アチェ州の沿岸に4年かけてマングローブを植樹する大規模作戦に乗り出した。国営アンタラ通信によると、カバン森林相は津波でアチェ州のマングローブ林35万ヘクタール以上が破壊されたことを明らかにした。カバン森林相によれば、政府は合計15万ヘクタールにマングローブを植林する予定。カバン氏は地元社会も同様のプロジェクトを始めるよう期待を表明した。専門家によれば、海岸沿いのマングローブ林は津波のエネルギーの一部を吸収する働きをするので、津波の衝撃の緩和に役立つ。カバン氏によると、インドネシアのマングローブ林は2000年には930万ヘクタールあったが、今日では265万ヘクタールに激減しているという。(時事通信 2005.4.19)

■ アチェ州で教師1万3,000人以上の不足

アチェ州教育局局長アラムシャ・バンタは4月25日、アチェ州の教育活動を通常通りに行うためになお1万

3,759人の教員が不足していると述べた。内訳は、就学前教育1,342人、小学校7,572人、中学校1,196人、高校706人、そのほか573人。アラムシャ局長は国家機関強化担当国務大臣に対し、アチェ州への教員割り当てを前年度より増員するよう要請する。アチェ州では津波前からすでに1万1,389人の教員不足が指摘されていたが、津波により不足教員数は2,370人増えて1万3,759人となった。このほかの問題としてアラムシャ局長は、アチェ州における教員養成がシアクアラ大学とアルラニリ・イスラム高等学院、およびいくつかの私立大学の教員養成コースに限定されてきていたことを挙げ、今後は教育学部以外の大学卒業者に対しても3ヵ月から6ヵ月の短期教員養成講習を行うことで教員となる道を開くことを検討していると述べた。(Analisa 2005.4.26)

■ 北アチェ県ニサム郡の13人、新郡設置の実現を要請

北アチェ県ニサム郡のバンドルバル地区とロクウェン地区の住民代表13人は4月16日、北アチェ県地方議会A委員会と面会し、両地区をニサム郡から分立させ、新たにバンドルバル郡を設置する地方政令を出すよう求めた。バンドルバル郡分立の話は2004年の選挙の際にすでに出ており、住民からの要望は国民覚醒党のファルハン・ハミド国会議員などから前向きな反応を得て、これまで順調に手続きが進められていたという。新郡設置の要望は、行政上の諸手続きを迅速に行い、住民の福利厚生を向上させるためであると説明された。両地区からニサム郡の郡役場までは13キロメートル離れており、しかも舗装されていない村道を行かねばならず、行政手続きなどを行うのに不便だった。郡役場までクルングクウ地区を経由する別のルートもあるが、これには金がかかる。住民代表によれば、両地区は9村からなり、人口は8,606人、面積は18平方キロで、1つの郡を形成するのに十分な規模である。地方議会副議長リドワン・ユヌスは住民代表に対し、ほかの地域からも郡分立の要請があったことに触れながら、ニサム郡とその周辺地域を代表する地方議会議員がバンドルバル地区の分立を実現させることを期待すると述べた。また、A委員会のイスハク・ヤシン委員長は、この要望は適切に取り扱われるべきものだと評し、政府に検討を求めると述べた。また、ハリ・アズハル議員は、自分は同地区を選挙区とする議員ではないが、バンドルバル地区の住民の郡設置の動きを支持すると述べた。(Serambi Indonesia 2005.4.18)

■ 救援復興資金の運用

■ インドネシア会計検査院、アチェ支援基金の使用方法を批判

インドネシア会計検査院は3月31日、地震津波被害を受けたアチェ州の救援復興活動について「船頭があまりにも多い」ため、人道支援基金の会計検査が困難になっていることを明らかにした。会計検査院によれば、アチェの地震津波被害に対する救援復興資金を、国民福祉調整省、軍、アチェ州政府という3機関が十分な調整を行わないままそれぞれに使用した。このため、資金の使途の監査が非常に難しくなっている。これに加えて、人道支援基金の会計報告は従来の様式に即して行われていないことが監査をさらに困難にしている。アチェ州復興には40兆ルピア(433億米ドル)が充てられ、このうち39兆ルピアが外国からの援助、1,639億ルピアが国営企業から、8,943億8,000ルピアが一般からの寄付だった。会計検査院では、こうした資金運用の不備はアチェ復興資金の配分にあたってインドネシア政府が十分な説明責任を果たせないということを意味し、その結果、国際社会からの信用を失うことにつながると懸念している。(Jakarta Posta 2005.4.2)

■ 会計検査院の報告を受け、大統領、復興資金の支出の一括管理を指示

スディ・シラヒによれば、3月31日の会計検査院の報告を受けて、政府はすでに関係する監督省庁に資金運用の監視を行うよう要請したとのこと。「大統領は、アチェ復興再建のマスタープランが実行される際には、支援金の使途をひとつの屋根の下で一括して管理するよう指示した」という。(Jakarta Post 2005.4.2)

■ 副大統領、緊急段階における復興資金運用の混乱について理解もとめる

ユスフ・カラ副大統領は4月1日、3月31日の会計検査院の報告で政府によるアチェ復興資金の運用に問題

があると指摘されたことについて、アチェの状況は緊急事態だったのであり、復興再建活動を現実に進めていくために必要な行動だった、と弁明した。緊急事態だったため、支援金の使途に関する説明責任は複数の省庁が共同で負うべきものになっていることについて理解してほしいとのこと。また、今後は資金の運用にあたって「グッド・ガバナンス」が行われていることを示すために、再建復興プロジェクトに公開入札制を導入すると言明した。会計検査院は国家災害対策本部が調整役を十分に果たさず、基金の監督者としての役割を担うことを拒否し、この結果、基金の監査が行えないという状況を招いていると批判していたが、これに対してもユスフ・カラ副大統領は「対策本部は基金の運用に直接携わっていないという点が理解されていない。物資の調達には食糧庁が、道路建設は公共事業省が請け負っている。監査はそれぞれの機関が行うべきものである」と答えた。(Jakarta Post 2005.4.2)

■ 国際社会・諸外国

■ 研究センター設立提案 アジア防災センター

アジア防災センター(神戸市中央区)は4月4日、スマトラ沖地震で被災したインドネシア政府に、防災意識の啓発と研究機能を備えた「津波研究センター(仮称)」を、被害の大きかったアチェ州に設立することなどを提案した。アジア防災センターが昨年12月の地震直後に行った現地調査に基づく提案で、研究員が同政府を訪れて説明した。同センターによると、阪神・淡路大震災後に神戸市中央区に設立された「人と防災未来センター」のような施設を想定。被災体験を語り継ぐシアターの設置や、津波の発生メカニズムを解説したパネル展示などを提唱した。研究機関については、地元の大学も関心を示しているという。このほか、津波に関するパンフレットやポスターの配布など啓発プロジェクトの実施や、住民参加によるハザードマップづくりを推進する「防災タウンウォッチング」も併せて勧めた。(神戸新聞 2005.4.5)

■ 各国のイスラム教系NGO、長期的なアチェ支援事業に共同で取り組む

イスラム教系NGOは国際的に協力し、共同資金に基づく長期的なアチェ支援計画を行っていく。クアラルンプール市バンサ地区にあるムスリム・エイド・アジアの事務所で4月3日に行われた会合の後、ムスリム・エイド・オーストラリアの会計担当イマン・パルトレジョは上のように語った。この計画に参加するNGOは、グローバル・ピース・マレーシア、ムスリム・エイド・アジア(マレーシア)、ルマ・ザカット(インドネシア)、イスラム教育開発センター(オーストラリア)、国際ムスリム女性連合、東南アジア・太平洋イスラム布教地域会議、イギリスとオーストラリアのムスリム・エイドである。イギリスとオーストラリアのそれぞれのムスリム・エイドが供出する合計1,500万リンギ(約4億2,000万円)の資金が、この計画の財源となる。イマン会計担当によると「計画の第一段階として、効率的に計画を調整し支援を提供すべく、ムスリム・エイド・インドネシア基金(Yayasan Muslim Aid Indonesia)をバンダアチェに設立する」とのこと。支援事業の中心は教育、住宅、給水、公衆衛生などの分野で、移動診療所やカウンセリングも提供していく予定。イマン会計担当は「将来的にアチェの人びとが自ら資金を運用し、自らをケアしていけるような計画を立案している。計画は2〜3年かけて長期的に行われる」と語った。(New Straits Times 2005.4.3)

■ アチェ駐留部隊の撤退はインドネシア政府の要請に応じたもの

ナジブ副首相によれば、インドネシア政府はマレーシア政府に対してアチェに駐留しているマレーシア国軍部隊をできるだけ早期に撤退させるよう要請してきたとのこと。「間もなく全ての人員が撤退するだろう。これによってジャントとローンに被災孤児支援センターやその他の施設の建設を予定していたわれわれの計画は、変更を余儀なくされる」。ジャントとローンにおける施設の建設には、すでに350万リンギ(約9,800万円)が投じられた。これらの計画は民間企業に引き継いでもらい、継続させていく意向とのこと。(Star 2005.4.6)

■「建築物の質的向上を通じた防災に関するワークショップ」開催される

4月17日から3日間、バンダアチエで「建築物の質的向上を通じた防災に関するワークショップ」が開かれている。このワークショップはマレーシア医療救助協会と国連の組織するアジア防災・災害救済ネットワーク(ADRRN)が共催するもので、自然災害の被害を最小に留める方法を人びとに普及することを目的とし、NGOや土建業者、建築作業員など100人が参加する。チャイラニ・アチェ州都市・地区行政局長がワークショップを正式に開会し、開会式ではマレーシア医療救助協会会長のジェミラー・マフムド医師が家屋の再建に励むアチェの人びとに対して、地震の揺れに耐えうる家屋を建築するよう呼びかけた。マレーシア医療救助協会は『津波とあなた』という冊子を作成し、チャイラニ局長にその冊子を1万部託してアチェの人びとに配布してもらい、防災知識の普及を図る。(Utusan Malaysia 2005.4.18)

■ワークショップには耐震設計の専門家も出席

ADRRNとマレーシア医療救助協会が共催し、バンダアチエで開かれている「建築物の質的向上を通じた防災に関するワークショップ」には、インドネシアやアジア諸国から約50のNGOが参加する。このワークショップには、地震に耐えうる木造建築研究で知られる日本の小林正美教授や、ネパールのアモド・ディキシット氏やスリヤ・ナラナン・シュレスタ氏など耐震設計の専門家も参加する。(Utusan Malaysia 2005.4.19)

■ADRRNの設立過程

アジア防災・災害救済ネットワーク(ADRRN)は、神戸市にあるアジア防災センターと国連人道問題調整部の調整のもと、2002年2月にアジア地域の30のNGOが会合した結果、同年に設立された機構である。基本的な体制を整え、方向性を固め、実行に移されたのは2004年6月だった。それを主導したのは、マレーシア医療救助協会の会長であり、ADRRN調整委員長でもあるジェミラー・マフムド医師である。ADRRNの主要な任務は、アジア太平洋地域を対象として、NGOどうしあるいはNGOと他の諸機関との調整と協力を促進し、災害に対して迅速に反応することにより災害の規模を最小限にとどめることである。(Utusan Malaysia 2005.4.19)

■国際サッカー連盟、地震津波支援基金の方針をめぐって意見が二分

国際サッカー連盟(FIFA)では、地震津波支援基金の方針に関して意見が二分されている。一方は短期的なサッカーの振興を支持し、もう一方はサッカー設備の復興・再建を支持している。FIFAとインドネシア・サッカー協会が4月13日にバンダアチエで開催したコーチと審判のためのセミナーで、デイヴィッド・ボルジャ FIFAアジア・オセアニア地区振興委員長が上のように明らかにした。ボルジャ委員長によると、FIFAとアジアサッカー連盟(AFC)は3月にバルセロナで行われたオールスター慈善試合とFIFA加盟各国からの寄付によって1,000万米ドル(約10億6,400万円)を集めたとのこと。「われわれはコメの売買をしているわけではないので、被災者に食糧を提供しても意味がない。インドネシアやスリランカ、インド、タイ、モルディブのサッカーの復興のために義捐金を還元するのが最適だろう。これらの国では津波によってサッカー設備も破壊されたため、われわれはその復興と再建を行うつもりだ。だがその前にな活動を行わねばならない」。ボルジャ委員長は、津波の犠牲者の中にはコーチや審判、選手も含まれていたため、新しい人材を育成することが先決だと考えている。マレーシアからのセミナー参加者はボルジャの意見を支持している。(Bernama 2005.4.14)

■調査・研究

■復興の現状 課題を報告 大阪でフォーラム

昨年末と3月に相次いだスマトラ島沖大地震の復興への課題を探ろうと、インドネシアやタイなどの地域の研究に携わる専門家や学生たちが4月23日、大阪府吹田市の国立民族学博物館でフォーラムを催した。

約50人が参加し、現地の被災の様子を報告し、復興への問題点を指摘した。同博物館の主催で、インドネシア、タイ、インドやスリランカを視察した文化人類学や考古学などの研究家8人が出席して報告した。

死者が集中したインドネシアのアチェ地方の歴史を研究している大東文化大非常勤講師の西芳実さんは、独立派のゲリラ組織と国軍に地域が二分されてきたアチェの歴史に触れ、「復興活動が紛争を支える仕組みを変えるきっかけになりうる」と訴えた。アチェで建物の被災状況を調べた防災科学技術研究所研究員の堀江啓さんは、イスラム教のモスク（礼拝所）の多くが基礎が頑丈なために被災を免れていたことを指摘。東大大学院に在籍する市野沢潤平さんは、被災後、タイ・プーケットへの観光客が激減し、地域経済に影響を与えている実態を報告した。参加者からは「地域の実情にあった支援のためにNGOと地域の研究家が連携する必要がある」との意見が出た。（朝日新聞 2005.4.24）

■ インド洋大津波 被災地復興支援 研究者8人、吹田で報告／大阪

インド洋大津波の被災地で復興を支援する際の課題を検討する研究フォーラムが4月23日、吹田市の国立民族学博物館で開かれた。文化人類学や地域研究の専門家でインドネシア、スリランカ、インド、タイの現地に入った研究者8人が報告した。緊急支援のNGOをまとめる「ジャパン・プラットフォーム」モニタリング・チームでスリランカを担当した桑名恵さんは「外部から支援するためには、ニーズ調査などいずれの支援段階でも文化人類学との連携が大切だ」とコメントした。同博物館が行っている「災害対応プロセスに関する人類学的研究」の一環。インドネシア・アチェで国軍と政府による海外支援を管理する試みマインドでの漁民間の階層差▽タイ観光地での風評被害ーなど地域別に異なる課題があることを各研究者が説明。歴史、地域、政治状況を踏まえて、地元の情報を収集することの重要性が強調された。防災についても、京都大学大学院地球環境学堂のラジブ・ショウ助教授は「環境問題として考えてきた、マングローブやサンゴ礁など沿岸保全の問題と結びつけて考える必要がある」。林勲男・同博物館助教授は「現地に合った防災にするためには、日本は技術などのハード移転だけでなく、ソフト面でも現地の研究者と連携を充実させるべきだ」と指摘した。（毎日新聞 2005.4.25）

アチェ分離独立問題

■ 軍事衝突・治安作戦

■ プマタンシアンタル出身の将校、北アチェ県での戦闘で死亡

3月22日未明、北アチェ県ニサム郡でGAMとインドネシア国軍とのあいだに銃撃戦があった。この結果、第125歩兵隊将校ハマミ伍長が銃弾数発を受けて死亡した。ハマミの遺体は3月22日朝9時半、ヘリコプターで生まれ故郷の北スマトラ州プマタンシアンタルへ運ばれた。GAMの活動は数週間前から住民の生活を脅かすようになっていたという。治安回復作戦司令部副司令官スロヨ・ギノ准将は「われわれは降伏してアチェの建設に加わろうとするGAMを受け入れる」と述べた。ロスマウエの作戦本部メディアセンターの情報によると、ニサム郡での戦闘は125歩兵隊による定期パトロールの際に起きた。国軍兵士10名は7名のGAMメンバーに阻まれ、銃撃戦になったという。この1週間で北アチェ県では銃撃戦が4回発生している。（Waspada 2005.3.23）

■ 国軍とGAMが銃撃戦、その際にGAMに拉致されていた民間人逃げ出す

自由アチェ運動（GAM）によって拉致されていたアチェタミアン県のタンジュン・マンチャンク・ジュルン・ムダ農園企業スタッフのアヴィヴは3月27日夕方、アチェタミアン県に派遣されていたインドネシア国軍リアウ132大隊とGAMメンバーとの銃撃戦の末、無事に解放された。アヴィヴが3月27日夜にカランバル地区軍管区司令部で説明したところによると、アヴィヴは3月25日夜10時半ごろ自宅で武装したGAMメンバー9名に拉致された。アヴィヴは森に連れて行かれ、身代金として3億ルピアを要求された。「交渉の末、最後は1億ルピアになった」という。3月27日夕方4時半ごろ、アヴィヴはGAMメンバーとともにセクラクカナン村の丘陵部で休んでいた。GAMメンバーも腰布でつくった椅子に腰掛けてくつろいでいた。そこへ

突然銃声が響き渡り、国軍とGAMとの銃撃戦になった。アヴィヴは逃げるチャンスと考え、川のほうへ向かって逃げだという。アヴィヴを誘拐した9人のGAMメンバーは、アヴィヴによれば「イントネーションからみてアチェ人に間違いないと思った。私と話すとき以外はアチェ語を使っていた。うち2人はインドネシア語を話すときにアチェなまりがあまり強くなかった」という。一方、カランバル地区軍管区司令官ブディ・クルニアワンは、GAMとの銃撃戦があったことを認めた。ブディによると、アヴィヴはGAMから逃げ出し、住民の家に助けを求めた。住民はセクラックキリ村にいた132大隊に報告した。ブディは132大隊から報告を受け、地区軍管区司令部からアヴィヴを迎えにいったという。銃撃戦での犠牲者の有無は不明。現在、逃走したGAMを追跡中とのこと。(Waspada 2005.3.28)

■ 警察機動隊の武器を強奪しようとしたGAMメンバー、ビルンで銃殺される

ビルン県警察署長ハンドノ・ワリは3月28日、GAMメンバーと見られるビルン県クタブラン郡クアラチュラベ村のシャムスル・バフリ(25)が3月27日にクタブラン村派出所にいた警察機動隊に撃たれて死亡したことを認めた。3月27日午後2時ごろ、2名の警察機動隊員が長銃をかついでクタブランの市場へ徒歩で向かっていたところ、クタブラン・モスクの正面でシャムスル・バフリが突然2人に襲い掛かり、武器を奪おうとした。殴り合いとなり、銃を肩にかつぐための紐が切れたが、シャムスルは銃を奪うことができず姿をくらました。警察機動隊員は後ろから発砲しようとしたが、人通りもあり、住民を誤って撃つ可能性もあったので、発砲を思いとどまったという。事件を知った他の機動隊員が搜索活動を行ったところ、それらの警察機動隊員もシャムスルに銃を奪われそうになった。殴り合いになり、銃を奪うことができなかったシャムスルはまたも逃げ出そうとしたが、今後は他の機動隊員に阻まれた。機動隊員は警告の発砲を行ったが、それでもシャムスルは逃げ続けようとしたため、機動隊員はやむなくシャムスルに向けて発砲し、その結果、シャムスルは死亡したという。遺体は警察機動隊の詰所からビルンのファウジア病院に運ばれた。死因は左腰から右胸にかけて受けた銃創によるもの。家族が遺体を引き取りすでに埋葬した。(Waspada 2005.3.29)

■ 軍事作戦と人権侵害

■ 人権活動家、人権侵害に関与した疑いのある軍人の昇進を批判

4月1日、ユドヨノ大統領に近い将校や人権侵害に関与したとされる将校の昇進が行われたことについて人権活動家たちが批判した。人権活動家はこれらの人事がインドネシア国軍の改革を後退させるものだと考えている。アチェ州を管轄しているイスカンダルムダ地方軍管区の司令官エンダン・スワルヤ少将は、アチェで分離主義者の運動を掃討する作戦を率いてきており、このほど副参謀長に任命された。人権活動家ルスディ・マルパウンは、エンダン・スワルヤが2003年から行った2年間にわたる軍事作戦により、アチェに「水平的な紛争」をもたらしたと非難している。また、シアクアラ大学講師で社会学者のアチェ人オットー・シャムスディン・イシャクは「エンダンのような感受性に欠け、アチェの社会構造をシステムティックに破壊してきた人物が三ツ星に昇進するならば、アチェをはじめ各地で起こっている人権侵害を止めることなど期待できるはずもないと考える」と述べた。エンダン・スワルヤ少将の副参謀長昇進により、イスカンダルムダ軍管区司令官には西ヌサトゥンガラ州を管轄するウダヤナ地方軍管区司令官だったシャフルディン・ユスフ少将が任命された。また、現在、国軍報道官を務めているシャフリ・シャムスディン少将は国防省事務次官に任命されるとの噂がある。「シャフリは東ティモールやアチェにおける人権侵害において中心的な役割を果たした人物であり、1998年のトリサクティ大学での学生銃撃や5月暴動にも関与しているとされていることを忘れることはできない」とオットーは語った。シャフリ自身はこうした批判に対し「誰にでも自分の意見を言う権利がある。話させておこう、しかし私は沈黙を守る」と答えている。(Jakarta Post 2005.4.2)

■ 新副参謀長は「ジュネーブ協定違反」「民間人663人の殺害に責任がある」

人権活動家ルスディ・マルパウンは、エンダン・スワルヤが2003年から行った2年間にわたる軍事作戦が

アチェに「水平的な紛争」をもたらしたと非難した。自由アチェ運動メンバーの家族や親戚に「公共の敵」との烙印を押したり、その家を焼くよう命じたりしたという。当時、軍はGAMメンバーに関係があると思われる人物の家に赤いペンキを塗って印をつけるという方針をとったこともあった。ルスディによれば、こうしたやり方は民間人や一般住宅・モスク・文化拠点などを攻撃してはならないとした1949年ジュネーブ協定に違反するものである。「エンダン・スワルヤの指揮下で少なくともアチェ人の民間人663人が殺された」。(Jakarta Post 2005.4.2)

■「軍事作戦はアチェ人を子どもまでも国家の敵とみなすもの」

シアクラ大学講師でアチェ人の社会学者オットー・シャムスディン・イシャクは4月1日、イスカンダルムダ軍管区司令官エンダン・スワルヤ少将が「2003年からの軍事非常事態下のアチェにおける」軍事作戦において、GAMメンバーの親類縁者に対し「公共の敵」とのレッテルを貼ったことがアチェ社会の分断を招くものだったと批判した。こうした政策は、アチェ人なら子どもまでもが国家と社会の敵であるとみなすものであり、一種の孤立化政策だという。民間人は最寄の軍駐屯地に報告することを義務づけられ、しなくてはならぬ何らかの制裁処置を受けねばならず、民間人を傷つけてきた。(Jakarta Post 2005.4.2)

■和平交渉

■インドネシア政府、GAMとフィンランドで第3ラウンドの和平交渉

フィンランドのアハティサリ元大統領の弁公室は4月8日夜、「インドネシア政府と分離組織GAMの代表は4月12日から17日までヘルシンキで第3ラウンドの和平交渉を行う」と発表した。フィンランドのマスコミの報道によると、インドネシア政府はまもなく行なわれる第3回ラウンドの和平交渉に非常に大きな希望をよせ、これによって、アチェ問題を平和的に解決することを希望している。インドネシア政府はGAMの代表とかつて2回にわたってヘルシンキで和平交渉を行なったが、実質的な突破口とはならなかった。(CRI 2005.4.9)

■インドネシア政府、GAMとの協議再開へ

ソフヤン・ジャリル情報通信相は4月8日、30年にわたって続けられてきた紛争をインドネシア政府が終結させるために、GAMとの協議を再開することを明らかにした。協議は4月12日～17日にフィンランドのヘルシンキで行われる。2月に行われた第2回協議では、紛争終結の合意にいたらなかったものの、今回の協議ではより実質的な内容に踏み込んだ協議が行われるだろうとのこと。また、政府は問題が平和的に解決することを望んでいる。インドネシア側の代表団は第2回協議と同じ顔ぶれで、ソフヤン情報通信相のほか、ハミド・アワルディン法務人権相、国民福祉調整省からファリド・フサイン、ウィドド政治治安調整相が参加する。GAMが政府の提示する特別自治を受け入れるかどうかについて、ソフヤン情報通信相は、GAMとのあいだに「自治」をどう表現するかで意見の相違があるものの「実質的な部分で議論を行う必要がある。今回は進展があることを期待している」と述べた。(Jakarta Posta 2005.4.9)

■新和平案で独立派に譲歩／アチェ、恩赦と経済振興

インドネシア政府がアチェ州の独立紛争解決に向け作成した新和平案の内容が4月11日明らかになった。独立派ゲリラの恩赦のほか、国営農園の譲渡、経済振興基金創設など新たな譲歩を多数盛り込んでおり、ヘルシンキで12日始まる第3回和平協議で独立派武装組織「自由アチェ運動」(GAM)に提示する方針。昨年12月のスマトラ沖地震で最大の被災地となったアチェ州では、独立紛争が復興の最大の障害となっており、日本や米国は和平の早期実現を促している。新和平案は独立闘争の放棄と国軍駐留の容認を条件としており交渉は難航が予想されるが、大規模な復興支援を約束した国際社会の圧力を反映し、これまでより踏み込んだ内容となった。(四国新聞 2005.4.11)

■ 危機管理イニシアチブ「GAMとインドネシア政府双方に現実的になることを求める」

インドネシア政府とGAMとの協議を仲介している危機管理イニシアチブの代表メリー・マリアは4月8日、電子メールを通じてAFP通信に対し、「両者が交渉を継続するために協議を続けることに合意したことをとても嬉しく思う」との声明を伝えた。また、紛争が長期化していることを十分に踏まえた上で、協議にあたっては全ての勢力が現実的になる必要があると述べ、両勢力の対応を促した。(Tempo Interaktif 2005.4.9)

■ GAM、インドネシア政府との対話で具体的な成果が出ることを期待

GAM広報担当者のバフティアル・アブドゥッラはストックホルムで4月10日、同月12日から予定されているインドネシア政府との3度目の協議を前に、インドネシア政府との対話で具体的な成果が出ることを期待していると述べた。2005年2月に開かれた第2回の協議にインドネシア側代表として出席したソフィヤン・ジャリル情報通信相によれば、第2回協議でGAM側に実質的な協議を行う容易があったにもかかわらず成果が出なかったのは、インドネシア政府が提示した「特別自治」という用語にGAM側が難色を示したためだった。これに対しバフティアル・アブドゥッラは、第2回協議ではさまざまな障害があったと指摘していた。バフティアルによれば、国軍とGAMとの武力衝突が続いていたばかりか、国軍も2004年12月26日以後に国軍が殺したGAMメンバーが260人であると公表していたほどだった。「われわれにとって重要なのは、すべての勢力が武力を用いるのをやめるということだ。それなしに話をするのは難しい」とバフティアルは述べている。(Tempo Interaktif 2005.4.10)

■ アチェ和平協議が前進 自治政府、財政基盤で一致

インドネシア・アチェ州の独立派武装組織「自由アチェ運動」(GAM) スポークスマンは4月14日、政府側とヘルシンキで行っている和平協議で、独立要求を棚上げにして自治政府樹立を目指す方針を明確にし、焦点となる天然ガス収入分配など自治政府の財政基盤をめぐる交渉が「相互理解に達した」と語った。政府代表団のアウルディン法務・人権相も「協議は前進した」としており、双方は昨年12月のスマトラ沖地震の最大被災地であるアチェ州の復興の鍵を握る停戦実現へ向け、一步近づいたとみられる。GAMスポークスマンのアブドラ・バクティアル氏は共同通信に「議題は独立でなく、自治政府だ。資源収入の透明性確保や、独自の徴税制度確立などを今後詰める」と述べた。(神戸新聞 2005.4.14)

■ GAM、インドネシア政府と合意に至るとの見通し

GAMの広報を担当しているバフティアル・アブドゥッラは4月15日、第三ラウンドに入ったインドネシア政府との協議が建設的に進められていることを明らかにし、「いずれ合意に至るものと考えている」と述べた。ただし、インドネシア国軍の部隊が新たにアチェ州に派遣されていることについては不満を持っており、最終的な合意にはまだ至っていないという。バフティアルはインドネシア国軍がアチェ州に3000名を新たに派遣することにした決定について「津波の犠牲者に緊張を与えるものだ。国軍はアチェ州に来るばかりで立ち去らないことが問題だ」と述べた。GAMとの協議が順調に進んでいることはインドネシア政府も認めている。さきにユスフ・カラ副大統領は、両者が現在、インドネシア政府が提示する「特別自治」とGAMが提示する「自己統治」の内容を一致させる試みを行っていると言っている。(Tempo Interaktif 2005.4.15)

■ 副大統領「GAMとの協議は合意にいたるだろう」

ユスフ・カラ副大統領は4月15日、第三ラウンドに入ったGAMとの協議について、進展が期待できるとの見解を明らかにした。現在、インドネシア政府が提示する「特別自治」[special autonomy]とGAMが提示する「自己統治」[self governance]の内容をすり合わせる試みを行っているが、副大統領によれば「この2つの概念は基本的に同一であり、意味論的な問題を残すばかりだ」という。この概念をめぐる6つの論点から検討が行われており、その結果はいずれ代表団から報告があるとのこと。両者はすでに単一国家とし

でのインドネシア共和国という枠組みのなかで議論を行うことについて合意に達しており、「独立について議論しないことでは意見の一致を見ている」という。アチェ経済を統括する規則をどのようにするかについても議論されているが、これも、解釈の相違はなく、すでに実質的な内容に踏み込んだ議論になっているという。(Tempo Interaktif 2005.4.15)

■ インドネシア政府と自由アチェ運動 全面的な解決達成を目指す

インドネシア政府と自由アチェ運動の代表は4月16日、フィンランドの首都ヘルシンキで行われた第3回平和交渉の後、「アチェ問題を解決し、持久的で、全面的な解決を求めるために、共に努力していく」と表明しました。今回の5日間に亘る平和交渉は、フィンランドのアハティサーリ元大統領が主催したもので、交渉に参加した双方は、これからの交渉における指針的原則について合意に達すると共に、地域的組織が、交渉双方の担うべき義務履行を監督することに歓迎の意を表しました。双方は、5月26日、ヘルシンキで第4回平和交渉をおこなう予定です。伝えられるところによりますと、双方は今回交渉で主にアチェでの自治実施問題について討議しましたが、この問題は自由アチェ運動の代表が提案したものです。(CRI 2005.4.17)

■ アチェ和平対話、政府と独立派「自治政府樹立」で一致

ヘルシンキで開かれていたインドネシア政府と同国アチェ州の独立派武装組織「自由アチェ運動」(GAM)との第3回和平対話は4月16日、終了した。対話では、GAMが独立要求を事実上棚上げにして自治政府樹立を目指す方向で初めて一致。政府が提唱する「7～8月の和平合意実現」(ユスフ副大統領)に向け、一定の前進をした。次回対話は5月26日～31日に行われる。対話を仲介したフィンランドのアハティサーリ前大統領によると、双方は和平合意が成立した場合、欧州連合(EU)や東南アジア諸国連合(ASEAN)など地域機構による停戦監視や監査の受け入れを容認。GAM構成員の社会復帰や政治参加に向けた協議の促進、同州から輸出される天然資源の利益配分の透明性確保などでも合意した。ただ、インドネシア国軍は4月14日に3000人の部隊の増派を決めたほか、現場では戦闘が続いている。GAMも独立要求の放棄を正式表明したわけではなく、なお不確定要素が多い。(読売新聞 2005.4.17)

■ GAMとインドネシア政府との協議、次回は5月末

インドネシア政府とGAMは4月16日、第4回和平協議を5月26～31日に開催することで合意した。仲介役となった危機管理マネジメントのマルティ・アティサアリは、協議の様子を「見通しは明るく建設的なものだった」と説明した。アティサアリによれば、両者は「恒久的かつ包括的な解決」の実現に努力し続けることで合意しているという。現在、アチェにおける統治のあり方と総選挙制度を改革する可能性について議論する枠組みづくりを行っているほか、GAMゲリラ兵士に対する恩赦、汚職の撲滅について議論が続けている。また、中央政府とアチェ政府とのあいだの予算配分についても見直しが行われている。交渉が続けられている間、現場における双方の実戦部隊の動きをどのようにコントロールするかについては、リージョナルな組織[ASEANなどを想定していると思われる]が今後何らかの役割を担うことも検討されているという。(Antara 2005.4.17)

■ 大統領「津波によって紛争被害者が減少した」

スシロ・バンバン・ユドヨノ大統領は4月25日、アチェを襲い16万人を犠牲にした津波が、結果としてインドネシアで紛争による死者数を減少させたとの見解を述べた。「紛争という点から見れば、事態はコントロールされており、これはよいニュースだ」「アチェ州とパプア州では紛争による人的被害が最小に抑えられている」。2004年12月の津波はアチェで12万6000人以上を犠牲にしたが、ジャカルタ政府と反乱勢力の双方に対し、和平協議を再開させる契機となっていた。(Jakarta Post 2005.4.26)

その他

■ 香港俳優のインドネシア訪問で華人の地位改善を

香港の人気俳優ジャッキー・チェンとエリック・ツァンは4月17日にインドネシアを訪れ、被災地を訪ねるとともに、ユドヨノ大統領と面会する予定であるとのこと。3月29日にスマトラ沖で再度地震があったが、インドネシアを訪れようというエリック・ツァンの意志は揺るぎない。エリック・ツァンは、すでにアチェの被災地を訪れたジョップマン・トーとセシリア・ジョンにも同行を呼びかける考えとのこと。この訪問はインドネシア側がアレンジしたもので、エリック・ツァンはこの機会を通じてユドヨノ大統領と華人の関係をより近づけ、インドネシアで華人の排斥が起こらないようにしたいと語る。(星洲日報 2005.3.30)

■ ジャッキー・チェンなどがアチェに到着

ジャッキー・チェン、エリック・ツァン、2004年ミス中華の李詩琪、2004年ミスワールドのマリア・ジュリア・ガルシア・マンティラ、フェニックス・テレビ(鳳凰衛視)の呉小莉キャスターなどが4月18日、津波被災者を訪問するためインドネシアのアチェ州に到着した。この訪問はフェニックス・テレビが企画した。(星洲日報 2005.4.19)

【フェニックス・テレビ:1996年3月に開局した中国語の衛星テレビ局。アジア地区50数カ国と、ヨーロッパ・北米40カ国で中国語番組を提供している。(篠崎)】

■ ジャッキー・チェン、インドネシアで慈善コンサートを計画

ジャッキー・チェンとエリック・ツァンはインドネシアに3日間滞在し、自分の目で津波被災地の状況を見てきた。被災地の経済活動を振興するため、世界各国の歌手をインドネシアに招いてコンサートを行う計画を立てているという。今回の訪問で一行は、インドネシアのユドヨノ大統領からインドネシア人も中国人も同じ家族であるという言葉を得た。一行は4月18日に津波の被害が最も大きかったアチェ州を訪れたほか、華人の人口が多いメダン市を訪れ、同市最大の避難民収容所を訪問した。ジャッキー・チェンは突き動かされたようにこう語った。「インドネシアに来たのは今回が初めて。インドネシアの状況はよく分からなかったが、彼らを助けなくてはと思っていた。慈善活動や災害支援は国や民族を問わず、互いに分け隔てなく行われるべきものだからだ。今回インドネシアを訪問したぼくたちの一行には、フェニックス・テレビのスタッフもいるし、ミスワールドやミス中華、ミスインドネシアもいる。ぼくらは全世界の愛を携えてインドネシアにやって来たんだ」。(星洲日報 2005.4.21)